

# 持続可能な暮らしを学ぶ ESD スタディーツアー報告書

— インドにおけるサステイナブルな生活様式と実践 —



2010.2.6～14

インド（コルカタ・マカイバリ・シッキム）

2009年度スタディーツアー実行委員会  
聖心女子大学 永田佳之研究室

# 持続可能な暮らしを学ぶ E S Dスタディーツアー

- インドにおけるサステイナブルな生活様式と実践 -



2010. 2. 6～14  
インド  
(コルカタ・マカイバリ・シッキム)

2009 年度スタディーツアー実行委員会  
聖心女子大学 永田佳之研究室

## はじめに

「愛ってなんだろう。愛に溢れている人々と、愛を求めている人々。そしてそういう人々を前に何もできない自分がいる — そんなことを感じた旅でした。」・・・インドへのスタディツアーの最後のふり返りの時間のときに、発展途上国を訪れたのが生まれて初めてであるという2年生が語った言葉である。

サスティナビリティをテーマにしたスタディツアーの実施は3回目になるが、今回のツアーに参加した学生の大半は、いわゆる発展途上国と称される地域に足を運ぶのは初めてであり、それだけにコルカタの空港に降りた瞬間から目に入ってきた光景は別世界であったようだ。障がいをもった子どもの物乞い、大量の荷をリキシャーで運ぶ若者、路上で寝たままの老人、車道を堂々と横断する牛、痩せ細った犬・・・。

特に貧困地域で目の当たりにした子どもや老人の姿は学生の目には「愛を求めている人々」として映ったのであろう。しかし、当初は想像を絶するように思われた貧困世界としてのインドも旅がすすむにつれ、多様で豊かな世界へと変わっていったことも事実である。

コルカタ（旧称カルカッタ）の街の賑わい、マザーテレサの家と孤児院で出会った人懐こい子ども達、北インドのシッキム旧王国で黎明に堪能した 8,500 メートル級の雄大な尾根、チベット寺院で目にした密教の細密画など、これまで目にしたことのない鮮やかな仏教文化、チャールズ皇太子やグライ・ラマ法王も愛飲すると言われるマカイバリ紅茶の茶園でのホームステイ、世界遺産にも登録されているトイ・トレインでの冒険、最後の日に訪れた悠久の流れのガンジス河・・・9日間の旅を通して、学生たちは実に多様なインドと出会った。

ツアーのハイライトは、マカイバリ茶園でのホームステイと調査であった。学生たちは、エコツーリズムやバイオダイナミックの農法、フェアトレード、生物多様性の4つのチームに分かれ、フィールド調査を実施し、その調査結果を茶園主の前で発表した。また、2〜3名ずつのグループでホスト・ファミリーにお世話になり、毎朝できたてのチャパティと世界一の紅茶にあずかった。中には体調を崩す学生もいたが、インド人のご家庭での心温まるケアとホスピタリティをもってなんとか乗り切った体験は一生忘れられないであろう。

コルカタで目にしたような愛に飢えた人々との出会いにはじまり、旅人に愛を与えてくれる村人との出会いで終わったスタディツアー。文字通り、多様性に富む社会と豊かな文化、そして大自然を満喫した日々であった。この報告書には、そうした日々のエッセンスが凝縮されており、意味充実した学生たちの「非日常」の一旦をお伝えできれば幸いである。

最後になるが、この場をかりて、スタディツアーの実現のためにご尽力くださった関係者の方々、特に、準備段階よりお世話になったマカイバリ・ジャパンの皆様、(株)大陸旅遊

の大塚辰徳さん、現地でお世話になったバナジー茶園主ご夫妻、同茶園での調査等のお手伝いを献身的にして下さった石井博子さん、このスタディーツアーを研修として認めて下さった聖心女子大学関係者に心よりお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

2009 年度 ESD スタディーツアー・世話人  
永田佳之



## 目 次

### 第一部 スタディーツアーの成果と課題

はじめに

目次.....	1
1. スタディーツアー訪問国基本情報 .....	3
2. 感想文 .....	5
(1) 岡野内 綾 『母なる大河』 .....	6
(2) 北村 沙知 『インドからの学び』 .....	7
(3) 田中 翔子 『インド人から教わったこと』 .....	9
(4) 蓮井 愛子 『私が ESD ツアーに参加して感じたこと』 .....	10
(5) 大堀 奈海 『九日間』 .....	12
(6) 来住 美波 『希望』 .....	14
(7) 田平 あさ希 『MISSION』 .....	15
(8) 三原 萌 『出会い』 .....	17
(9) 松井 香奈 『複雑系インドに宿るシンプルな祈り』 .....	19
(10) 武田 元子 『インドの感想』 .....	21
3. 2009 年度スタディーツアー・アンケート .....	23
4. 資料 .....	35
(1) スタディーツアー日程 .....	35
(2) 参加者リスト .....	39
(3) スタディーツアー事前勉強会日程 .....	40
(4) 事前勉強会資料 .....	41
5. 写真 .....	59
6. ひとこと .....	70

BOX 1. 歌 .....	72
BOX 2. ラジャ・バナジー氏講演会記録 .....	74
BOX 3. マカイバリ・ティーの入れ方 .....	80

## Part II English Report

Preface.....	85
1. Programme Schedule .....	87
2. List of Participants .....	91
3. Our feelings.....	93
(1) Aya Okanouchi “India Called Me” .....	93
(2) Sachi Kitamura “Touchable” .....	94
(3) Shoko Tanaka “India as “Home” of our world-Variety of Smiles-☺” .....	95
(4) Aiko Hasui “Impressions of Makaibari” .....	97
(5) Nami Ohori “Nine Days” .....	98
(6) Minami Kishi “HOPE LAND” .....	99
(7) Asaki Tabira “MISSION” .....	101
(8) Moe Mihara “Encounters” .....	102
(9) Kana Matsui “Wreck and Ash - India” .....	104
(10) Motoko Takeda “About India” .....	105
4. Field Study Presentations .....	107
5. What is Our Study Tour in a Nutshell ? .....	111
BOX 4. Swaraj Kumar Banerjee’s Lecture .....	112
BOX 5. Theme Song of the 2010 Study Tour .....	118

# 1. スタディーツアー訪問国基礎情報

## <インド India>

- 1.面積:3,287,263 平方キロメートル(インド政府資料:パキスタン・中国との係争地を含む)
- 2.人口:10 億 2,702 万人(2001 年国勢調査)人口増加率 1.95%(年平均:インド政府資料)
- 3.首都:ニューデリー (New Delhi)
- 4.民族:インド・アーリヤ族、ドラビダ族、モンゴロイド族等
- 5.言語:連邦公用語はヒンディー語、他に憲法で公認されている州の言語が 21
- 6.宗教:ヒンドゥー教徒 80.5%、イスラム教徒 13.4%、キリスト教徒 2.3%、シク教 1.9%、仏教徒 0.8%、ジャイナ教徒 0.4% (2001 年国勢調査)
- 7.識字率:64.8% (2001 年国勢調査)
- 8.政体:共和制
- 9.元首:プラティバ・デヴィシン・パティル大統領
- 10.議会:二院制(上院 245 議席、下院 543 議席)
- 11.政府:(1) 首相 マンモハン・シン  
(2) 外相 S.M. クリシュナ

### 12. 略史

年月	略史
1947 年	英国領より独立
1950 年	インド憲法の制定
1952 年	日印国交樹立、第 1 回総選挙
1950 年代～	कांग्रेस党が長期間政権を担当 (1977～1980 年、1989～1991 年を除く)
1990 年代	経済自由化政策の推進
1998 年	インド人民党 (BJP) を中心とする連立政権が成立
2004 年	कांग्रेस党を第一党とする連立政権が成立
2009 年	कांग्रेस党を第一党とする連立政権 (第 2 次マンモハン・シン政権) が成立

[参考 URL] 外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofa> (2010 年 6 月 18 日にアクセス)

## 2. 感想文

岡野内 綾 『母なる大河』

北村 沙知 『インドからの学び』

田中 翔子 『インド人から教わったこと』

蓮井 愛子 『私がESDスタディーツアーに参加して感じたこと』

大堀 奈海 『九日間』

来住 美波 『希望』

田平 あさ希 『MISSION』

三原 萌 『出会い』

松井 香奈 『複雑系インドに宿るシンプルな祈り』

武田 元子 『インドの感想』

## 母なる大河

岡野内 綾 (1年)

「ガンジス川」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。神聖な川。水質汚染の進んだ川。死者を埋葬する川。インド人が沐浴する川…。と様々なイメージを持つだろう。だが、それはどこか非現実的なもので、ガンジス川の本当の姿を知っている人は少ない。私も、この川を訪れる前、ガンジス川は、死体を埋葬した箱がぶかぶか浮かび、そのそばで洗濯物をしている人がいる。つまり、生と死が交差する川。そんなイメージを持っていた。しかし、私がこの目で見たガンジス川は死者を埋葬した箱でもなく、洗濯物をしているところでもなかった。私が見たのは、一瞬レインボーブリッジかと思うような大きな橋と、大量の花・祭儀のつぼのようなもの。そのそばで沐浴をする人々。それは、私が思い描いていたガンジス川ではなかった。

私たちは、先入観でものごとをとらえていることが多い。そして、それを知らず知らずのうちに自分の考えを押し付けてはいないだろうか。日本では、川に物を捨てることは良くないこととされている。近頃では、私の周りでもボランティアでよくごみ拾いもプロジェクトもよく行われている。川にごみを捨てるということは、水質汚染につながり、環境に悪いことだ。しかし、インドでガンジス川のごみ拾いのプロジェクトをしてみるとなったらどうなるだろうか。インド人にガンジス川のごみ拾いをしないのか聞いてもおそらくそれは実現しないのではないかと私は考える。それはなぜか。私は以前、なぜインド人はガンジス川を大切に思うなら綺麗にしようとしないのだろうか考えていた。そこで、インド人のガイドさんにその理由を聞いた。「神聖な川だからこそなんでも流すことができる。とインド人は考えている。」そうガイドさんはおっしゃった。ガンジス川は、インドの人にとって神聖な川であり、インド人のすべてを受け入れてくれる母のように大きな存在なのだ。だから、どんなに水質汚染が進んでいる川であっても、沐浴し、祭儀を行い、そしてすべてを受け止めてくれるこの「母なる大河」が見守っていてくれるという、絶対的な安心感とともに生活をしている。だから私は、インド人にガンジス川のごみ拾いをしないのか聞いてもそれは実現しないと考えた。

私から見たらゴミに見えたものは、ヒンドゥー教徒祭儀用のものばかりだった。そしてきっとこの川のごみは、インドの人の支え・よりどころの証として、残っていくのだと思う。レインボーブリッジのような橋がかかったガンジス川は、私が思い描いていた川とはかけ離れていて、現代的なものであった。しかし、根底にあるインド人のガンジス川に対する特別な思いは、今も、昔も変わらず受け継がれていくものなのではないかと考える。私たちは、多文化と向き合う時、自分の持っている考えや常識が覆されることがある。それを先入観だけで相手の文化を見て、生活を侵害するのではなく、相手の文化をありのまま

ま、素直に自分の心の中に受け入れてはじめて、多文化を知ることができたと言えるのではないだろうか。私はインドの文化をこの「母なる大河」から学んだ。

## インドからの学び

北村 沙知 (1年)

今回が私にとっての初めてのインドということもあり、心身ともに覚悟を決めてこの旅に挑んだ。インドという国はもともと興味があったものの、あまり良いイメージを抱いていなく、正直いうと怖かった。まず到着して驚いたのが、小さい子供が私たちのところへ寄ってきてお金をねだったことだった。話を聞いていたので予想はしていたが、今まで体験したことが無かったので少し戸惑ってしまった。本当は少しでもお金をあげて、栄養のつくものでも買ってもらいたいのに、あげることがその子の将来を邪魔してしまう可能性があるという2つの矛盾に心が苦しかった。果たしてこの子に将来の夢の希望や選択肢はあるのだろうかと疑問に感じ始めていたのはこの時からだった。今回のテーマでもある“Sustainability”がコルカタに存在するのか。翌日朝を迎えてまず聞こえてきたのが、灰色の曇り空に舞うたくさんのカラスの鳴き声だった。そしてコルカタの街では朝早くから賑やかで、フィリピンと同じ空気を感じた。発展している国は電気の供給が少ないため、朝が早いのだ。朝から人間独特の精力を感じることができた。皆生きることに一生懸命なのだ。いつも「生」に純粹で、与えられた環境の中で自分の精一杯の仕事をしている。私たちの乗っていた大きなバスを見上げながら睨んでいる人もいれば、笑顔で手を振ってくれる人もいた。コルカタではあまり異性同士で歩いている姿を見かけず、女性もあまりいなかったように思えた。一方でITの看板が執拗なくらい目に入った。ITやコンピューターという最先端技術だけが先走っている中、カーストや宗教などの古さが残っていた。古さと新しさ、発達と開発という2つのものに挟まれていた。インドに到着して感じた懐かしさはここからきたのかもしれない。

今回はコルカタをはじめ、シッキム、ダージリンと3つの地域を訪れた。シッキムに着いたとき、私は安心感を覚えた。とても近代化されていて、安全だと感じたからだ。シッキムは“pampered city”と呼ばれていて、政府が整備資金を大量にかけている地域の一つである。いかに政府が大きな権力や財政力を持っているか、ということが分かった。一方でゴルカランドの独立問題やインドにおける賄賂政治などの問題を抱えているということも学んだ。

マカイバリでは、地球をはじめ、命あるものに優しい暮らしをしていた。洗濯機や掃除機などは無論無く、牛糞からつくったメタンガスから火をおこし、水も3キロも離れた場

所から汲んできたものを使用しているので無駄使いをすることはない。またエコツーリズムや白内障キャンププロジェクトなどの、まさに持続可能な未来に向けての取り組みもされている。その他にも、“Employer, employee”ではなく「パートナー」という関係作りや、「利益は社会に還元すべきだ」という4代目茶園主のバナジーさんの革新的な考えは私たちの理想とする未来への土台となるであろう。

またインドではたくさんの素晴らしい方に出会った。ポールさんからは自国への尊敬の念を忘れない大切さを学んだ。それは食べ物や水道についての注意点を教えてくださっているときだった。通常ならば、「日本人はきれいな環境で育ってきているからインドの水をそのまま飲むとお腹を壊す」などと、まるでインドの水は衛生的にも不潔であるというような表現をする。ところがポールさんは「国によってお水の中に入っている菌の種類が違います。だから違う国のお水を飲むと菌に慣れていないから、体調が悪くなってしまうかもしれません。」とおっしゃったのである。自国を一切侮辱しないこの姿勢に心が打たれた。

また、シッキムでお世話になったウダイさんには全てを受け入れる心の広さ、自分の持っている全てを他人のために使う惜しみない心を教わった。

バナジーさんの“Sustainability is a way to freedom.”という言葉である。私は「自由」とは、選択肢をたくさん持つこと、自分の好きなことを好きなときにできることだと考えている。“Sustainability”、つまり持続可能性とは人間が生きていく上で必要となる要素がバランスよく保たれていくことである。地球が温暖化によって自然が破壊されたり、自然災害が起きたりしては、人間の行動範囲が限られてきてしまう。お金が無かったり、十分な教育を受けていないというのも未来への可能性を広げることができない。私が石井さんに聞いた話によると、インドでは今でもカースト制度が根強く残っていて、階級の低い人々は職業の選択が全くないということだ。インドという国は壮大で且つ多様で、地域によって発展の仕方も違った。しかし、今のインドには自由、そして皆の暮らしがどうしたらより良いものになるか、という向上心をあまり感じなかった。

今回のスタディツアーではあまりスラム街を歩くということはしなかったし、インドという大国のほんの一部を見たということにすぎないと思う。インドはこれから経済的に成長する国である。しかし、きっとそれは上流階級の人々だけが勢力を増していくことを意味すると思う。インドはエネルギーで、様々な人と文化が混ざった国である。きっとインドが国として一致団結し、率先して持続可能な未来を築いていくのなら、きっと世界は笑顔と希望で溢れ返ることであろう。

私たちにこれから「持続可能な未来」のためにできること、それはマカイバリ茶園主のラジャさんのような、素晴らしい考えを持つ子供たちを育てていくことなのかもしれない。それはインドに限らず世界でもいえることであると思う。

## インド人から教わったこと

田中 翔子 (1年)

故郷のような温かさと、人間の生々しさを持った国、インド。ちょっと覗いたくらいでは、一概に「インドってね、」なんて言い表せないくらい広大で多様性に富んでいたのが印象的である。そんな国から帰国し数カ月が経ったが、未だにそこで過ごしたあの濃い一週間は、まるで夢の中での出来事だったかのような不思議な感覚を覚えている。そのくらい、私にとってインドという国が今まで自分が過ごし見てきた世界とは異なった世界だったのだろう。そして再び沢山のハイテクな人工物に囲まれながら、時間に追われる忙しい生活に戻った今、時々、あのゆったりとしたインドの時間の流れや、旅で出逢った人々の温かな笑顔が恋しくなる。とりわけ、朝の通勤ラッシュの殺伐とした人々の雰囲気や大都会にそびえ立つ高層ビルの山を見ると、いのちで溢れていたビビッドカラーの世界から一気にモノトーンの世界に戻ってきたんだなあ、と感じずにはいられない。それでもなお、私たちはコンクリート世界に緑を求めて観葉植物を育てたりするのだから、やはり人間も一種の“生物”であり、自然との繋がりなしには生きてゆけないのだと確信させられる。快適さをどこまでも求める競争社会の中で、どこか息苦しさをを感じる私の生活。それとは正反対の世界を見てから、「ああそっか、これでいいんだ。」と気づき、なんだか気持ちが楽になった。それと同時に、今まで当たり前のように過ごしてきた日々の生活の中に、疑問を抱くようにもなった。私たちは日々、幸せを手に入れようと何かに向かって頑張っているけれど、インドの人々は、幸せは既にここにあるということを知っていた。彼らは足りるということを知っているのだ。だから、心に余裕があったし、今を生き生きと人間らしく生きている。なんだかそこには人間の素の姿がそのまま残されていて、発展し過ぎた世界にいる私には、故郷のような懐かしさを感じさせた。そんなインドで過ごした心地よい日々を思い出すと、“豊かさ”を考えさせられる。インドの人々は、私たちの物質的豊かさと引き換えに、心の豊かさを持っていたのだ。皮肉にも“途上国”という世間の分類とは反対に、内なる精神面においては、いわゆる“先進国”といわれる私たちよりも発達しているようにも思えた。

つまり、このスタディーツアーを通してあらためて痛感したのは、当たり前のことかもしれないが、真の持続可能な社会とは人々が持続可能への心をもつことによってのみ創られるということだ。持続可能への心 — それはまさにコルカタで教わった愛、シッキムで感じた自然への感謝と多文化宗教の共生、マカイバリで体感した自然と人間のつながり、であった。『温故知新』という言葉があるけれど、まさにインドにピッタリだと思う。ガンジーgeの時代のころからずっと守られてきた、“歴史から学ぶ”ということは、持続可能な社会を目指す上でとても大事な心の一つであろう。インドを発つ最終日に見たガンジス川からも、インドの歩んできた歴史が夕日に照らされたガンジス川をゆっくりと流れてい



るように感じられた。

このスタディーツアーでは、自分の持っていない沢山の持続可能への心に出逢うことが出来た。再び日本へ戻った今、インド人から教わったこれらの持続可能な心を胸に生きていこうと思う。また、小さな輪から少しずつ、より多くの人に私が出逢った持続可能な心を伝えていきたい。

最後に、両親、先生、仲間達を始めとするこのような貴重な学びの機会を与えてくださりサポートして下さった沢山の方々や、インドで出逢った全てにお礼を言いたい。感謝の気持ちを込めて、Dhan'yavada !

## 私がESDスタディーツアーに参加して感じたこと

蓮井 愛子 (1年)

はじめに、今回私が参加したインドでのESDスタディーツアーは日本では体験できないことばかりを体験することができとても有意義なものであった。またスタディーツアーを通して自分自身がおかれている立場やものの考え方など様々なことを考える良い機会になった。

スタディーツアー前に数回行われた勉強会を通して私は「インド」という現在めまぐるしい発展を遂げている国に実際に訪れ、貧富の差を肌で感じることに對して待ちきれない気持ちでいっぱいであった。そもそも私が今回のESDスタディーツアーに参加したきっかけは、インド滞在中に訪れることになっていたマカイバリにとっても興味があったからである。どうしてマカイバリかというと、偶然にも私が大学1年生のときにJICA地球ひろばで行われたフェアトレードについての講演会の特別講師の方がマカイバリの茶園主であるバナジー氏だったからだ。彼は講演会でマカイバリでの暮らしやフェアトレードによって村がどのように循環しているかのお話をされていた。講演はとても素晴らしいもので講演を聴いてる多くの人がメモを取ったり、うなずいたり、とてもバナジー氏の言葉一つ一つに聞き入っていた。そして私は彼の講演のなかでも「Unless one is Independent, Unless one is Sustainable, One Can Never Be Free」という彼が講演の最後に言った言葉が今でも忘れられなかった。この言葉は一見当たり前なのかもしれない。しかし、私はこの言葉には何かバナジー氏の積んできた経験からその一言をおっしゃっていて、何かそこには深い意味が含まれている気がしてその言葉に對して納得したと同時に疑問を持った。そしてどのような経験を積んだら、またどのような考え方をしたら彼の言葉の意味を理解できるのか私は考え続けた。今考えると私が今回のスタディーツアーに参加した目的はマカイバリの茶園主であるバナジー氏の生活に実際触れることによって私が講演会の時に感じた疑問を解く鍵を

見つけたかったのかもしれない。

実際インドという私にとっては初めての発展途上国滞在は良い意味でも悪い意味でも想像を絶するものであった。まずはじめにコルカタの空港についてから私の想像を絶する光景が広がっていた。

空港についた瞬間湿気がすごく、砂埃がして、すこし変わったにおいがしていたのを今でも鮮明に覚えている。そして空港からリムジンバスで移動したのだが、そのバスは明らかに町を走っているバスと異なり現地の人から見ると豪華で大きくコルカタの町の人々が私たちバスを珍しいものを見るようにじっと見つめていて私は視覚的にも心理的にも彼らを見下ろしている様であまりいい気持ちではなかった。さらにバスから見える景色はまるでテレビを通してものを見るかのようで現地に到着してすぐには自分がインドに来たという実感があまり湧かなかった。しかし次の日滞在していたホテルで目を覚ましてから私は徐々に自分がインドに来たということを実感し、おそらく自分が日本で目をそらし続けてきた問題に直面した。

まず一番始めに私が直面した日本で目をそらし続けていたことは、「貧困問題」だった。学校の授業やテレビ番組を通して難民の存在を知っているのは当然のことかもしれないが、私は実際今回初めて路上で生活している難民の人をみて正直言葉がでなかった。そして帰国してから数ヶ月経った今でも路上で生活している人と目が合った時の不思議な感覚が忘れられないと同時にその感覚を上手く言葉に表すことはできない。私は物珍しい光景を写真に収めようと思い常にカメラを片手に移動していたのだが、彼らを写真に収めようとは思えなかった。「かわいそうだから撮らないでおう」と思ったのは事実である。このかわいそうという感覚はマザーテレサの孤児院でも感じた。孤児院では沢山の孤児たちが笑いあっておもちゃで遊んだり、絵を描いたり、日本の保育園で見る光景と同じといっても過言ではないほど明るく私は内心驚いた。スタディーツアーに参加しているおそらく私以外の全員が孤児の子供とすぐに打ち解け言葉は違っても上手くコミュニケーションをとれていた。だが私は一人孤児院で緊張していた。「どうやってこの子たちに接すればいいのだろう？」私はそのことばかりを頭で考えて自分から孤児たちに歩みよっていく勇気が正直なかった。しかしそこで驚くべきことが起った、なんとためらっている私に彼らは自分から私に寄って来てくれたのだ。私は一瞬涙が出そうになった。彼らはただ無邪気に私に遊んでもらいたくで寄って来てくれた。私はそれまで頭で考えてびくびくしていた自分に恥ずかしくなった。「そうだ一緒に遊べばいい」その時、頭で考える前に行動することの大切さを孤児院で学んだ。また、滞在先や移動中に様々な貧しい人たちを見たが孤児院での経験により目をそらさないで向き合うことが重要であるということに気づかされた。そして難民と呼ばれる人々の存在を常に頭にいれて生活していくことによって自分の考え方を改める一歩になると改めて感じました。

次に私がスタディーツアーで学んだことは「感謝」ということだ。今回のスタディーツアーに参加することによって私はどれだけ沢山の人々に支えられて生きているかを改めて

実感することができた。私が生まれてから毎日両親をはじめ家族や友達や先生方毎日支えられているということに私は気づいていたにも関わらず、支えられていることに対して当然のことだと思い込んでいた。今回のスタディーツアーでも参加することに関して両親が研修費用を出してくれることが当たり前でインドでもガイドさんがついていること、またマカイバリではホストファミリーがいることなど何に対しても研修前には当然の事だと思っていた。しかし実際インドに滞在している間コルカタではバスのガイドの方、マザーハウスのシスターの方々、シッキムでもガイドの方や運転手の方、そしてマカイバリではバナジー氏をはじめホストファミリーの方々本当に沢山の人々にお世話になった。そして私がスタディーツアーの中でも一番お世話になったと思うのがホストファミリーの方々である。私はマカイバリ滞在中に熱中症にかかってしまった、その際にホストファミリーは私を本当の娘のように心配してくれ1時間ごとに私の様子を見に部屋に来てくれ看病をしてくれた。私はこの時本当にホストファミリーに感謝し、同時に日本にいる家族を始め周りの人々に感謝しなければいけないと強く感じた。人間は誰かに支えられていきっていくと言いますが、その通りだなと実感した。

最後に、私は今回の ESD スタディーツアーに参加して以上に述べた事を学び、自分が以前まで持っていた固定概念を取り除くことができ少しだがバナジー氏が講演会で言っていた言葉の意味が理解することができた。これからも今回の経験のように様々な研修旅行や講演会に積極的に参加して経験を積み私もバナジー氏のように世界の人々に何かを自信をもって訴えかけられるような知識や見識を増やしていきたいと強く思った。

## 九日間

大堀 奈海 (2年)

9日間…。その短い日数の中で、私は非常に濃密で貴重な経験と様々な素晴らしい出会いを経験することができた。これから私が特に印象に残ったことを3つ述べ、それに対してまた、スタディーツアーに参加して思ったことを述べようと思う。

まず、人の眼差し。インドの滞在期間中、長い時間を移動の時間や観光などで、バスや車、トイ・トレインなど乗り物に多く乗った。他にも空港内や観光、マカイバリ茶園内などインド滞在中を通して、私に向ける人々の眼差しをそれぞれの場所で、それぞれの思いで感じていた。コルカタやゴルカランドなどでの人々の視線は、私があたかも彼らのテリトリーに侵入した不審者のような警戒心を抱いているような印象を受けるものであった。これは私の日本と違う習慣・環境・情景に対しての偏見や、肌の色・顔つき・言語の違う人々が圧倒的多数派の場所に入っていくことに慣れていなかったためかもしれない。しかし、

私がマカイバリ茶園で受けた眼差しと、カルカットで受けた眼差しは明らかに違うものであるように思えた。マカイバリ茶園では、最初は緊張して強張った表情であったが、挨拶をするとすぐにそれが消えてしまうことが多かった。なによりも話しかけができる表情や眼差しであった。それは茶園内のフィールドワークや工場見学時に最もよくあらわれていたように思う。案内していただいた人はみんな自然体であり、話しかけたり質問することが気軽にできた。この眼差しの違いは非常に印象深く残っている。

次にマザーハウスを見学したときに感じた、生を紡ごうとする姿が印象に残っている。見学場所には多くの孤児や心や体にハンディを持った子どもがいた。私はその子どもたちが私に向かってくる姿、他の大人に向かっていく姿、ただ手を伸ばしてくる仕草などから、人は常に持続する愛、自分に気づいてもらえる存在そして他人の中に生きることを求めているのだろうと思った。また鼻に管を通した、こぶしくらいの大きさの顔をした赤ん坊を見て、私は、本能的に人は生きようとする存在であるように思った。マザーハウスで過ごした時間は、私たちが日頃は感情や理性などで奥に潜めている潜在的に持つ「生きるということ」、そして共同体の中で「生きるということ」を感じた印象深いときだった。

最後に印象に残ったことは、バイオダイナミック農法を私自身の目や、手など体で触れられたことだ。有機農法の一つの方法がバイオダイナミック農法と言う間違った考えや宇宙のパワーや牛の角のパワーなど、オカルト的としてなかなか受け入れられなかった自分の壁を低くすることができた。それは私が実際にその場に行き、そこで生活している人の表情を見て、実際に茶園を歩き、そこで栽培された紅茶を飲むなどたくさんの体験と実感を通して、理由を求めずに受け入れることの大切さを感じることができた。

以上が数ある印象深いことでも特に印象に残った3つである。

私には今回のスタディーツアーに参加する前から思っていたことがいくつかある。例えば「持続可能な社会・ホリスティックな社会とはどのような社会か。」「宗教や習慣、人種や言語など様々に異なる人々と共によりよく生活するためにはどうしたらいいのか、またそれは可能なのか。」「貧困や格差、環境面などの問題に、異なる地理的条件、政治的・宗教的背景を持つ地域が共同して、それぞれの方法で解決していく道とはどのようなものか。」であった。そしてインドに来て新たに感じた「同じ国の人なのに地域によって異なる雰囲気を持つ理由とは何であるか。」ということだ。

その解決の糸口として、紹介したいことがある。1つは永田教授がおっしゃった「安定した生活基盤の大切さ」そしてバナジー氏がおっしゃった「共通の目的を持つこと」だ。「安定した生活基盤」は精神的なゆとり、金銭的・物理的なゆとりをもたらす。「共通の目的を持つこと」は宗教や習慣などあらゆる面で異なった背景を持つ人々をつなげるひとつの手段を意味すると私は思う。現に以前、マカイバリ茶園内で起きた人々の対立をバイオダイナミック農法を行うという目的で抑え、人々をまとめることができたそうだ。

これは上記の3つのことにも、私が抱えていた疑問解消のキーワードになっていると思う。

私は9日間という短い期間で、上記のような体験をたくさん経験してきた。それは決して楽しかった一言では言い表せない。自分への課題を出しつつ、その答えを求めてもいた。解決の糸口をつかんだように思うが、これはひとつの方法や考えであり、まだまだ始まりの段階に立ったようなものだと思う。だからこそ、今回出会った人やもの、感じたこと、見たこと、体験したことを忘れずに、小さい歩幅ではあるがこれからにつなげていきたいと思う。

## 希望

来住 美波 (2年)

ガンジーはこう言っている。「あなたがすることのほとんどは無意味であるが、それでもしなくてはならない。そうしたことをするのは、世界を変えるためではなく、世界によって自分を変えられないようにするためである。」

マカイバリで私が見たのは茶園で“共生”している人間たちと動物たち、そして自然だった。世界によって変えられることのない私たちの本来の姿がそこにはあり、今、私たちが省みなくてはならない原点があった。これから何千年間もの間人類を維持し続け、建設的で相乗効果を発揮できるような地球がそこにはあった。

しかし私は世界によって変えられた人間の一人だ。時代が進むにつれて海外から入ってきた文化をすんなりと受け入れ、常に“新しい”人間へと変わっている。より便利に、より早く、より簡単に生活できる時代となって私には欲が増えた。もっと便利に、もっと早く、もっと簡単に物事を変えることはできないかと私と同じようにたくさんの人々が常に考えているだろう。

気付いたことはそれではいけないということだ。自分で土を耕し、食べるものをつくり、互いに協力しながら助け合い生活するという当たり前だったこの生活がいつからでなくなったのだろう。私はマカイバリでの生活を「あたたかい」と感じ、マカイバリの人々を「あたたかい」と感じた。人種が違って人間って理解しあえるし、通じあえるんだ、と感ずることができたのだ。

人は自分の幸せは常に考えている。自分の身近な人達の幸せも考えるだろう。しかし、これからは自分や自分の周りのことだけ考えていたのではいけない。自分の国のこと、世界の人たちのこと、動物たちのこと、自然のこと、全ての幸せを考えなくてはいけない。なんて当たり前のことなのだろう、そう思うのだが、今回スタディーツアーで一番感じたのはそのことだ。グローバル化がますます進んでいく世界の中で、グローバル化を進めない地域でこのように感じるなんて、なんて皮肉なことだろうと感じずにはいられない。

9日間という短い間ではあったが、様々なことを感じ、分かち合い、知ることができた。

それと同時に自分はなんて無知なんだろうと思わずにはいられなかった。フェアトレードのこともインドのコルカタの状況も、知らなかったらただ知らないだけで終わってしまう。無知というのは幸せなことでもあるかもしれないが、とてつもなく恐ろしいことだ。

ラジャさんはこう言っていた。「昔は私が色んな科学者や茶園主に話を聞きに行ったものだ。その度に私は馬鹿にされたけど、今では逆になっている。私の所にたくさんの科学者が話を聞きに来るんだ。一時期私はそれで怠惰になっていて、そのせいで色んな仕打ちがきたんだ。私は無知というのは最も恐ろしいものの一つだと感じている。私は自分が無知なことに気がついているから、訪ねてくる人々にいつもこう言うんだ。「私の無知の樂園によろこそ！」ってね。私たちは日々学び続けなくてはいけないんだよ。学ぶことをやめたら、そこで終わりなんだ。」私はこの言葉を常に頭において生活していきたいと思っている。

温かく私たちを迎えてくださったホストファミリーの皆さんとマカイバリの皆さん、このような経験をさせてくれた家族、そして9日間を一緒に過ごすことのできた最高の仲間達と、永田先生、そして大好きなバナジー夫妻に感謝したい。

ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で起きる。人の心の中に平和の砦を築かなくてはならない。」とある。平和の砦って何だろうとずっと考えてきた。言葉で言い表すのは難しいが、今回のスタディーツアーで少しわかったような気がした。

## MISSION

田平 あさ希 (2年)

「仏教僧として私は、すべての人間の苦しみに対してだけでなく、すべての生きとし生けるものの苦しみに対しても関心をはらっています。あらゆる苦しみは、無明によって引き起こされます。人は、幸福や満足を自己中心的に追求して、他人に苦痛を与えています。けれども真の幸福は、心の平安と足ることを知る心によってもたらされるのです。そしてこの心は、利他の精神、愛、慈悲の心を育み、無明と利己主義と欲望を克服することによって勝ちとることができるものなのです。今日私たちが直面する暴力、自然破壊、貧困、飢えなどの諸問題は、人間が自ら作り出した問題です。ですから、努力や相互理解、また人類愛を育むことによって解決が可能です。」

これはノーベル平和賞を受賞した際に、ダライ・ラマが語った言葉である。私は今回の旅で、ダライ・ラマが言わんとしたことを、相互につながっている、互いに幾重にも依存している共同体のことを、言葉や肌の色、文化や歴史の違う、しかし同じ地球上に生きる同じ兄弟の存在を、痛いほど強く感じた。地球温暖化や世界不況といったグローバルな問題が人々の関心を集める昨今、私は世界とのつながり、そしてその重要性について頭では

十分に理解しているつもりでいた。しかし、今回の旅で、今までの自分の生き方は、ドライ・ラマの言う、自分以外のことについては無関心な生活を送ってきた、さらに自己中心的な幸福を追求してきたことに気づかされた。そしてそんな生活をしてきた私にとって無論、インドはあまりにも強烈な場所であった。

慣れ親しんだ光り輝くネオン、空港関係者の整った笑顔をあとにし、今まで見たことがない殺風景な倉庫のような空港と鋭い目つきの職員を目にした時には、日本から出発して9時間が経過していた。生暖かいもわもわした空気、カルカッタの都会の喧騒、そしてそこで目にした光景、それはすべて、私が想像していた発展途上国の様子をはるかに超えた貧困、飢えがもたらすリアルな人々の生活だった。廃墟のような町並み、やせ細った放し飼いの犬、路上に座りそこで夜を迎えようとしている一人ぼっちの少年。同じ時代に生きる、同じ地球に住む同じ人間とは思えない現実が私の胸を締め付け、同時に決して目を背けてはならない、どんな光景も見逃してはならないと私の心が強く訴えてきた。しかしそうはいっても、私の目に映るものすべてが、目を背けたくなるような現実であった。コルカタの人々の家のない暮らしもそうだが、時計の針が狂いだしノンストップで動いているような、あらあらしく殺伐としている、人が生活しているとはとても思えない、そんなインドの様相が何よりも私を不安に陥らせた。そしてその喧騒のなかで、一人ぼっちで生活する人々の孤独や悲しみもまたコルカタの町全体をどんよりと包み込んでいた。私が今まで知ろうともしてこなかった、私の無関心さが遠ざけていた現状に私はただただ、体の震えが止まらなかった。

しかし、そんな貧しさから抜け出すことができない、貧しさゆえの殺伐とした雰囲気のコルカタの町の中でも、安らぎを感じさせる、人々の温かみが伝わってくる場所があった。コルカタの町によく溶け込んだ外観、入り口にはしゃがみこんでいるやせ細ったおばあちゃん、他の建物となんら変わりはない、しかし、その空間のまわりだけは、不思議な静寂と人の生命を感じられる場所。そう、こここそが、マザーテレサのご遺体が眠るマザーハウスであった。ノーベル平和賞を受賞し、世界中の人々より愛され、慕われ、国葬により葬られたマザーテレサのご遺体ともなれば、きらびやかな外観、設備が整った、人々が訪れやすい場所にあるのだと思っていた。しかし、未だに貧困という問題がついてまわるコルカタの町の中心にマザーは眠っていた。そしてその場所でマザーは天に召されたあとも、マザーの精神を受け継いだ多くのシスターに代わり、全国から集まったボランティアに代わり、そしてマザーのもとを訪れる多くの人々に代わり、痛みをもつ人々にあふれるほどの愛を与えていた。“愛する”とは、甘い言葉、行い、浮ついた感情ではなく、痛みを伴う意思と努力であるとマザーは述べている。彼らは痛みが尽きないその場所で、痛みをもつ人々に、必死で、誰もが神に祝福されて生まれてきた存在なのだと、惜しみない愛により伝えていた。そこには、ドライ・ラマが言う真の幸福が、相互に助け合う人々の姿があった。そしてこれこそが人間のあるべき姿であると痛感した。では、私のあるべき姿とは何であるのだろうか。マザーは言った。“愛は近きより。今日、あまりにも多くの苦しみがこ

の世にある。私たちは、貧しい国だけでなく世界中の国で、苦しみや悲しみを人々と分かち合えるでしょうか。私は文明国の持つ貧しさは、より深く取り除くことが難しいような気がします。”と。このインド旅行を送れたのも、多くの方の愛のもとで成り立っている。私が路上でひとりぼっちで生活することなしに生きてこられたのも、孤独を味わうことなく笑って過ごせたのも、周りの人々のあふれるばかりの愛のおかげであった。私の近くに、多くのマザーテレサがいたのだ。キリストの言葉に「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」という言葉がある。まずは、自分が受けてきた多くの愛に感謝し、同じように、自らも犠牲を惜しまない愛を与えられる人間になりたい。そして、インドでみた現実を、路上で生活する一人ぼっちの子どもたちを忘れずにいたい。それこそが、私に与えられた MISSION である。

## 出会い

三原 萌 (3 年)

「また素敵な出会いに、巡り会うことができた。」  
帰国後の私の感想である。

出会いは、人だけではない。  
宗教、文化、自然・・・インドにしかない、そこにしかないもの。  
その出会いは、ただの感動だけで終わるのではなく、考えるきっかけも与えてくれる。

マザーテレサの無償の愛を引き継ぐキリスト教のシスターとの出会い  
独特な建物や一斉に唱えられるお経に圧倒されたチベット仏教との出会い  
今まで私が持っていた宗教のイメージを覆すジャイナ教との出会い

これらの宗教との出会いで、自分が上辺だけの仏教徒であることを痛感した。自分の宗教を大切にできていないのに、人の宗教に触れて良いのだろうかと思悩もした。宗教は文化を守る、伝統も守る、戦争を引き起こすが、平和も招く。宗教が全ての源である気がする。尊重する心を持って触れなければならないと感じた。

心に残る案内をしてくれる知識が豊富なガイドさんとの出会い  
デコボコ道を丁寧に避けてくれる優しい運転手さんとの出会い  
障害があっても自立のために技術を身につけている少年との出会い



私たちを温かい笑顔と挨拶で迎えてくれるマカイバリ茶園の人達との出会い  
「いつでも帰っておいで。」と言ってくれたインドの家族との出会い

これらの人とのすてきな出会いで、インドが好きになった。好きになっただけではなく、  
出会った人を通して文化や歴史を学ばせてもらったことに感謝する。

自然のまま守られているカンチェンジャンガとの出会い  
発展の中で汚されてしまったガンジス川との出会い

どちらも尊ばれるべき自然のはずなのだが、現実とは全く違っていた。しかし、これもイン  
ドの文化であり、外から来た私達が変わってはいけないものである。

カルカッタという発展途中の喧騒がある地域との出会い  
マカイバリという自然や人を大切にする地域との出会い

この出会いでは、インドの中の二つの面を見ることができた。  
挨拶をすると、マカイバリの人々は必ず手を止めて笑顔と共に返事してくれるが、カル  
カッタの人はそうではない。このように村と都市の違いがはっきりとしていて、人々が発  
展することと引き換えに、心の温かさをどこかに置いてきてしまっているように感じた。  
どうしてこのような発展になったのか、発展しても心を失わないためにはどうすれば良い  
のだろうか。答えの一つは、マカイバリ茶園で私達が学んだことの中にあるだろう。自然  
と共に生き、自分たちのできる範囲で先を見越した発展をしているマカイバリ茶園は、持  
続可能な社会が成り立っている地であった。

この出会いを大切に、この出会いに感謝して、自分の学びを深めたい。  
出会いへの感謝と、お母さんのチャパティを食べにまたインドへ行く決意を胸に、私自身  
も次へ進もうと思う。

出会った全ての人と、参加する機会を与えてくださった先生方に感謝します。ありがとう  
ございました。

## 複雑系インドに宿るシンプルな祈り

松井 香奈

「糸くずみたいだな」―地図の上、今回のツアーで訪れた場所を線で結んでみる。インド東側の玄関口コルカタから北上し、インド人の間でもレジャーや避暑地として有名なシッキム州の州都ガントク、そしてダージリン地方のマカイバリ茶園へと少し下る。その行程を広大なインドの地図上で辿ると、たまたま落ちた一本の糸くずのようだ。改めてインドの地理的な広さに驚くと同時に、その一本の糸くずのような私が垣間みたインドでさえ、説明しようとするあまりに複雑で、思わずため息がでる。

始まりは、コルカタの夜の喧騒と人々の強烈な視線。翌朝、同じ町のマザー・ハウスの中、今度は空気の震えを感じるほどの静寂。周囲の湿気を吸い取りそうなくっきりとした青いラインの入った純白の修道衣。マザー・テレサの信念がそのまま形になった清廉なその衣に、空間全体が浄化されているようだった。そこから国内線で一気に北上し、1975年まで独立国だったシッキム州に入ると、民族の顔が変わりコルカタで終始感じていた視線も消えた。山肌にマッチ箱のような建物が並んでいる可愛い町並みと、夕闇の目抜き通りの観光地らしい長閑な賑わい。ほっとする山の空気。しかしそれもつかの間、翌、早朝に展望台からカンチェンジュングを望んだときには、大気がピンと張りつめた。遥か遠く、登頂の許されていない霊峰が、ピンク色にぼんやりと輝き始め、徐々にその輪郭を露わにしてゆく。日の出までの神々しい数分間。日が昇り、チベット仏教カギュー派の総本山グムテク僧院までの道のり、頭上には五色の旗、目の高さにはマニ車、ヒンズーの神々がチベット仏教に溶け込んだ世界。ジープの中で聞いたマントラのテープ。そのジープから見えた州の独立を目指すグルカ族の” Give us GORKHALAND ”のスローガン。そのグルカ族で仏教に造詣の深いヒンズー教徒のガイド・ウダイさんの「仏教は哲学」という言葉。ジープに激しく揺られながら、インドの宗教、民族の複雑さを改めて噛みしめ、ツアーはいよいよマカイバリへ。牛と月の力を用いた神秘的なバイオダイナミック農法を实践するこの茶園で見聞きしたことは、どれも新鮮だった。薄暗い茶工場の二階、年季の入った木箱に大切に保管されている牛の角。その工場を守るガネーシャの像。すれ違う村人のシャイな微笑みと、OKを表わす首を傾げる動作。ステイ先のウルン家で見つけたグル・サイババ師の写真。お母さんが貴重な水でちょうどいい温度に作ってくれた大きなバケツのお風呂。お父さんが戸口に立ってマントラを唱えながら揺らしていた朝の線香の香。剥製だらけのバナジー家と、茶園主バナジー氏の赤ちゃんのような楽しい笑い声。賑やかだったトイトレインに、「ハウルの動く城」のような摩訶不思議な建築の丘の上のホテル。そこから見た山間の家々の灯り。ほとんどしゃべらなかったお父さんが、お別れに「私の娘たちへ」と言って首にかけてくれた白い布。ぎゅっと抱きしめてくれたお母さんの温もり。沢山の

情景と温かさを胸に、再びコルカタ。外の風景から切り離された煌びやかなジャイナ教の寺院、そして最後に、ガンジスの流れ……

「我々はどこから来て、どこへ行くのか」。最初にコルカタのマザー・ハウスを訪れた時に見つけたこの旅のキーワードが、結局、最後まで私の脳裏から離れなかった。18歳でマケドニアから渡印、終世インドに暮らし故郷に戻る事のなかったマザー・テレサ、数代前の祖先がインドの地にやってきたグルカの人々。グムテク僧院で学び、いずれは仏教の伝道のため世界へと羽ばたく若い僧侶たち。独立国からつい数十年前にインドに併合されたシッキムの人々。遥かヨーロッパで考案された神秘的な農法を実践する村人。妊娠をした牛の角だけにあるぽっこりとしたリング。マカイバリに惚れこみ、このツアーにも駆けつけて下さったマカイバリジャパン・デリー駐在員の石井さん。トイトレインで隣に座ったマイケル・ジャクソンのTシャツを着た青年。ガンジスで身を浄めていた裸のおじいさん。このツアーで多くを学んだ女子学生と、そして私も。一体、どこから来てどこへ行くのか。

最終日、前日のシヴァ神の誕生日を祝う祭りの残骸がプカブカと浮いているガンジスを眺めながら、ふと、一週間前に訪れたカギュー派のグムテク僧院でも、一週間後に祭りがあるといていたのを思い出した。チベット仏教の中でシヴァを表わす神の祭りだ、と。もしかすると、同じ祭りかな。聖なる河からもわっと立ち上る臭気とすぐ横の車からの排気ガスで朦朧としていると、ガイドさんがジョークをひとつ教えてくれた。「ガンジス河の水がなぜ汚いのかって？自分たちの罪を洗い流しているからだよ」。神々への祈りと水質汚染との間で、悩んでいても仕方がない。散々、複雑な世界を見てきて、最後に辿り着いたのは、そういう人々の根底にあるシンプルさだった。複雑すぎる構造をシンプルに捉えることで、折り合いをつける人々の知恵。考える前に、まずはありのままを受け入れる力。信じたいものを信じればいいじゃないかという精神。それが、迷いのない強い信仰になり、インドのパワーになっているのかもしれない。今も残っているマカイバリの村で触ったミミズの感触。掌で蠢く小さくて細いミミズ。不思議と、ちっとも気持ち悪くなくて、むしろ可愛いなと思った。純粹な生命の柔らかい塊。そういう純粹さが、村で女の子たちが作ってくれたラーメンに入っていた不揃いの人参や、ウルン家の肝っ玉母さんと娘さんが毎朝作ってくれた揚げチャパティ、他にもたくさん触れたインドの優しさの中に宿っていたのだと思う。そして、この東京にもきっと同じものがあるはず。インドと日本、その源流は同じ生命なのだから。

来よ あありや人 あなありや人 ひんどう いすらむよ  
来よ来よ 今は いぎりす人も きりすとの<sup>ともがら</sup> 徒も  
来よ ばらもんよ 心を浄め 手を取れよ 衆人の<sup>もろひと</sup>  
来よ 賤民よ<sup>しづのを</sup> 捨てよ なべての 侮りを  
母の高御座に<sup>たかみくら</sup> 来よ 疾く<sup>と</sup> 吉祥の瓶は満ちたり<sup>さきはひ かめ</sup>

触るるものを みな 浄むてふ  
垢離場<sup>こりば</sup>の水もて 今 ばあらたの 人多<sup>きは</sup>の 海の岸边に  
(タゴール詩集 「ギーターンジャリ」 渡辺照宏訳 より)

出典：『タゴール詩集』 渡辺照宏 訳 1977 年 岩波書店, p.159-p.160

## インドの感想

武田 元子

インドを訪れると「もう行きたくない」と思う人と、「また行きたい」と好きになってしまふ人と2つに分かれる、という国だと聞いていました。

インドを訪れた今、私は再びインドを訪れたいと考えています。なぜならインドは一度行っただけではわからない多様な文化、民族、宗教が共に生活している国だということを感じたからです。

多様的だと感じたのは7日間でコルカタ、シッキム、マカイバリ、と異なる地方を回れ、比較できたことが一番の要因だと感じています。

コルカタではほこり臭い空気や、車、自転車、トラックが入り乱れる道路、路上生活を送る人々、路上生活者を助けるマザーテレサの志を受け継ぐ人々。私が想像した通りのインドがありました。

シッキムは発展途上国の観光地とは異なる、自治がとれていて平和な地方だと感じました。ガイドをしてくれたウダイさんの説明からシッキムが政治的にも、宗教的にも非常にさまざまな思いの上に成り立っている地域だということを伺いました。土地を売買してはいけません。人口を増やさない法律が出来ています。信仰しているチベットの僧侶がシッキムを訪れることは出来ない。これらを伺ってからは未来の選択肢が限られていて、表面的な平和な地域のような気がしました。

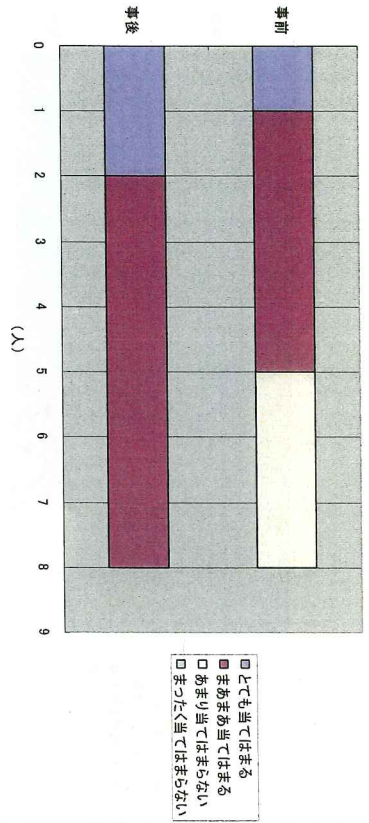
マカイバリでは、すれ違う人誰もが笑顔で接してくれました。それは今まで体験したことのない平和な世界でした。残念ながら滞在中に体調を崩して寝込んでしまいましたが、ホストファミリーはとても心配して下さいました。回復してからも他のホストファミリーも心配して下さいました事を知り、とても温かい茶園だと感じました。マカイバリにはコルカタにはなかった恵まれた自然環境があり、シッキムにはなかった未来の選択肢が多くあることが平和の要因となっている気がしました。そして何よりもバナジーさんという茶園主が茶園の事をよく見ていらっしや、よりよくしようと常にチャレンジし続けていらっしやることがマカイバリの原動力だと感じました。

最後に、このスタディーツアーでは非常に素敵の方と多く巡り会い、その方たちからインドという国を知れたことがインドを私の中でより魅力的にしていることが要因となっていると思います。特にお忙しい中、デリーから来て下さった石井さん。私はあまり英語を話せなかったなので、日本語で質問でき答えてくださる石井さんがマカイバリ、そしてインドをより身近にしてくださいました。また企画して下さった永田先生、旅行を共にして下さった学生さん、松井さん、充実した時間を本当にありがとうございました。

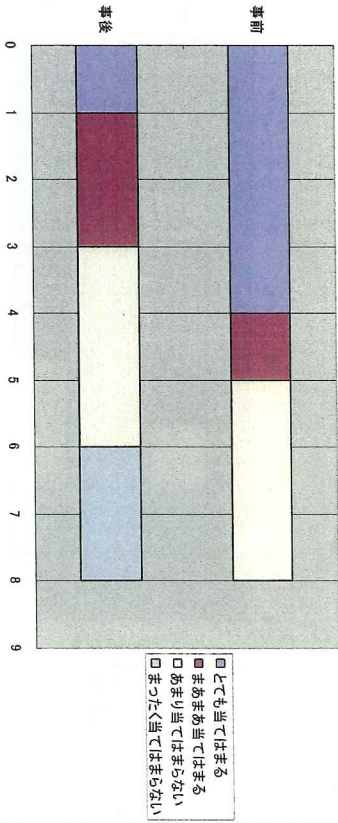
### **3. 2009 年度スタディツアー・アンケート**

(第3回スタディツアーの参加者を対象にとった事前・事後のアンケート結果)

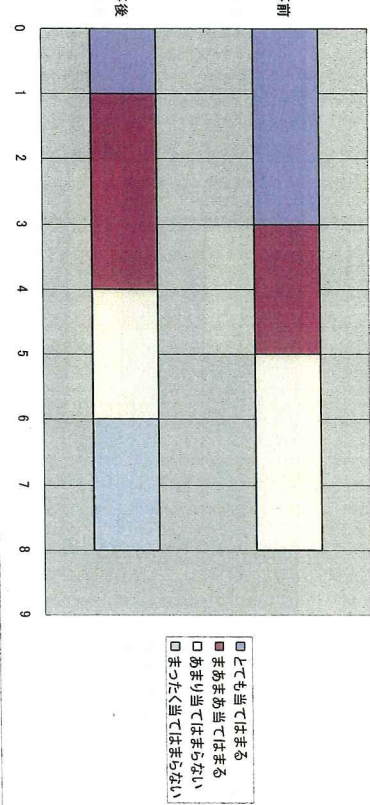
Q1 新聞に環境問題の記事があれば必ず目を通す



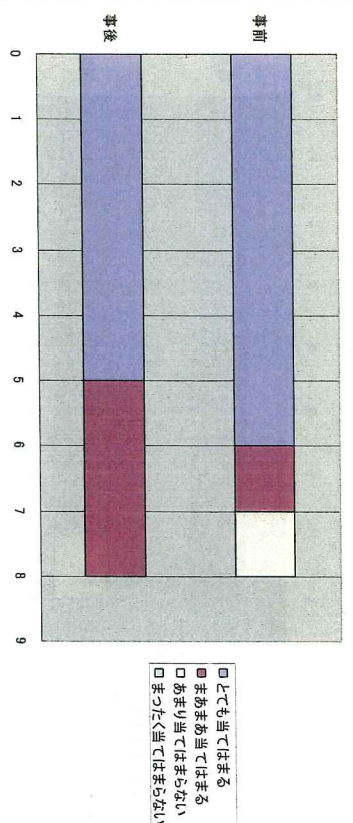
Q2 いつも他人の目を気にしながら自分の行動を決めるほうである



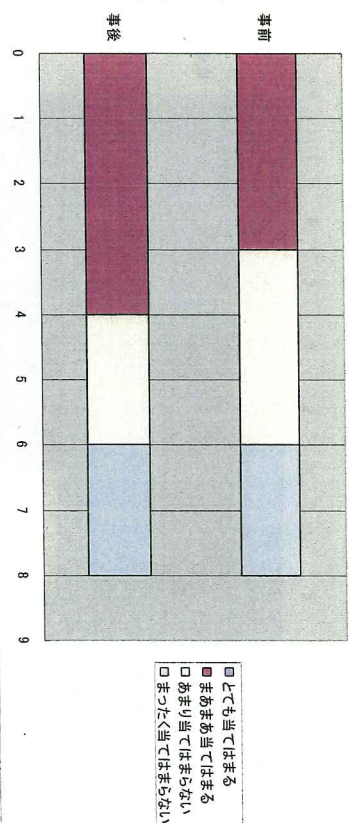
Q3 持続可能な未来に向けて何かをしたい自分があるけれど、實際なにをしてよいかわからない



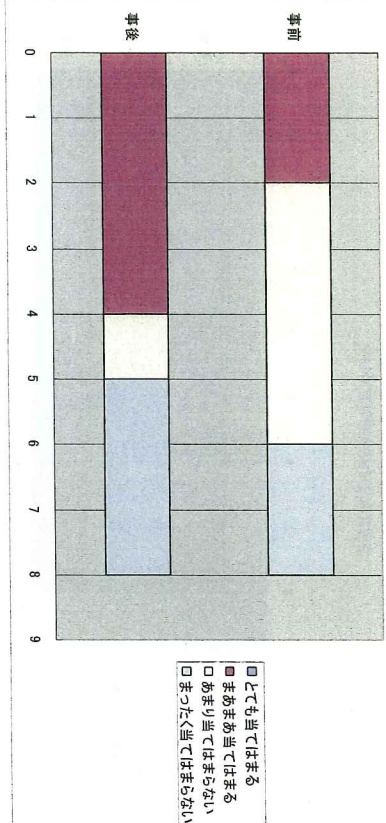
Q4 ボランティア活動に関心があるほうである



Q5 英語によるコミュニケーションには自信がある方である

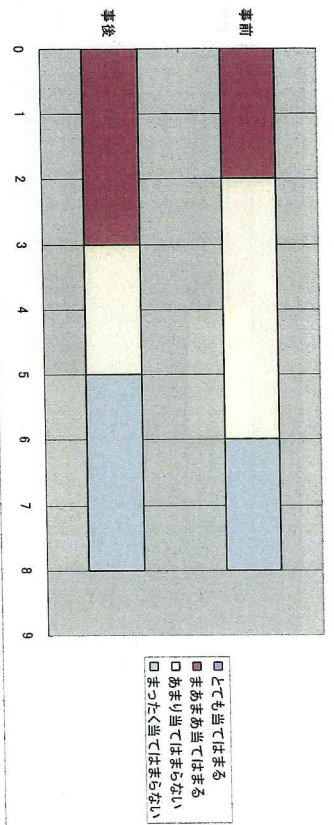


Q6 英語のライティング(書く力)には自信がある方である

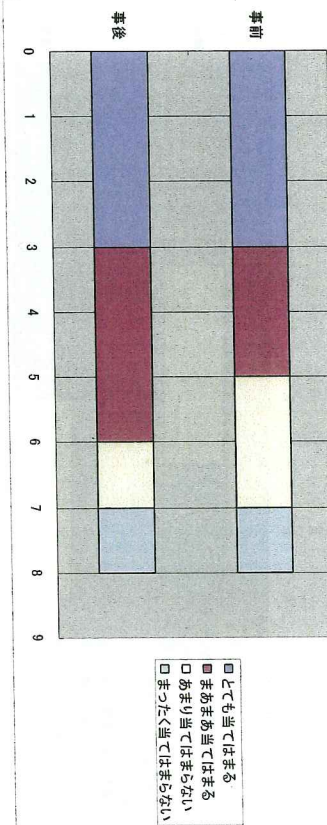




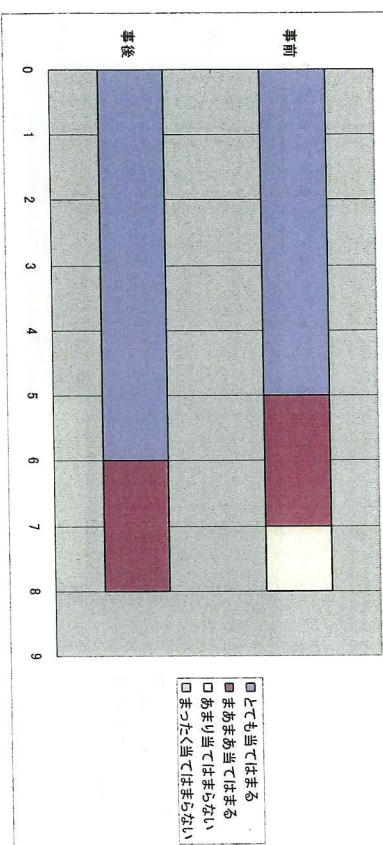
Q7英語による理解力には自信がある方である



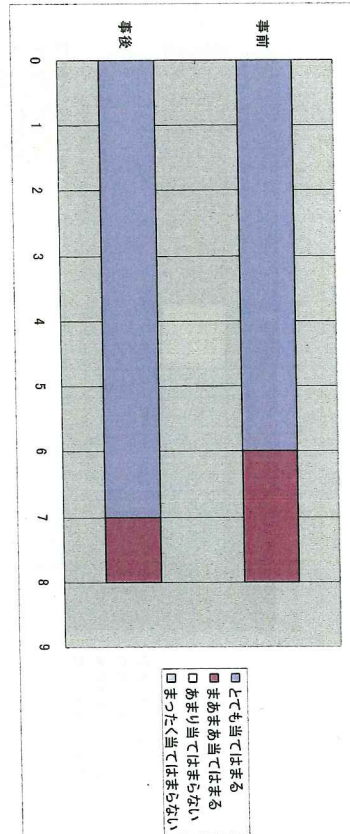
Q8英語で話をするとき会話が通じれば発音など正しくなくてもかまわないと思う。



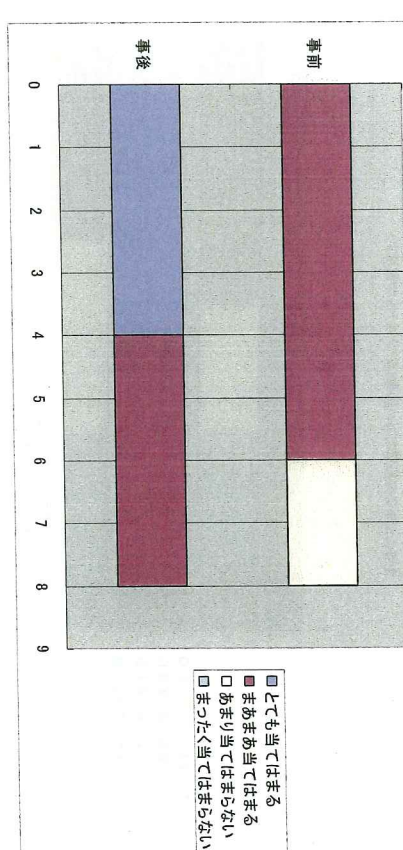
Q9アジアの社会や文化に関心がある方である



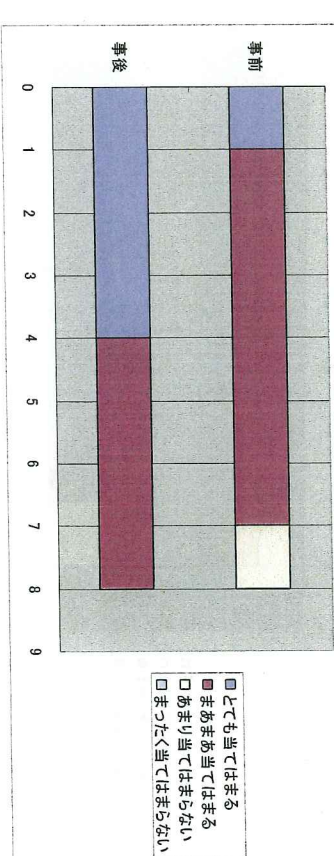
Q10インドの社会や文化に興味がある方である



Q11仏教に関心がある方である



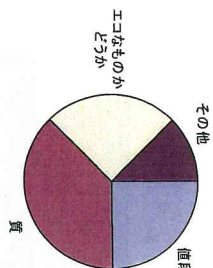
Q12ジャシムンの社会や文化に関心をもっている



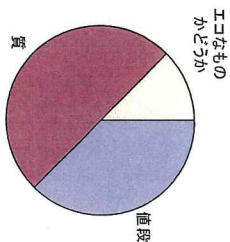


事後 事前

項目	事後	事前
古着を大切にしている	8	4
水を節約するため、シャワーの時間を短くするようにして	6	5
日常生活でカーボン・オフセット商品を買うことを意識している	1	0
食事をする時は、食べ物を残さないようにしている	7	7
パジャマや下着を洗ったとき、原材料を確かめて買	4	2
裏紙を使うようにしている	8	9
アイカッターを持ち歩いている	1	0
アイ箸を持ち歩いている	1	2
アイバッグを持ち歩いている	8	7



Q18 普段買い物するとき最も重要なこと(事前)



普段買い物するときに最も重要なこと(事後)

before

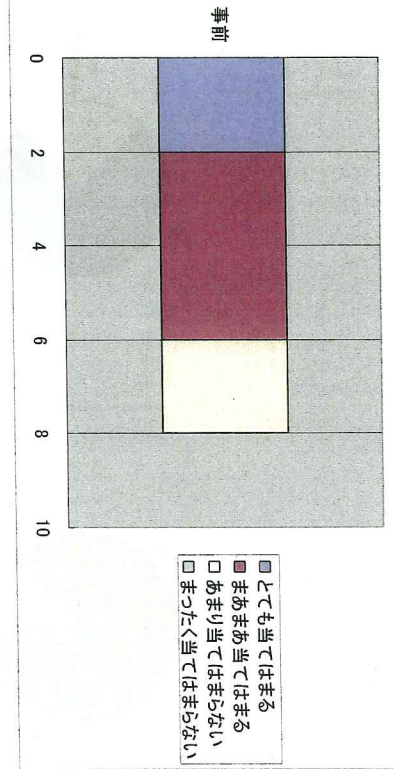
after

0 2 4 6 8 10

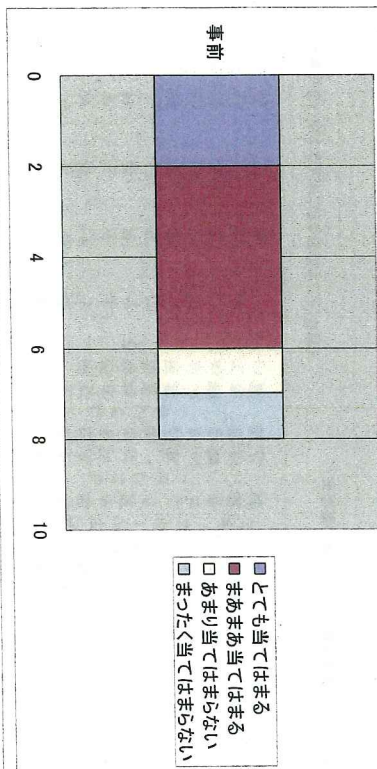
Issue	before	after
地球温暖化は私たちが生活を脅かしているが、それを食い止める手段はない	0 - 4	0 - 2
地球温暖化は私たちの生活を脅かしているが、持続可能な社会への希望はある	4 - 6	2 - 4
地球温暖化は深刻化しているが、まだ私たちの生活を脅かすには至っていない	6 - 10	4 - 6
地球温暖化はわたしたちの未来にとってとても重要な問題ではない	0 - 10	6 - 10

場所 (Location)	人数 (Number of People)
アカイバリのホームステイ	6
コルカタの喧騒	5
アカイバリでのフィールド調査	4
その他	3
シッキムの職業訓練所	3
アザーハウス	2
シッキムのチベット寺院	1
シッキムで見た山々	1
アザーテレサの孤児院	1
ガンジス河	0
コルカタのジャイナ教寺院	0
トイトレイン	0
バナジージャー家での招待パーティー	0
アカイバリでの発表会	0
アカイバリでの紅茶試飲会	0

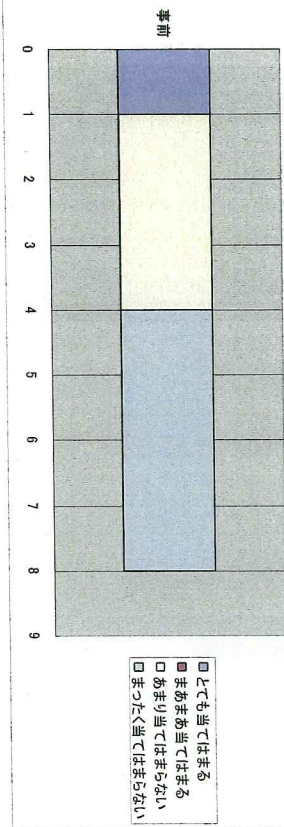
Q13 タージンの社会や文化に関心を抱いていた



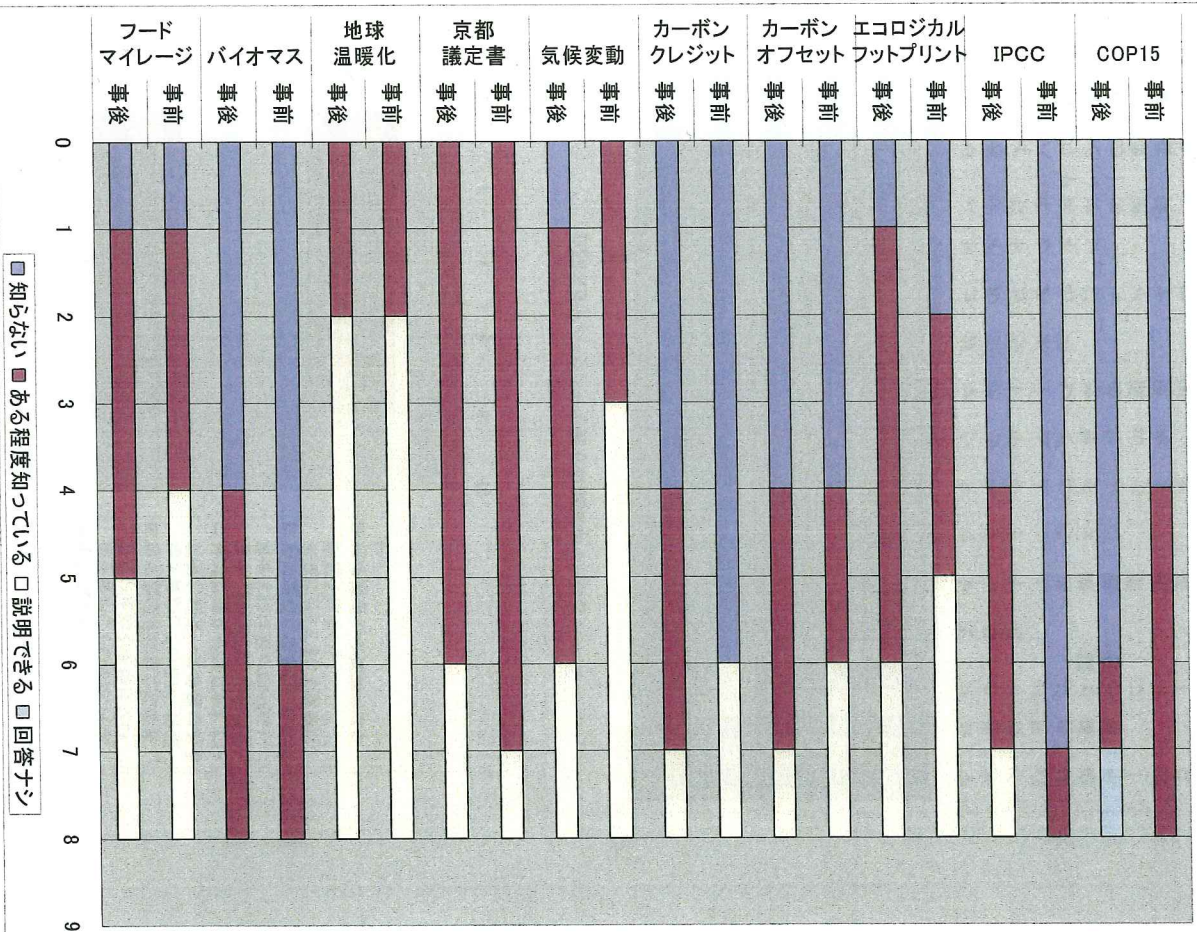
Q14 インドの紅茶に関心をもちていた



Q15 カイバリの紅茶について知っていた



Q16





### 第3回 ESD スタディーツアー・アンケート(自由記述)

#### 事前

#### Q. スタディーツアーに期待することは何ですか

- ・ 正直に言いますと、地球温暖化は怖いです。しかし、エコに縛られすぎると疲れてしまう自分がいます。インドの茶園の方々は、日常的に生活の一部としてエコを実践しておられます。果たして、どうしたら”エコ”をあたりまえにし、私生活にとりいれることができるのかを私の目を見て、聞いて学んでいきたいと思います。また、インドはとても広く、地域によって特性が違おうと思うので地域の文化なども比較できたら面白いのではないかと思います。インドでは人や自然との出会いを大切にして、新しい発見をし、何か世界へ役に立てるヒントを得てきたいと考えています。
- ・ インドは訪れると好きになる人と嫌いになる人が分かれる国だと伺うので自分が好きになれるか、嫌いになってしまうかとても興味があります。また今まで訪れた国の中で一番近代化が進んでいない国だと思うので、実際にその生活で自分がどのように感じるか今まで感じないことを感じる感性が生まれたらうれしいです。また持続可能というキーワードには大学で働き始めてから知ったので実際どのような生活だと持続可能なのか、体験できるのがとても楽しみです。
- ・ 私は毎日を何不自由することなく過ごしてきましたが、発展途上国であるインドの子どもたちはとても貧しい暮らしをしているにも関わらず、とても幸せそうに見えました。このスタディーツアーで本当の意味での豊かな暮らしの意味を知りたいと思いました。また、自分とまったく違った生活を実際に体験することでいろんな価値観に出会い、視野を広げたいです。雄大な自然も感じてみたいです。
- ・ インドという国を通し、インドの文化や生活を自分の目を見て、体験したいと考えております。また、このツアーを通し、環境問題や、持続可能な未来にするために、今、自分に何ができるのかを知ることができたら良いなと思います。また同時に、英語コミュニケーション能力の向上になれるよう、たくさんの現地の人とコミュニケーションをとりたいと思います。
- ・ 大学生活という貴重な時期にこのような体験ができるのは自分の興味関心・学びを深めるために、本当に恵まれています。短い期間に”決して出来ない体験”をどれだけできるかがスタディーツアーの良い点だと思うので、吸収できるものは全て吸収して帰ってきたいです。将来の自分の生きる方向性のようなものも、このスタディーツアーで見つけられたらなと思っています。
- ・ 日常的に生活していたり、学校での講義内では得ることのできないもの、実感など内発的变化を期待できる機会であると思う。私も経済的理由などから、参加することを躊躇ったが、上記に記した理由から望した。現時点の状況、講義の限界などで、変化を求める学生は多いと思う。その変化をもたらすきっかけであるスタディーツアーに大きく期待する。そして日数においても短期から中期、あるいは長期でのスタディーツアーを今

後期待する。(また費用においてもなるべくおさえることも期待したい。)

- ・ インドは新興国として発展する中、CO<sub>2</sub>を大量に排出するなど、環境汚染につながっています。しかし、その中マカイバリ茶園のような持続可能な方法で生活してる人もいます。そんな2面性のあるインドで、たくさんのことを学び、吸収してこれからの自分の課題に取り組んでいけたらと思います。インドの文化に触れ、インド料理をおいしく食べてインドにいる間は現地の人になった気持ちで生活したいです。
- ・ 自分の生活を考え直す良いきっかけになること期待している
- ・ スタディーツアーを通して、今まで狭い世界のことしか知らずに育ってきたので、広井世界を肌で感じ、今まで当たり前であったこと全てに感謝すると同時に、その当たり前である状態がふつうではないことを実感したい。また、異文化にふれることによる異文化理解のみならず、多文化共生にむけて、何か自分にできることをみつきたい。夢中になれることをみつけ、将来の生きる道につなげたい。たくさんたくさん勉強し、多くの人とふれあうことにより、自分を成長していきたい。

#### 事後

##### Q. スタディーツアーの一番の収穫は何でしたか

- ・ インドという国はとても大きく、地域によって"差"があるということを知ることができたこと
- ・ ・"Community"がいかにこれから大切になってくるかということを実感した
- ・ 自分の知らない世界と沢山出逢って、視野を広げられたことです。その中でも、自己の反省点を知ったり、真の持続可能な社会をつくっていくためには何が本当に必要なのか、ということを感じかせてもらえたことが一番の収穫でした。
- ・ 視野をひろげることができた
- ・ 人種が違って、話す言葉が違って、宗教が違って、人間はわかりあい、理解し合えるということを強く感じずに入られませんでした。人間て本当にあったかいなと思います。しかし、あったかいなと感じているのは私がそのような人々にしか出会っていないからであり、これは本当に恵まれていることです。『裏側の世界』を知る必要があると思います。
- ・ 自ら体験することによって、日本と違う国、人、文化、そして「持続可能な社会とは」ということを、実感と共に掴み始められたということ
- ・ 日本にいと、インドは発展によって国全体が豊かになっているように思いましたが、実際には格差が生じていると感じました。今回、都市と地方の両方を訪れ、人々の生活が変化していく様子を自分の目で見ることによって、それを実感することが出来たと思います。

##### Q. スタディーツアーで一番ショックだったことは何ですか

- ・ マカイバリ茶園からコルカタに戻ったとき。マカイバリ茶園は希望と可能性が満ち溢れ

る場所であったのに対し、お金が中心であるコルカタを見てガッカリした。そして生活や職業に関して、この町には選択肢があまりないのだと感じた。

- ・ 自分の国が、経済的豊かさや利便さを求め続ける一方で、人間味のある社会の心地良さや自然への感謝の心を忘れかけてきている、ということに気付いたことです。また、新しい世代になるにつれて、そういった豊かな心も知らずに、便利で住みにくい社会の中を生きていくのだろうか、と思ったことです。
- ・ 食事が合わなかったこと
- ・ 今にも倒れそうな物乞い・ハエのたかる犬・手を差し伸べる子ども達。そのような環境が「当たり前の光景」となっていたことです
- ・ コルカタやガンジス川などで見た景色もそうですが、その場所で使われている言語、今回は主に英語（識字）ができない・分からないということ
- ・ ガンジス川が思った以上に汚染されていたことです。インドの象徴とも言えるガンジス川が発展によって汚染されていることが残念でした。

Q. スタディーツアーに参加して自分は変わったと思いますか

一番変わったのはご自分のどんなところですか

- ・ 以前はどちらかといえば、消極的であったが、今は少し積極的になれた。そして国際協力には“積極性”が必要不可欠であることを知った。
- ・ 精神的に強くなった気がします。自分の信念を強く持ち、進んでいけるようになりました。インド人を見ていて、苦しみも、心の持ちよう次第で、幸せになれると分かったからです。
- ・ さまざまな人の意見を共有できたことで、自分の価値観、視野を客観的に捉えることができたところ
- ・ 他人事ではない、もっと知りたい、と感じていることです
- ・ 目的を意識するようになった
- ・ 今回の体験学習によって、表面的であった知識が自分のものとなったように感じます。体験してきたことに関しては、自分の言葉で説明する自信がもてました。

Q. スタディーツアーで一番良かったことは何ですか

- ・ 分かち合いの時間があったこと。他の人の意見を聞くことで、より自分の考えが深くなり、思い出もより濃密なものになる。また、ホームステイがとても心に残る体験で良かった。
- ・ 自分の感じたことだけでなく、皆の思ったことや感じたことを共有でき、さらに考えを広げられたことです。一日を多面的に見ることができました。
- ・ 漠然とした想像ではなく、様々な人、現実を自分の目で、肌で感じることもできた点
- ・ 旅行とはまた違う場所・ないように、私でも参加できたということ
- ・ ホームステイ。ホームステイによって、短い間でも村の一員になれたように感じ、人の温かさに触れることができました。良い出会いに溢れていました。

Q. スタディーツアーで一番の課題点、もしくは問題点は何ですか

- ・ このスタディーツアーは少しハードスケジュールでした。しかしその分沢山の場所を巡ることができて良かったです。
- ・ 内容に対して、期間が少し短かった気がします。中まで見て、かつ体調管理も欠かせないので、もう少し期間があるといいと思います。
- ・ 今回のスタディーツアーの一番の問題点は、旅行費ではないかと考える。私自身は家族の環境にも恵まれ、参加できたが、中には自分で出費する人もおり、学校内でやるからには、学生に適した援助も必要ではないかと考える。
- ・ 振り返りの時間をもっとあってもいいと感じます
- ・ 時間的、事務的、精神的などのことに余裕がなかなかもてないこと

Q. 今回のスタディーツアーを通して自分の英語力やコミュニケーション力が変わったと思いますか

【はい】

- ・ 今まででは自分の英語はほかの人にどういう風に聞こえているのだろう、ということばかり気にしていたが、インドでは英語で会話する楽しさを実感した。英語が出来れば出来る分だけ世界が広がり、つながりのもっと強くなるものだと思った。また、積極的にコミュニケーションをとった分だけ得るものは大きいと思う。
- ・ 「伝えようとする心」と「相手を理解しようとする心」さえあれば、言葉は通じなくても、心は通じ合えるのだと実感しました。なので、改めて、挨拶をするときや感謝の言葉を言うときには心を込めるようになりました。
- ・ 今回、スタディーツアーに参加し、日常生活で英語を聞く環境、話す環境(ホームステイ・発表)にとても恵まれ、自分が今持っている英語力で、使える英語を身につけることができたと感じるから
- ・ 出来ないなりに、つたない英語で話しだせるようになったり、最後には簡単な内容であれば少しでも、英語の文で話せるようになった気がするから
- ・ 英語力は変わったとは思いません。しかし、コミュニケーション力に関しては、いくつか覚えておくべき言葉と、伝えようとする気持ち、笑顔があれば、現地の人と仲良くなれると思います。

【いいえ】

【どちらとも言えない】

- ・ スタディーツアーを通して、たとえ伝わらなくても伝えよう！話してみよう！と感じチャレンジはしていました。が、このままでは恥ずかしいので勉強します。

Q. 今後のスタディーツアーについて「こうだったらよい」と思うアイデアは何ですか

- ・ やはりスタディーツアーの一番の醍醐味は分かち合うことだと思います。しかし、時間が少ないと深く考えられないので、30 分くらい一人で考える時間が欲しいなと思いました。なので、もう一日くらい長くても大丈夫だと思います。また、次のスタディーツ

アーに参加する人のために何か反省点やお土産の量などについて伝えられたら良いかもしれません。

- ・もう少し時間があれば、コルカタの町をバスではなくて、歩いて中の様子も見てみたかったです。また、一日一日がとても濃かったので、リフレクションの時間はとても大事だと思います。なので、その前に、少し心の中を整理する時間もとると良いのではないかと思います。
- ・時間を有効に使い、様々なところを見ることができ、今回のたびにとても満足しており、特にアイデアは見つかりませんが、『振り返りの時間』はその日のことが整理することができ、他人の意見を聞くことができる有意義で、スタディーツアーにはなくてはならないものだと思います。したがって、今後も続けていくことで、よりよい旅になると考えます。
- ・各々が興味を持ったことを深めるためにも、一日フリーな日を作るのもいいのではないかと思います。デッサンをしたり、地域の人々にインタビューをしたり、散策をしながら頭の整理もでき体も休まるのではないかと思います。フリーな時間を過ごすことで、よりさまざまな視点からの見方ができるかもしれません。最後の振り返りも深いものになる気がします。
- ・日数や日程的に忙しかったと思うので、時間がもっとあったらと思う
- ・ホームステイをすることで、訪れた国を身近に感じる事が出来、文化やその地についての理解を深める事が出来ると思います。今後もホームステイプログラムを実践していただきたいです。

Q. スタディーツアーについて思うところがあれば、何でも記して下さい

- ・スタディーツアーに参加してみて、勉強がメインなのはもちろんですが、人間的にすごく成長できたなと思いました。また今回はホームステイがあり、現地の方と密に接したり、共に生活することができてとても良い経験になりました。また、このスタディーツアーはまるでパズルの様だと思いました。色々な所にピースが散りばめられていて、それぞれの人が自分の感性で組み立てていきます。何を見て、何を感じるかは十人十色であり、それを share することで、より色豊かなパズルを完成させることができるのだと思います。
- ・今回、スタディーツアーに参加させてもらって、これが本当のスタディーツアーなんだ！と初めてスタディーツアーの本当の意味を知った気がしました。今まで机の上でしか見えていなかったことが、実際にその場を体感することで郡と世界が見えたり、今までの『学校での学習』とスタディーツアーのような『体験する学習』が繋がったとき、真のスタディーツアーになるのだなあと思感しました。なので、国際協力などにおいても、情報のサーチだけでなく自分で実際に現地に入ってその地を『体感すること』が欠かせないと想いました。今回の旅でも、百聞は一見に如かずということが沢山あって、やはり遠くから見ていただけでは真実が見えない時が沢山あるのだと痛感させられました。実

際、インドのイメージはがらりと変わりました！自分の知らない世界との出逢いは、とても楽しかったです。これからも色んな世界とであって、自分を広げて生きたいです。今回、このような貴重な機会に恵まれ、本当に感謝しています。

- ・ 私は今回のスタディーツアーで、濃い体験ができたのではないかと感じている。今まで、私は語学研修といった旅行ではなく学ぶためのたびをしたことがナンドかある。視界、今回のスタディーツアーは今までのもとは一味違い、『学びを共有』したことが印象的だった。スタディーツアー前には、様々のことについて勉強し、みんなと知識を共有することで、現地での取り組みの姿勢が変わったように感じる。また、毎日『振り返りの時間』があり、日々同じものを見てきても、視点の違いや考えの違いに触れ、自分の考えがより豊かなものになったように思う。少人数でそして、『学びを共有』できるこのスタディーツアーがより校内の生徒の中に浸透し、この貴重な体験を多くの人と『共有』できるスタディーツアーになることを望んでいる。
- ・ 全てが衝撃のかたまりだったように思います。文化や宗教、会えるもの全てが日本とは違いました。いくら勉強しても、実際に行ってみて感じることの大きさと比べるとかなりの差があり、『百聞は一見にしかず』と感じずに入られませんでした。もちろん、一緒に参加した仲間たちの「意識の高さ」も衝撃の一つです。このような経験ができたことを誇りに思います。勇気を出して応募してよかったです。日本に帰ってきたから終わりなのではなく、大切なのはこれからの行動だと思うので、この気持ちを忘れずにこれから生活していこうと思います
- ・ 内容的にはとても惹かれたが、なかなか踏み出せないものがあって、参加をためらった。それは英語力の不安でもあるし、ほかの人とうまくやっていけるかなど、旅行費も含めたためらい要素があった。しかし、それらのことを考えても参加へと足を進ませるものがスタディーツアーにはある。そして様々な不安要素がある人でも参加できることはスタディーツアーだからこそであると思う。
- ・ 今回のスタディーツアーでは、インドの文化や環境、持続可能性の知識を得ることが出来たことはもちろんですが、私の内面の成長も出来たと思います。社会人の方を除くと、最高学年が私だけというスタディーツアーは今回が初めてでした。そのことで出発前までは不安がありましたが、実際に現地に行くと仲良くなるまでに時間はかからず、終始楽しく過ごせたことが嬉しいです。また、後輩から頼られたときや、民が楽しんでいる様子を見ると私まで嬉しくなったときには、仕事の面ではまだまだですが、気持ちの面で成長を感じることが出来ました。



## 4. 資料

### (1) スタディーツアー日程

年月日 (地名)	時間	行動内容
1 日目 2010 年 2 月 7 日 (日本・シンガポール・インド、コルカタ)	11:30 18:00 19:00 20:35 21:00	成田発 シンガポール着 シンガポール発 コルカタ着 バスでリットンホテルへ
2 日目 2010 年 2 月 7 日 (インド、コルカタ・ガントック・シッキム)	7:30 8:00 8:20-9:20 9:25-9:35 9:40-10:45  12:20 13:20 13:30-18:30 15:10  18:30 19:30-20:50 21:20-22:00	リットンホテルで朝食 バスでマザーハウスへ マザーハウスを見学 バスでシシュバーバン(孤児院・幼稚園)へ シシュバーバンとボランティアセンターを見学 バスでコルカタ空港へ コルカタ発 バグドグラ着 車でガントックへ ラングボ旅行者センターにてパスポート・チェック後、旧シッキム王国へ「入国」 ホテルに到着 ホテルで夕食 振り返り
3 日目 2010 年 2 月 8 日 (インド・シッキム)	5:15 5:30-6:45  6:45-7:10  8:40-11:30	リットンホテル発 カンチャンジョンガ(8500m 級の山々)を眺望 車でホテルへ ホテルで朝食 ルムテック僧院を観光

	12:50  15:10 15:55 17:00-20:00 20:00 21:30	ストウーパとチベット仏教学校を視察 ナムギャルチベット学研究所・僧侶達の学 ぶ図書館の見学 昼食 職業訓練所を訪問 エンチェイ僧院を観光 自由時間(ショッピング) ホテルで夕食 振り返り
4日目 2010年2月9日 (インド、シッキム・ ダージリン)	6:00 7:00 7:30-13:30 9:10  10:35-11:00 13:25 13:30 14:00 14:50 15:45-17:45 18:15-20:30 20:50	起床 朝食 車でマカイバリへ ラングポ旅行者センターに到着(旧シッキ ム王国より「出国」) ゴルカランド到着 ダージリン通過 マカイバリに到着 ラジャさんとホストファミリーに挨拶 ホストファミリーと食事 ラジャさんのスピーチ 振り返り ホストファミリーと夕食
5日目 2010年2月10日 (インド、ダージリ ン)	6:30  8:30 9:00-13:30 14:00-14:30 14:30-15:00 15:00-16:30  17:00-18:00	野生のヤギを見て生物多様性について考 える 工場でミーティング 各班に分かれて調査 村の食堂で昼食 村の食堂で各自買い物 各班に分かれて調査 (フェアトレードとコトバリ村とフルバリ 村の生物多様性の調査) 振り返り

<b>6 日目</b> <b>2010 年 2 月 11 日</b> (インド、ダージリン)	10:00 10:45 12:05-14:00 14:05-14:30 14:30-15:00 15:00-17:00 17:00-17:05 17:05-17:10 17:10-17:21 17:21-17:45 17:45-18:30 19:00-23:00	マカイバリ紅茶工場見学 バナジーさんによる紅茶の試飲会 ミーティングと各班の調査 村の食堂で昼食 徒歩で工場へ 各班発表の準備 フェアトレードについての発表 生物多様性についての発表 バイオダイナミック農業についての発表 エコツーリズムについての発表 バナジーさんとの質疑応答 バナジーさんの家でカクテルパーティー
<b>7 日目</b> <b>2010 年 2 月 12 日</b> (インド、ダージリン・バグドグラ)	8:30-9:30 9:30-10:40 11:20-12:05 12:10 13:40-14:35 15:00 16:35 18:00-18:15 18:15-19:45 21:15	工場でのミーティング 紅茶のお土産を買う マカイバリ紅茶工場見学 車でカーシヨンへ カーシヨンの旅行者ロッジで昼食 世界遺産であるトイトレインに乗る 紅茶バー(コークレン・ホテル)で休憩 車でマカイバリへ 出発する準備をし、自分のホストファミリーとパーティー マカイバリを発ち、車でバグドグラへ ロイヤルサロバールプレミエールホテルに到着
<b>8 日目</b> <b>2010 年 2 月 13 日</b> (インド、バグドグラ・コルカタ)	7:00-10:00 11:00 11:30-12:00 13:55 14:55 15:10-17:00	ホテルで朝食 ミーティング 車でバグドグラ空港へ バグドグラ離陸 コルカタ空港に到着 ジャイナ教寺院を観光 ガンジス川をみる

	17:30 21:50	コルカタに着く コルカタを出発
9 日目 2010 年 2 月 14 日 (シンガポール, 日本)	4:30 5:00-7:00 7:00-8:00 9:45 17:20	シンガポールに到着 最後の振り返り 自由時間で買い物へ シンガポールを出発 成田空港に到着、解散

## (2) 参加者リスト

永田 佳之	聖心女子大学文学部教育学科准教授 Email:yoshy@pobox.com
三原 萌	聖心女子大学学部生(3 年) Email:mippa_25315@yahoo.co.jp
大堀 奈海	聖心女子大学学部生(2 年) Email:namiskysun@yahoo.co.jp
来住 美波	聖心女子大学学部生(2 年) Email:snowdome_world@yahoo.co.jp
田平 あさ希	聖心女子大学学部生(2 年) Email:tiarara_20@yahoo.co.jp
岡野内 綾	聖心女子大学学部生(1 年) Email:aya_okanouchi816@yahoo.co.jp
北村 沙知	聖心女子大学学部生(1 年) Email:skitamura18@yahoo.co.jp
田中 翔子	聖心女子大学学部生(1 年) Email:kosho-405@mbn.nifty.com
蓮井 愛子	聖心女子大学学部生(1 年) Email:luvtxq2119@yahoo.co.jp
松井 香奈	社会人参加(専門家枠) Email:u1125kana@gmail.com
武田 元子	社会人参加(教職員枠) Email:611tmt@gmail.com

### (3) スタディーツアー事前勉強会日程

日にち	テーマ	担当
2009.12.9	初顔合わせ(自己紹介)	永田佳之
2009.12.18	ESD	永田佳之
2009.12.21	ダージリン・シッキム	大堀奈海
2010.1.6	マカイバリ	三原萌
2010.1.13	フェアトレード	来住美波・岡野内綾
2010.1.20	バイオダイナミック農法	北村沙知
2010.1.20	エコツーリズム	武田元子
2010.1.25	インドの教育	田平あさ希・蓮井愛子
2010.2.2	総括	永田佳之


上記以外にも現地で発表できるように『Across the Universe (beatles)』『IT'S A SMALL WORLD』『カントリーロード』『ハナミズキ』『ビリーブ』『ふるさと』の歌の練習を行った。

## (4)事前勉強会資料 ダーズリン・シッキム

大堀奈海・田中翔子



### 概要①: インド




国名: インド共和国 (Republic of India)  
 人口: 10億2,873万7,436人 (2001年)  
 平均寿命: 男 63.9歳/女 66.9歳 (2004年)  
 首都: デリー (Delhi)  
 公用語: ヒンディー語 (英語=準公用語。地方言語は1650以上)  
 識字率: 69.38% (男 75.85%/女 54.16%) (2001年)  
 宗教別人口比:



宗教	人口比
ヒンドゥー教徒	約80%
イスラム教徒	約12%
キリスト教徒	約2%
シーク教徒	約2%
仏教徒	約0.5%
ジャイナ教徒	約0.5%
その他	約4.5%

### 概要②: ダージリン



- ・位置: インド北東部、西ベンガル州北部の観光・保養都市。ネパール・ヒマラヤ山脈南東麓（ろく）の標高2248メートルに位置。
- ・人口: 10万7530 (2001)
- ・地名: チベット語で「雷の町」を意味。
- ・特色: イギリス人が開いた避暑地で、ダーズリン紅茶の産地として有名。  
市内には今でもイギリス領時代の町並みが残っている。  
また、国際的な定期市の機能を果たしている。
- ・主要産品: 紅茶、カルダモン、ナンチョーラ、キニーネなど。


### 歴史

1947年にインド・パキスタン独立後、英国領だったベンガル州が二分されました。そのうちヒンドゥー教徒地区を基盤に出来上がったのが西ベンガル州です。南部はベンガル湾に面したデルタ地帯が臨め、それからガンジス平野を越え、北はダーズリン、そしてヒマラヤ山脈に到達します。

### 文化

ダーズリンには原住民から構成される様々な方言のグループがある。大半をネパールの人々が占めており、チベット、ベンガル、ビハールが少数である。

これらの多様なコミュニティは豪華な料理、多彩なお祭り、音楽や踊りでにぎやかな文化的環境をつくる。



### 自然

ダーズリンの森林には様々な動植物が存在します。





## ❖ ダージリンヒマラヤ鉄道 ❖

❖ 1999年に国連ユネスコの世界遺産に登録されたインドのナローゲージの鉄道。ジャルパイグリ〜ダーズリン88kmで運行されている。1880年開通。

※イギリス人の**鐵線路の移動**、また、**紅茶の輸送**に使われた。



## ❖ 紅茶の歴史 ❖



19世紀半ばに、イギリス人が植民地のインドに中国から持ち込んだ茶樹を植えてからお茶の生産に成功し、ダーズリンの歴史が始まりました。



❖ インド紅茶協会 (TEA BOARD OF INDIA) より、正統なダーズリン紅茶を扱っている証明としてのロゴ



## 持続可能なために...



❖ 宮崎国際センターとJICAによる「地域園芸復興プロジェクト」がおこなわれている。

❖ インドのエコロジー活動



## 概要③：シッキム



州名 シッキム  
州都 ガントク  
人口 54万492人  
言語 ネパール語  
識字率 69%  
面積 7096km<sup>2</sup>  
位置 中国チベット自治区、西はネパール、南東はブータンに接している。かつてシルクロードの一つの経由地でもあった。  
年間降水量 州都ガントクが3300ミリメートル  
北部は乾燥地帯のため、60ミリメートル  
宗教 公的な宗教には仏教があつているが、ネパール人が人口の大部分を占めるということもあり、日常的にはヒンドゥー教が支配的。

## \* 歴史 \*

もともと原住民レブチャ人が住んでいたが、チベット人らが17世紀に移住。  
政教一致のチベットで抗争に敗れた古派（ニンマ派）の3人の高僧がヒマラヤの南に逃げて来て、王を推戴したのがシッキム王国の始まり。  
その後ヒンドゥー教徒である、ネパール人の大量移住のため、シッキムの人口率は、王国を支えてきたレブチャ人とチベット人合わせて約25パーセント、ネパール人は約75パーセントとなる。  
1975年に行われた「王制の廃止ならびにインドとの併合」という国民投票の結果、親印のネパール人の圧倒多数で王制の廃止とインドの22番目の州として併合され、今に至る。



## \*ルムテク僧院\*



チベット仏教4大宗派のひとつ、カギュー派の第二の本拠地である僧院。（本来の本山はチベットのツルプ僧院）  
 1959年ダライラマ14世とともに亡命したカギュー派の長である、カルマバ16世がこの僧院を建て、ルムテクを基点として布教活動に励んだ。1981年に亡くなった。その後転生者として少年が発見された。この少年もチベットを脱出し、インドに亡命（当時14歳）。しかし2000年にインドに亡命してきたカルマバ17世は未だにルムテク僧院に入ることが出来ず、現在ダラムサラに本拠をおいています。

## \*ベンガルトラ\*



別名：インドトラ（絶滅危惧種）  
 生息地：インド、ミャンマー、中国などのアジアの森林。  
 野生の個体数：約1,400頭（2008年）  
                   約40,000頭（1900年代）  
                   約3,600頭（2002年）

## \*減少の原因\*

原因：インドの人口増加、トラの生息地破壊、密猟、餌の減少、ダムなどの近代建築物、森林破壊や人とのトラブル。  
 密猟：密猟者は1年間で200頭以上ものトラを捕殺。（インド政府推計より）  
 野生生物製品の違法取引：  
 トラの毛皮や漢方薬への利用目的での骨や体の部位の密猟。  
 密輸ルート例：インド→ネパール→チベット→中国

## \*対策\*

1972年、プロジェクトタイガー。  
 評価：狩猟禁止や保護区設立、レンジャー雇用等でトラ保護の形が出来たこと、個体数の増加。  
 問題：森林保護区内でのトラの個体数は増加したが、特に保護区以外の森林における効果が現れていないことがプロジェクトタイガーの一番の問題である。

## \*課題\*

「野生生物保護法の第38条」（1972年制定、2006年改定）  
 協力、監視およびトラ保護のために運営委員会の設置を必須項目として制定。  
 しかし今のところ実行しているのは、トラ保護区のある17州のうち、Assam州、Arunachal Pradesh州、Mizoram州の3州のみ。

## \*保護と環境と今後の課題\*

密猟の阻止、環境保全においても運営委員会の設置を実行すべき。  
 トラを守る＝川を守る＝生活を守る  
 インドに流れる川はヒマラヤ、チベットが起源。周辺国との協力も必要。

## マカイバリ茶園

三原 晴

### 1、マカイバリ茶園とは

インド西ベンガル州にある総敷地面積 670ha (東京ドームの約 145 倍) の紅茶園。  
マカイバリとは、チベット語で「肥沃なトウモロコシ畑」という意味。  
マカイバリ茶園は4つの山にまたがり、7つの村からなっている。680 人のコミュニティー (従業員のこと) と、その家族 1700 人が茶園の敷地内で生活している。

### 2、歴史

1835 年 イギリス人・サミラー大尉がマカイバリの地にたどり着く  
1840 年代 紅茶の苗木をマカイバリの地に植え始める  
1856 年 マカイバリ茶園を商業目的として始める  
1857 年 G. パナジー氏に営業権が譲渡される  
現在 4代目茶園主スララージ・クマール・パナジー氏が経営

### 3、マカイバリの特徴

#### ○パイオガスO (1971 年導入)

牛糞と水を混ぜ合わせてメタンガスを発生させることで、火を起こすシステムのこと。  
これによって茶園の人々の生活が豊かになり、薪を採りに行くという女性と子どもの労働が減り、また森林伐採も防ぐことができた。

#### ○パーマカルチャーO (1975 年導入)

モノカルチャー (単一作物を栽培すること) に対して使われる言葉。  
マカイバリ茶園では、6 層からなるパーマカルチャーが行われている。  
第1層 原生林 (茶園の敷地の約3分の2を原生林として残している)  
第2層 マカイバリ茶園に常植しているアメ科で、日陰を作る木 (ヤムノキなど)  
第3層 一時的に植えるアメ科で、日陰を作る木 (インディゴなど)  
第4層 アメ科の果実の木 (ニーム、ガデラ、ネビダグラスなど)  
第5層 紅茶  
第6層 様々な種類の雑草、ツル植物、土の下の植物  
パーマカルチャーは「自然との調和」を理念にホリスティックな紅茶栽培を営むマカイバリ茶園の根本的理念とも言える。

#### ○パイオダイナミック農法O (1986 年導入)

ルドルフ・シュタイナー (1861-1925) によって採用された農法のこと。

主な特徴 ①天体の動きを利用する

②動物との共生

③調合剤を用いる

植物は、人間と同じように天体の運行に影響される。そこで天然のハーブから作られた調合剤を土に撒くことで、天体からの影響を受けやすく、力強い土が作ることができる。調合剤によって、土が人間の体のように働き始め、生命力豊かな土に育つと考えられている。

#### ○アルチング農法O

クアテラグラスを土の表面に敷き詰める農法のこと。

降水による衝撃を緩和し土壌の流出を防ぎ、同時に雑草の成長を制御する。旱魃時期には土壌の水分を保湿し、やがてクアテラグラスが枯れると土壌の表面に還り肥沃な土となる。

#### ○小株主O

茶園全体の森林植保全と、コミュニティーの生活向上のために導入されている。女性も男性と同様に参加している。

#### ○動物O

WWFに登録されている2頭のベンガルトラをはじめ多くの動物や、紅茶の機械動物である「テイー・ディバ」も生息している。週に一度、動物会議が行われ、森に住む虫、鳥、動物がどのような状況で生息しているのか報告されている。

#### ○教育O

マカイバリ茶園の中には政府系の小学校が2つあり、子ども達はその小学校に通っている。子ども達は茶園内のビニール拾いを積極的に行うなど、自然を守るための大切な役割を担っている。日々の自然との関わりの中でパイオダイナミック農法に対する興味が増していけば、教育の課程においても、自然のリズムに感懐したり、自然における人間の役割を積極的に演じることのできる子どもが育っていくのだと、茶園主パナジー氏は考えている。

## 調合剤の作り方

### 500番 牛糞牛角調合剤 (材料: 雄牛の角、雌牛で新鮮な雄牛の糞)

- 根の形成に助け、土の活動を高める。
- 細菌、微生物、地中の虫などの繁殖を助ける。
- 肥沃さを増し、繁殖を増す。
- 冬の力を運び、新鮮にし、露の沈殿を増す。
- 樹液の循環を刺激する。

### 501番 火星牛角調合剤 (材料: 雄牛の角、水鳥または石炭、灰石)

- 植物の光新陳代謝を増強。
- 光合成と葉緑素の構成を刺激。
- 作物の色づき、芳香、風味をよくする。
- 作物の品質と栄養価を保つ。
- 病気や害虫に対する抵抗力を高める。
- 太陽と関係する。

### 502番 カニコソコ調合剤 (材料: カニコソコの花、オランダの腐敗)

- 大地に活力を与え、元気づける
- 植物の内に残っている諸々の物質に対して正しい割合で硫酸をもたらすのを助ける
- 硫酸やカリウムを植物が利用するのを促す
- 必要な微量要素の吸収を可能にする。
- 金星と関係をもつ

### 503番 カルシウムと硫酸調合剤 (材料: カルシウムの花、雄牛の角)

- カルシウムと硫酸との関係をもつ
- 土の中の窒素を安定させる
- 植物の成長を刺激する土の生命を増加させる
- 植物がシリカとカリウムの間の正しい関係を見つけることを助ける
- 土が天気、宇宙環境から正しい量のシリカを取り入れることができるようにする
- 水星と関係をもつ

### 504番 イラクサ調合剤 (材料: イラクサ)

- 硫酸との関係をもつ
- カルシウムと鉄を刺激する
- 土を健康にし、植物が必要とする栄養要素を土が供給できるように刺激する
- 大地を快活にする
- 堆肥から窒素分が蒸発するのを防ぐ
- 火星と関係をもつ

### 505番 カシの木調合剤 (材料: 牛の頭蓋骨、カシの樹皮)

- カルシウムとの関係をもつ
- 有害な植物の病気と闘う力 (あるいは特質) をもたらす
- 治療力を供給する
- 非常に活性化したカルシウムを含んでいる
- 月の諸力の影響をおさえる
- 月と関係を持つ

### 506番 タンポポガ調合剤 (材料: タンポポの花、牛の頭蓋骨)

- ケイ酸またはケイ素、およびカリウムとの関係を促進する
- ケイ素が土に宇宙の力を引きつけることが出来るようにケイ素とカリウムの関係を刺激する
- 木星と関係をもつ

### 507番 カニコソコ調合剤 (材料: カニコソコの花)

- 土に対してリン酸分の調整機能を向上させる
- 堆肥に対して協力的な活性化作用をもつ
- 堆肥の発酵を助ける
- 霜、寒さから植物を守る
- 土星との関係をもつ

### 508番 スギナ調合剤 (材料: スギナ)

- さび病やほかの菌類など真菌類による病気を防ぐ
- 植物の品質の改良



## フェアトレード

来住美波・岡野内綾



### フェアトレード



来住美波  
岡野内 綾

### フェアトレードとは...

私たちの日常を支える輸入品の多くを作っている開発途上国の生産者たちと、**安定かつ持続可能な取引をすることで、生産地の環境を守り彼らの生活をサポートする「貿易のしくみ」**です。

### 国際フェアトレード認証ラベルとは?

フェアトレードに明確な基準を設定し、それを守った製品であることをわかりやすく伝えるために製品に貼ってあるラベルのことです。



### 例えば...



### 例えば...

コーヒー、チョコレート、ギフトセット、ポーチや小物、タオル...  
(People Treeのホームページから)



### FLOによる生産者サポート

Fairtrade Labelling Organizations International

- 生産者が抱える悩み

- (1) もっと良い生産技術はないか
- (2) 組合運営を円滑にするにはどうすればいいか
- (3) バイヤーとのコミュニケーションをどのようにとればいいのか

...これらの悩みに対してFLOは迅速に対応する。



## 世界のフェアトレード

### ☆フェアトレード・バナナ・デー

- ・2008年9月18日、ドイツでフェアトレード普及を目的に行われた
- ・6,500以上のお店と1,000人以上の学生・企業・ボランティアに加えてホッケーチーム、アーティストなど沢山の人がこの呼びかけに応えることで、達成目標であった100万本ものバナナの販売を達成した。



## マカイバリでのフェアトレード

- ・マカイバリ茶園は1994年ドイツに本部を置くFLOにフェアトレード生産者として加盟。マカイバリ茶園の紅茶はすべて前払いで購入され、売り上げの一部(奨励金)は茶園のコミュニティの口座に直接入金される。



## 奨励金の使い道...

- ・茶園にある二つの小学校を建てる
- ・小学校でコンピューター教室を開く
- ・託児所を建てる
- ・診療所を建て、そこでは無料で診察を受けることができる
- ・診療所では必要な薬、予防接種などは全て無料

## 日本のフェアトレード

- ①「日本フェアトレード委員会」
- ②「フェアトレード・ラベル・ジャパン」
- ③ネリバザーロ
- ④オルター・トレード・ジャパン (ATJ)
- ⑤グローバル・ヴィレッジ
- ⑥フェアトレード・サマサマ
- ⑦chocolate revolution
- ⑧ピースウィンズ・ジャパン
- ⑨パレスチナ・オリーブ
- ⑩オックスファム・ジャパン
- ⑪わかちあいプロジェクト
- ⑫シャブラニール
- ⑬シャンティ国際ボランティア会 (SVA)



## フェアトレードの問題点1

- 値段  
フェアトレード雑貨は一般のアジア雑貨に比べて値段が高い
- 納期  
貧困のため病気や災害に遭いやすい
- 品質  
生産団体が小規模で、技術的に未熟



## フェアトレードの問題点2

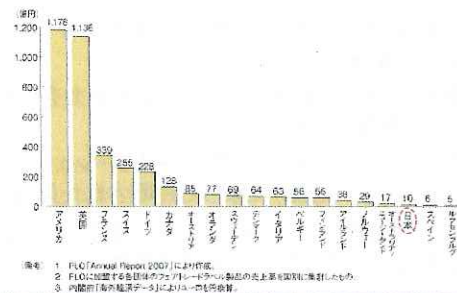
- 本当にフェアトレード？  
『フェアトレード製品』として売られているものが、本当に現地のNGOや非営利生産者団体から輸入されているものなのか証拠がない。
- フェアトレードが広まりにくい  
思うように製品化への実現までには至らないことも多く、消費者の認知度もまだまだ低い



## 日本人はフェアトレード製品を買わない

■1-2-4 諸外国と比較しても日本はフェアトレードラベル製品の売上が少ない

●各国のフェアトレードラベル製品の売上高(2007年)



## 日本人はフェアトレード製品を買わない

日本 8円  
スイス 3,396円

…国民ひとりが一年間に購入したとされる  
フェアトレード製品の額

アメリカ 392円

## 私たちにできること

- ①フェアトレード認証製品を選ぶ
- ②身近なところから…
- ③贈り物に!
- ④職場や公共施設
- ⑤学校で
- ⑥町や市を
- ⑦まわりに伝える





# バイオダイナミック農法

北村沙知



## バイオダイナミック農法とは？

- 別名：バイオダイナミック農法/ビオデナミ・シュタイナー農法
- 種や作物・土壌・調合剤などの生命力を中心として研究されている
- オーストリアの人智学者 ルドルフ・シュタイナー(1861-1925)によって提唱された農法
- 手法は公開されているのだが、オカルティクな考えのため、なかなか浸透されにくい

## ルドルフ・シュタイナー

- オーストリア生まれの哲学者/人智学者
- ゲーテ研究家、著作家兼講演家として活躍
- 自然科学と精神科学を有機的に総合した人智学を樹立
- 1919年、ドイツのシュトゥットガルトに自由ヴァルドルフ学校(シュタイナー学校)を創立

現在、世界中にある約700校のシュタイナー学校は、共通の理念のもと、それぞれの国、風土、民族性などにより育まれ、発展を遂げている。  
また、シュタイナーの理念は、教育以外の様々な社会的実践の場(医療、農業、経済など)でも生かされ続けている。

## 特徴

1. 天体の影響を受ける
2. 共生
3. 調合剤



## 天体と農法

- 私たち人間も月の満ち欠けによって体のリズムが作られているように、植物や動物も皆、天体からの影響を受けている  
→ 天然のハーブを撒くと、天体の力を受けやすくなる  
= 力強い土になる



天から力を得た作物は食する人にも活力を与えてくれる

## 共生

- マカイバリ茶園では共生を大切にしている  
→ 特に牛は大切にされている  
ex.)・バイオガス→生活のエネルギー/牛糞を売ること副収入となる  
・調合剤として利用



毎週木曜日に牛のあげている  
団子。  
特別な粉にコリアンダー、  
ハーブを混ぜてつくったもの。

木曜日は太陽が一番強く、  
この日が一番牛が穏やか  
になる。

この団子を食べることに  
よって牛の角に縁ができる。



## 調合剤



- 調合とは...  
→畑に散布したり、堆肥へ入れることにより、微生物を活性化させるもの  
→活性化させることにより、どんな土地でも理想的な土作りを行うことができる
- 別名: Preparations
- シュタイナーは、499番からなるホメオパシーの延長として、500番～508番の9種類の調合剤を作りだした  
→バナジー氏は9種類の調合剤がそれぞれ人間の臓器の役割を果たすと考える。  
心臓の役割、消化の役割、分泌の役割など、人間の体内で生命維持に必要な主な臓器の役割(調合剤)が土に撒かれることにより、土が人間の体のように働き始め、生命力豊かな土に育つと考える。  
マカイバリの理念はHolistic(全体的なつながり)であり、ひとつが欠けても機能しないということである。

## 9つの調合剤

500番	牛糞を牛の角に詰めて作られる	土の力と植物との間に良い関係を築かせる調合剤。土に撒く調合剤で、大地を活性化させる。
501番	水晶を牛の角に詰めて作られる	植物が太陽の光の関係を保つように働く。色づき、芳香、風味を良くする。病気や害虫に対する抵抗力を高める。
502番	ノコギリソウの花を牡鹿の膀胱に詰めて作られる	大地を活性化し、植物の内の物質に対して硫黄の量を調整など。また、必要な微量元素の吸収を助ける。
503番	カミツレの花を雌牛の小腸に詰めて作られる	土の中の窒素を安定させ土の生命力を増す。土のシリカ・カルシウム・硫黄などの調節をする。
504番	イラクサを土に埋めて作られる	カルシウムと鉄を調整し、土を健康にする。硫黄との関係を持ち、堆肥から窒素分が蒸発するのを防ぐ。
505番	オークの樹皮を牛の頭蓋骨に詰めて作られる	活性化したカルシウムを含んでいて、植物の病気に対する治療力をもたらす。月の影響を抑える働きを持つ。
506番	タンポポの花を熊胆詰めて作られる	ケイ素が土に宇宙の力を吸収することが出来るようにケイ素とカリウムの関係を調整する。
507番	カノコソウの花から作られる	リン酸分の調整機能を向上させ、堆肥への活性化作用を持つ。堆肥の発酵を助け、霜・寒さから植物を守る。
508番	スギナから作られる	さび病等の真菌類による植物の病気を抑える調合剤。植物の品質を改良する。

## マカイバリ茶園において

- 1986年より実施  
→それまで化学肥料を使用していた父を納得させ、現代4代目茶園主S.K.バナジー氏が始めました。  
→1993年に世界で最も基準が厳しいとされるデメター社のバイオダイナミック農法の認定を取得し、以後、毎年更新しています。
- その他数多くの賞を受賞  
→バイオダイナミックの実績が評価されている



## 参考文献

- Makaibari Japan  
<http://www.makaibari.co.jp/>
- 日本バイオダイナミック協会  
<http://biodynamic.press328.com/>
- バイオダイナミック おっちらと農園  
<http://www.mable.ne.jp/~bnf-moriyama/index.html>



## エコツーリズムについて

武田元子

### 1. エコツーリズムとは

The international ecotourism society

The Definition:

Ecotourism is: "Responsible travel to natural areas that conserves the environment and improves the well-being of local people." (TIES, 1990)

Principles of Ecotourism:

Ecotourism is about uniting conservation, communities, and sustainable travel.

エコツーリズム原書<参考> (環境省)

エコツーリズム＝自然 (歴史文化) 体験・学習型観光の総称

自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた

### 2. エコツーリズムの歴史

1983 年 マキシモの環境問題専門家、建築及びエコツーリズムの専門家の

Hector Ceballos Lascurain が「エコツーリズム」という言葉を使い始める。

1988 年 Hector Ceballos Lascurain が論文の中でエコツーリズムを

「風景や野生植物、動物及び見出された現存の文化的創造物を特別に研究し、観賞、享受する目的で、比較的荒らされていない、もしくは汚染されていない地域を旅すること」と定義。

1989 年 The international ecotourism society 設立

環境保護と持続可能な開発の手段エコツーリズムを掲げる非営利、世界初の団体。フロリダで Megan Epler Wood が設立。

「小笠原オールドフオットング協会」設立

① 観光船によるクジラの過度接近を防ぐ自主ルールを制定

② クジラの調査研究

1990 年 環境庁エコツーリズム提唱

1991 年 環境庁「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」

1992 年 リオ・デ・ジャネイロにて開催された「環境と開発に関する国際連合会議」

にて、持続可能な発展のための国際指針「Agenda21」が採択

1998 年 エコツーリズム推進協議会 (後の日本エコツーリズム協会) 設立。

2002 年 国連エコツーリズム年

「国際エコツーリズム年」記念シンポジウムが国連大学ビルで行われる

2003 年 「エコツーリズム推進会議」が設置 議長は環境大臣(詳細は「4.」)

日本エコツーリズム協会NPO法人として認可

2004 年 「エコツーリズム推進会議」5つの推進方策とりまとめ(詳細は「4.」)

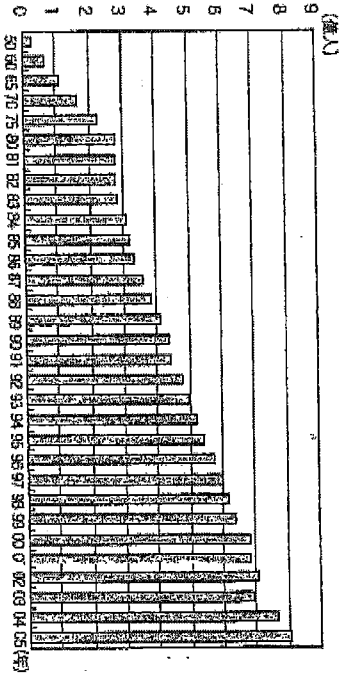
2007 年 「エコツーリズム推進法」成立

### 3. エコツーリズムの普及した背景

#### ①観光形態の変化

「マスツーリズム」の拡大

1950 年 約 2530 万人→1980 年 約 2 億 7810 万人 (30 年で 10 倍以上！)



その結果、観光公害 (ゴミの放棄、景観の破壊、落書き、野生生物への給餌) が発生。エコツアーをはじめとする付加価値の高いツアーを提供する動き

#### ③ 境問題への対応と持続可能性の概念の登場

1970 年代初頭 世界経済が拡大基調

世界的に環境問題への危機意識が募る

「国連人間環境会議」開催

世界初の環境問題に関する政府間会議

6月にスウェーデンのストックホルムで開催

環境問題が人類共通の課題である事を確認。

「人間環境宣言」別名ストックホルム宣言がまとめられた。

ローマクラブ (※) 「成長の限界」

人口増加や環境汚染などが現在の傾向で続けると、100年以内に  
人類の成長が限界に達するという警告

※ローマクラブ・・・地球規模の問題解決をめざして設立

1984年

「国連環境開発世界委員会」開催

日本が提唱した環境保全と経済発展を同時に実現させる新しい開発原則

1987年

報告書『地球の未来を守るために』発表

「持続可能な開発」の概念が提示

将来世代のニーズを損なうことなく、現在のニーズに応えるよう資源や  
環境をうまく利用することによって、長期的な  
社会発展を推進する開発手段

1992年

持続可能な開発のための国際指針「Agenda21」(※) が採択

※「Agenda21」→1992年にリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議で採択された

文書のひとつで、21世紀に向けて持続可能な開発を実現するための  
具体的な行動計画である。4部構成全40章からなり500ページにも及ぶ。

### ③開発援助への見直し

1970年代

発展途上国に対する政府開発援助 (ODA) や経済開発支援が  
観光開発プロジェクトに展開

世界銀行より18カ国24のプロジェクトで4億5000万ドルが直接貸付  
→貧困対策の重視、財政破綻や環境破壊を招いたため下火に

1980年

「持続可能な開発」自然環境に悪影響を与えない開発支援が始まる

1980年半ば

フロンティアシジョン (※) やマースツリズムに代わる外貨取得手段としてエ  
コツーリズムを推進

中東コスタリカ

森林伐採による急激な自然環境の破壊を危惧。国土の4分の1を自然  
保護区、国立公園として指定。エコツーリズムを推進し管理計画を策定。

2006年には観光収入が16億6000万ドル。GDPの7.5%

ジンバブエ

小規模事業者として野生生物ツアーがあり、同じ土地面積の牧畜業に  
比べ、毎年3倍の収益

南アフリカ

ジンバブエ同様、野生生物ツアーで同じ土地面積の牧畜業に比べ  
1.5倍の雇用創出効果。

マカイバリ

ホームステイを毎日受け入れると茶園のみの収入の10倍

※フロンティアシジョン・・・熱帯・亜熱帯地域で原住民や移民などの安価な労働力を使い、単一  
の商品作物を大量に栽培すること

### 4. 日本におけるエコツーリズム取組み

エコツーリズム推進会議

エコツーリズムの普及・定着のため関係業界、有識者、関係府省などで構成。

下記5つの推進方策を取りまとめた。

1. エコツーリズム憲章

2. エコツアー総覧→日本のエコツアー辞典 (Web)

3. エコツーリズム大賞

→2005年 第一回エコツーリズム大賞は「小笠原ホエルウオッチング協会」

4. エコツーリズム推進マニフェスト

5. エコツーリズムモデル事業

エコツーリズム推進法

エコツーリズムの基本理念を定め、エコツーリズムの3本柱、自然環境の保全、観光復興、地  
域復興を推進するために必要な事項を定める。

日本で行われているエコツーリズム

塩原溪谷スノーレッキン2010 (栃木) 太岳岳 (屋久島)、

宮古島1日1組限定貸切エコツアー、ホエルウオッチング (沖縄)、等

### 5. 参考文献

Sue Beeton (著) 小林英俊 (訳) 2002 平凡社

「エコツーリズム教本 先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド」

敷田麻美 (編・著) 「地域からのエコツーリズム」2008 学芸出版社

愛知和夫/盛山正仁 (編・著) 「エコツーリズム推進法の解説」2008 きょうせい

エコツアー総覧 (<http://ecotourism.jp/>)

国際連合広報センター (<http://unic.or.jp/index.php>)

環境省 (<http://www.env.go.jp/index.html>)

Ecozy.com エコツーリズムと持続可能な観光 (<http://ecozy.fc2web.com/>)

The international ecotourism society (<http://www.ecotourism.org/site/>)

国際エコツーリズム年について <http://unic.or.jp/new/pr02-003.htm>

国際エコツーリズム年 記念シンポジウム <http://unic.or.jp/new/pr02-048.htm>

## インドの教育

田平あさ希・蓮井愛子



### 教育制度

- ・初等教育（小学校5年＋中学校3年）
- ・中等教育（高等学校2年＋上級高等学校2年）
- ・高等教育（一般大学3年、医科／工科大学4年）
- ・☆就学前教育（三歳から）

### 学校年度と学期制

- ・5歳になったら就学
- ・一学期  
→4月から8月
- ・二学期  
→9月から12月
- ・3学期  
→1月から3月

### 現状

- ・識字率60%（2001年の国勢調査）
- ・2002年憲法改定により6歳～14歳児の初等教育を義務化、無償化が図られた
- ・多くの州が義務教育を特に定めていない
- ・公立の学校と私立の学校の間との格差

### 対策

- ・非識字率を減らすキャンペーン
- ・成人の教育に力を入れる
- ・初等教育の義務化

### ケララ州の特徴

- ・共産党による読み書きの教育の推進  
→識字率が約100%
- ・農業があまり盛んではない
- ・6割の学校が民間団体によって運営されている



## マカイバリにおける教育

- ・ 集落の中に2つの学校
- ・ 州政府による運営
- ・ 自然を大切にする心をまなぶ
  - 自然のリズムに感謝する
  - 自然における人間の役割を積極的に演じる子供に育つ

## 今後の展望

- ・ 2015年までに識字率を100%に
- ・ 識字率の向上による新聞企業界の成長
- ・ デジタルデバイドを埋める取り組みによる農村部にける経済成長の可能性

## まとめ

- ・ 義務教育を国全体で定める
- ・ 私立と公立の格差を縮めるような対策を政府が行う
- ・ 富裕層による金銭面での援助
- ・ 知識人によるボランティア活動

## まとめ

- ・ 義務教育を国全体で定める
- ・ 私立と公立の格差を縮めるような対策を政府が行う
- ・ 富裕層による金銭面での援助
- ・ 知識人によるボランティア活動

## わき上がる頭脳パワー

- ・ 年率8パーセントの経済成長
  - ・ 2005年のGDP: 7,855億ドル (日本: 4兆5059億ドル)
  - ・ 2007年のGDP: 1兆1710億ドル (日本: 4兆3767億ドル)
  - 20年間で3倍以上に成長
- ↓
- 世界で最もソフトウェア・エンジニアの多い国

## インド工科大学 INDIAN INSTITUTES TECHNOLOGY

- ・ 設立者: ジャワハルラール・ネルー
- ・ 最初のキャンパス: 西ベンガル州のカラゲプル



## インド独立

- ・ 1757年：ブラッシーでの戦い（ベンガル地方）  
イギリス東インド会社軍 VS  
ムガル帝国のベンガ太守軍（フランス軍の支援）

→ベンガル地方カルカッタ（現：コルカタ）をインド統治の拠点とする

- ・ 1772年：イギリスの植民地支配
- ・ 1947年8月15日：インド独立

## 貧困問題・教育問題

- ・ インフォシス基金
- ・ 昼食支援サービス
- ・ 「インフォシス科学技術センター」設立



「Dedicated to the service of the Nation（国家のために身を捧げる）」

## リシヴァリー・エデュケーションセンター

- ・ インドの哲学者 ジッドユ・クリシュナムルティ
- ・ 1926年インド南部のアンドラ・プラデッシュ州に創設

- ・ 「リシヴァリー・スクール」
- ・ 「リシヴァリー農民教育センター」
- ・ 「農村ヘルスセンター」
- ・ 「クリシュナムルティ・スタディ・センター」



## リシヴァリー・スクール

- ・ 「自然美とのふれあい」
- ・ 「対話」
- ・ 「ふれあい」

人と人との「つながり」  
自然との「つながり」



## インドが日本に問いかけるもの

- ・ 「自分のためだけでなく、家族や、地域、そして、インドのために勉強する」
- ・ 「インドの発展のために貢献したい」
- ・ 環境教育、持続可能な教育（ESD）の実践

## 参考文献

- ・ 『インドの衝撃』NHKスペシャル取材班編著
- ・ 『持続可能な教育と文化 進化する環太平洋のESD』日本ホリスティック教育協会 永田佳之・吉田敦彦編
- ・ 論文：「つながり」を大切にする学校～豊かな自然環境に囲まれた教育実践から～望月裕司著



聖心女子大学 スタディーツアー勉強会

「MAKAIBARI TEA ESTATE マカイバリ茶園」



有限会社マカイバリジャパン  
石井道子 2010年1月13日



## CONTENTS

- マカイバリ茶園との出会い
- マカイバリ茶園の紹介
- マカイバリ茶園のユニークさ  
自然を守るレンジャー部隊  
人々の生活を支えるバイオガス  
農法(パーマカルチャー、マルチング)  
バイオダイナミック農法
- 茶園の人々(フェアトレード生産者)
- マカイバリ茶園紅茶の楽しみ方  
数々の賞を受賞。季節の違い、グレードの違い

## マカイバリ茶園 MAKAIBARI TEA ESTATE

- 西ベンガル州ダージリン・クルセオン地区に1859年に創立されたダージリンで最も歴史がある茶園
- Makaibariは「とうもろこし」「肥沃な土地」の意味
- 茶園の広さは670ha(東京ドームの140倍以上)
- 茶園の3分の2を原生林のまま残し、WWFに登録されているトラ2頭、鹿、ヒョウ、ヘビ、300種類の野鳥が生息。多種多様な草花、樹木が生息。



## マカイバリ茶園 MAKAIBARI TEA ESTATE

- 4代目茶園主 ラジャ・バナジー氏(63歳)
- ダージリンの中で茶園主が常駐しているのはマカイバリ茶園のみ
- 英国王室に100年以上御用達。紅茶は数々の賞を受賞
- 1994年にフェアトレード生産者として登録。1700人のコミュニティの人たち。



## 自然を守るレンジャー部隊 マカイバリ茶園のユニークさ

マカイバリ茶園では動物会議が毎週月曜日に行なわれる。レンジャー部隊が森に住む虫、鳥、動物がどのような状況で生息しているのか報告する。



## 人々の生活を支えるバイオガス マカイバリ茶園のユニークさ

- 各家庭で牛を飼う



- ➡ 森林伐採を防ぐ  
女性の労働を軽減  
糞はマカイバリ茶園が買い取る  
ミルクはマーケットで売る



## パーマカルチャーの実践 マカイバリ茶園のユニークさ

- パーマカルチャー (Permaculture) とは、単一作物を栽培するモノカルチャー (Monoculture) に対して使われる言葉。

第1層  
原生林  
第2層  
マカイバリ茶園に常緑しているマメ科で、日陰をつくる木 (ネム/キなど)  
第3層  
一時的に植えるマメ科で、日陰をつくる木 (イン/ディゴなど)  
第4層  
マメ科の果実の木 (ニーム、ガデマラ、ネピアグラスなど)  
第5層  
紅茶  
第6層  
様々な種類の雑草、ワイルド植物、土の下の植物



## マルチング マカイバリ茶園のユニークさ

- ガデマラグラスを草に敷き詰めることによって雨期のときは崖崩れから守り、乾期のときは水分の蒸発を防ぐ。最後には土の肥料になる。マカイバリ茶園の土は歩くと柔らかい。



## バイオダイナミック農法 マカイバリ茶園のユニークさ

- バイオダイナミック農法  
オーストリアの人智学者 ルドルフ・シュタイナー (1861-1925) によって提唱された農法。マカイバリ茶園は1986年から実践。1993年には世界で最も基準が厳しいとされるデメター社のバイオダイナミック農法の認定を取得。以後毎年更新

- 主な特徴は
1. 天体の動きを利用する
  2. 動物との共生
  3. 調合剤を用いる



demeter

## バイオダイナミック農法 (調合剤) マカイバリ茶園のユニークさ

- 500番  
土に対して直接働きかけるもの。作物が植え付けられる前の農地に対して散布されます。雌牛の角に牛糞を詰め、冬の間に腐らせる。春に取り出し、土に散布する前に約1時間、充分に水の中で浸漬(かくはん)させる。そして天体の動きにあった日に農地に撒く。牛の角は人間の脳と同じ働きをする。
- 501番  
雌牛の角にシリカ(ケイ酸化合物・水晶の粉)を入れて作られる。夏に、植物に対して散布される
- 502番  
ノコギリソウを乾燥させ、牡鹿の膀胱に入れて土に埋め、特別な季節に掘り出す。膀胱の特徴は、分泌器官に反応して発酵が誘発に行われる。肥料も同様に補填される。また、植物が窒素やカリウムを利用するのを促す作用もある。
- 503番  
カモミールの花を牛の尿に詰め、堆肥に少量加えると、堆肥に消化的な働きを与える。土の中の窒素を安定させ、植物の成長を刺激し、土の生命を増加させる。
- 504番  
イラクサから作られる。堆肥の温度を一定に保ち、堆肥から窒素分が蒸発するのを防ぐ。



## バイオダイナミック農法 (調合剤) マカイバリ茶園のユニークさ

- 505番  
鹿の頭皮を牛の頭蓋骨に詰める。これは堆肥の頭脳の役割を果たす。非常に活性化したカルシウムを多く含む。
- 506番  
牛の腸隔膜にタンゴボの花を詰める。これは堆肥に呼吸を与え、菌叢機能の役割を果たす。シリコンとカリウムの関係を刺激する。
- 507番  
カノソウの花を搾り出し、雨水に約20分間浸漬(かくはん)させる。500番〜506番の作業が終わった後は、508番と一緒に堆肥に撒く。土の活性化作用を促す。
- 508番  
スギナを雨水に浸し、507番と一緒に堆肥に散布する。スギナは菌類による病気への抵抗力を高める。



## 森に住む動物たち

- ティーディバ (TEA DEVA)  
もしも農業が真にホリスティックな(全体の調和が繋がっている)状態で行われているのであれば、重要な作物には擬態(生き物)ができるだろう

ルドルフ・シュタイナー



## フェアトレード生産者



- マカイバリ茶園は、1994年にドイツに本部を置く Fairtrade Labelling Organizations International (FLO) に「フェアトレード紅茶農園」として加盟し、茶園で働く人々の生活向上、教育、保健衛生プロジェクトなどを精力的に行っている。



コンピューターセンター



女性自立支援プロジェクト



ホームステイプロジェクト



オーガニックEKTA



託児所



診療所

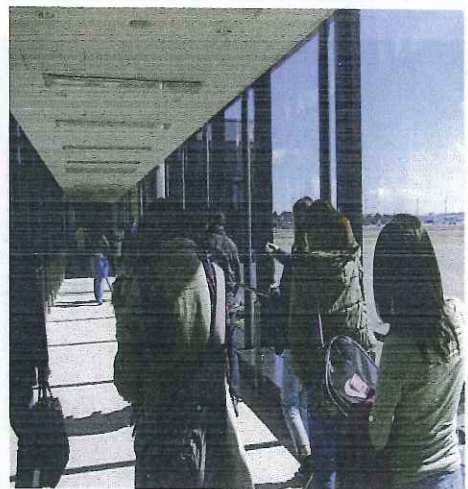


## **5. 写真**

### **Memorial Photos**

Feb.6<sup>th</sup>, 2010

[Let's go to India !]





Feb.7<sup>th</sup>, 2010

[mother's house in Calcutta • in Sikkim ]





Feb.8<sup>th</sup>, 2010

[Kangchenjunga • Tibetan temples ...etc]





**Feb.9<sup>th</sup>, 2010**

**[Good bye Sikkim, Hello Makaibari!]**





**Feb.10<sup>th</sup>, 2010**

**[Field work in Makaibari! Our family.]**





Feb.11<sup>th</sup>, 2010

[Tasting, Sharing...]





Feb.12<sup>th</sup>, 2010

[Makaibari tea factory, toy train]





Feb.13<sup>th</sup>, 2010

[Calcutta, Ganges River...]





Feb.14<sup>th</sup>, 2010

[Good-bye! Thank you for everything. ]



[Smile☺]





## 6. ひとこと ～言の葉～

一枚一枚の葉に同じものはない。私たち一人一人が感じた「それぞれのインド」を一言で表現しました。

続く

この旅はまだ終わってはいない！  
私たちにはまだなしとげなければならないことが、日本にあるのだから。

綾

信

信じるということは何にも勝る目に見えないもの。インドの方から内から込み上げるエナジーと揺るがない強い思いを感じた。時代が変わると共に「疑う」ことが多くなってきた現代、特に日本には必要不可欠だと思う。

沙知

終わりのない

自分のスタディーツアーは今始まったばかりである。今回のスタディーツアーでの経験が将来につながり、ずっと自分の中で生き続けるだろう。

翔子

縁

私が縁という言葉を選んだ理由は、今回私がスタディーツアーに参加したのも、そして参加したメンバーや先生、現地でお世話になった人々もなにか縁があって会ったと感じた。そしてスタディーツアーの経験を通して改めて人との縁の大切さを知り、これから日々縁というものを大切にしていこうと思ったから。

愛子

感

「感」という漢字はそれだけでも意味を持つが、ほかの漢字と組み合わせることで様々な意味の言葉になる。例えば「実感」「感謝」「感嘆」などだ。今回のインドでたくさんの思いや景色、出会いを通して感じた様々なことを表していると思うので、今回のスタディーツアー、インドを一言で言うと「感」である。

奈海

## Wings

事前学習で、人間が生きていくためには Roots と Wings の両方が必要だと習いました。社会に出た時自分を支えてくれるのが Roots (家族や価値観、友だち等) であり、自分のミッションを成し遂げる手段が Wings と例えられています。スタディーツアーではたくさんの Roots を増やすことができました。私にとっての次のステップは Wings (自分のミッションを成し遂げる手段) を得ることであるので、あえて Wings にしました。

美波

## 愛

愛とは甘い言葉、行い、浮ついた感情ではなく、痛みを伴う意思と努力である。痛むほどに愛しなさい。これがコルカタで学んだマザーテレサの教えである。

あさ希

## 笑顔

一人一人違う、すてきな笑顔に出会って、その笑顔を通してインドが特別な存在になったから。

萌

## 胎

ダイナミックな生命を包み込む空間であり、祈りに満ちた場所だから。

香奈

## 心

マカイバリ、シッキム、カルカッタは異なる文化があつたが、私が訪れて落ち着くところには、心を込めて仕事をしていたり、心を込めておもてなしをして下さった方がいる場所だった。文化は違っても、心を込めて生活するのは人類共通の大切なことのように感じた。

元子

## BOX1. 歌

### ふるさと

作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一

兎追いしかの山  
小鮒釣りしかの川  
夢は今もめぐりて  
忘れがたき ふるさと

如何にいます父母  
恙なしや友垣  
雨に風につけても  
思い出ずる ふるさと

志を果たして  
いつの日にか帰らん  
山はあおき ふるさと  
水は清き ふるさと

### ビリーブ

作詞・作曲／杉本竜一

たとえば君が 傷ついて  
くじけそうに なった時は  
かならずぼくが そばにいて  
ささえてあげるよ その肩を

世界中の 希望をのせて  
この地球は まわってる  
いま未来の 扉を開けるとき

悲しみや 苦しみが  
いつの日か 喜びに変わるだろう  
アイ ビリーブ イン フューチャー  
信じてる

もしも誰かが 君のそばで  
泣き出しそうに なった時は  
だまって腕を とりながら  
いっしょに歩いて くれるよね

世界中の やさしさで  
この地球を つつみたい  
いま素直な 気持ちになれるなら  
憧れや 愛しさが  
大空に はじけて耀るだろう  
アイ ビリーブ イン フューチャー  
信じてる

いま未来の 扉を開けるとき  
アイ ビリーブ イン フューチャー  
信じてる



## BOX2. ラジャ・バナジー氏講演会記録(2009/5/15, 17)

### 於: JICA 地球広場

「フェアトレード生産者から学ぶ 持続可能な世界とは？」

主催：フェアトレード・ラベル・ジャパン

共催：(有)マカイバリジャパン

講演：(社)日本セルフ・サービス協会

助成：東京ガス環境おうえん基金

出典： <http://www.makaibari.co.jp/> (2010/06/18 アクセス)

世界は今、岐路に立っています。悪魔と深海の狭間に私たちは追い込まれています。私たちは地球温暖化と金融破綻という双子の脅威にさらされています。

昨今の金融破綻は、見境のない産業化と消費主義の飽くなき追求のもたらす欠点を残酷に露呈しました。衰えることのない物質的な欲望の追求が、事実上、世界的な金融制度に破綻をもたらしたのです。私たちはこのような間違いをいったいどこでどのように、どうして犯してしまったのかをきちんと見極めなければなりません。私たちはこの恐ろしい状況に真正面から取り組み是正、この地球の子供たちに健康で生き生きとした未来を約束する持続的な解決法を実践していかななくてはなりません。何千年間も人類を維持し建設的で相乗効果を発揮できるような地球にしていかななくてはなりません。

さて、持続可能性という橋を支える 2 つの柱について私たちはしっかりと理解し、明確に定義し、しっかりと築いていかなければなりません。この 2 つの柱とは何でしょうか。ひとつは産業化を牽引する技術です。現在、私たちは生活に重要な役割を果たす技術なしで生きすることはできません。携帯電話やコンピューター、テレビ、機械類、自動車、日常生活に便利さをもたらすいろいろな器具や装置なしではやっていけません。ということで技術はなくてはなりません、しっかりと根付いたひとつの柱です。技術が生活で重要な部分を占めるとはいえ、これは私たちが使うものであり、決して我々が技術の奴隷になってはならないのです。

10 年前は、携帯電話など全くなかったのですが、それでも日常業務をこなしていたのです。今ではそれが毎日の生活で非常に重要です。私たちはそれに依存してはならないのです、さもないと、単なる電気の手錠(枷)が私たちに奴隷にさせてしまいます。使用によって自分の平和が保たれるような使い方を見極めなければなりません。私たちは自分のバランスを失うことなく効果的に使うことを学ばなければなりません。これは私たちを取り囲むすべてのハイテク機器についても同じです。つまり重要なのは、技術的な発明を識別して使うことです。見境のない使い方ではなく適切な使用には無駄がありません。無駄がなければ、自尊心が高まります。自尊心があれば、他のすべての生命に敬意を持つことが

できます。さらに、これは人を自己の解放、自由への探究へと導きます。自由になることは、全人類の究極の望みです。人は独立していなければ、持続可能な存在でなければ、決して自由にはなれません。ということから、解放への最高の道具のひとつが総合的に持続可能になることです。世界的な金融破綻は、基本的な限度を無視した投資銀行の無分別で野放図な業務の結果によるものです。銀行業務の限度は、夢のようなバブルの巨大な利益という見境のない野望をもった銀行幹部に無視され、結局はバブルがはじける結果をもたらしたのです。基本的な基準を遵守するという規律がないために、一夜にいて何百万もの人たちに痛み、苦痛、悲惨さをもたらしたのです。過去 20 年間、何百万人が穏やかに通ってきたドアが一夜にしてボタンと閉められたのです。そのドアからかつてのように自由に行き来することはできません。その結果、恐慌を招き、日常生活のあらゆる面で巨大な絶望が蔓延してしまいました。これも直接的にせよ、間接的にせよ、この金融機関に関与しているのです。

さてこのような現在、巨大なチャンスもあるのです。闇夜のとばりは開けられることを人々に示すチャンスです。ドアが閉まるとき、たくさんの窓が開きます。代わりに窓が地球温暖化と金融破綻という双子の難関を克服しようと待機しています。

これから、私はマカイバリで行われているこの脅威への回答となるような持続可能な解決策をひとつひとつ紹介していきます。

有機栽培、フェアトレード商品への需要は北半球の国々で驚異的に高まりつつあり、双子の脅威による痛手をほとんど受けていません。これは有機的に倫理正しく育てられた食物は、現代私たちが直面する難問に総合的に対処し是正するという真実がようやく受け入れられたという結果に他ならないのです。これらが生み出す相乗効果が、経済、政治、環境的な必要性に対する包括的な答えであり、それが健全な土壌を創ります。健全な土壌とはもちろん健全な人間のことであります。

フェアトレードとは何でしょうか。どのような仕組みなのでしょう。フェアトレードの起源についてご紹介しましょう。20 年以上前、あるオランダ人が仕事でメキシコを訪問していたときに、メキシコのコーヒー生産者の状況を知って愕然としたのでした。小さな生産者たちは劣悪な条件のもとで辛うじて生計を営んでいました。旅に出てひと時は心を揺り動かされても日常に戻ってしまえば忘れてしまう私たちとは違って、そのオランダ人は新しい使命を開始したのでした。オランダにあるコーヒー業者を一軒一軒訪問しては、メキシコの小規模コーヒー生産者との公平な貿易の大切さを説明して回ったのです。彼はフェアトレード商品を普通のスーパーでも販売してもらえるよう、小さな生産者から正当な価格で直接購入し、コーヒーには、フェアトレード商品である証としてパッケージにかつての小説の主人公で、植民地の人々の権利を守るために活動した改革者の名前にちなみマックス・ハヴェラーとラベルを付けて販売することを思いつきます。そうしてラベル付きフェアトレードコーヒーは、オランダのスーパー・マーケットに陳列されました。売上

は急上昇、その後はご存知の通りです。マックス・ハヴェラーのもとでフェアトレードラベル運動はどんどん成長し、その後 10 年後、世界のフェアトレード・ラベル推進団体が国際フェアトレードラベル機構 (FLO) の傘下に統合されました。ヨーロッパのマックス・ハヴェラー、イギリスのフェアトレード財団、ドイツ・イタリア・北米・日本で展開されていたトランスフェアは、人が手をあげている世界共通デザインのフェアトレード認証ラベルの下に統一されました。フェアトレードはコーヒーに続き、カカオでも大きく成功しました。これらの生産者はすべて組織されていない小規模農民のため、関心のある消費者に生活の苦しい生産者の苦境を訴えることは比較的簡単なことでした。

ところがイギリス人の消費財である紅茶となると、組織化された大きな農園で生産された商品であるため事情が複雑でした。まず世界的な紅茶の生産者には、フェアトレードの倫理基準を満たす小規模生産者が存在しないのです。ようやく今から 15 年前の 1994 年になってマカイバリが発見されたのです。世界で最初にフェアトレードとして登録された茶園がマカイバリでした。なぜマカイバリが選ばれたのでしょうか。現存するすべての茶園の中で、マカイバリだけが農地とそこで働く人々の共同体を別の新しい方法で運営する唯一の組織化された農園だったからです。多くの大規模茶園は一般的に今日でも植民地式の階層的に経営されています。それよりもさらに重要なことは、フェアトレードに認証されるための基準のすべてが、これまでマカイバリで実践されてきたことそのものなのです。

ではどのような仕組みなのでしょう。消費国の輸入業者は、リーフ・ティーが 1kg あたり 2 ドル 10 セント、ファニングス・ダージリン茶が 50 セントという奨励金を茶葉の代金とは別に支払います。奨励金は、ボンの FLO に認められた NGO とインド準備銀行 (厳格な条件で外貨送金を監督し逸脱者には厳しい罰則を課す) に送られます。NGO はその資金を直接、マカイバリ合同委員会 (MBJB) の口座に振り込みます。マカイバリ合同委員会は、17 名のメンバーで構成され、そのうち 10 名が女性で 7 名が男性です。茶園の中から選挙で選ばれた 14 名と経営側に任命した 2 名。そして、私が唯一の終身メンバーとして全員一致でえられ、何か起きたときに 1 票を投じることができます。言うまでもないことですが、過去 15 年の間、私は行き詰まった論争を解決するために呼ばれたということは一度もありません。これはすべてのプロジェクトが事前に民主的によく議論された上で決定している事を立証するものです。プロジェクトは広範囲に及びます。家畜の購入と養育、バイオガス・ダイジェスターの建設、民間医療、奨学金、子供への最新式の図書館の設営、革新的な植林計画、女性の自立支援グループ (SHG) の草を使った紙作り、その紙はまた別の女性自立支援グループによりマカイバリの箱作りに使われマカイバリをエキゾチックに仕上げます。また職業訓練、訪問者へのホームステイなどがマカイバリ合同委員会の実施している成功事例の一部です。

バイオガスについては特別に紹介するに値する、どんな田舎の共同体でも最大の財産といえるでしょう。どんな糞であってもその臭さはメタンガスの臭いから来ています。糞をスラリーにし (懸濁液)、容器に貯め、ガスを放出させます。容器をゴム管で料理用のコ

ンロにつながります。魔法のように栓をひねるだけで無公害の再生エネルギーが得られるのです。森林が破壊されることもありません。スラリーはコンポスト・ピットへと流れ込み、最高の治癒力をもった土壌バイオダイナミック肥料となります。

世界のどこでも背中を曲げて重労働を行っているのが女性であり、それだけでなく残念なことに二流市民として扱われています。マカイバリもかつてはそうでした。女性たちはいつも朝4時に起きて、その日に必要な燃料である薪集めに出かけ、朝食と昼食を用意し、子供たちを学校に、男たちを仕事へと送り出し、自分たちも8時間、茶畑で働きます。夕方に帰ればまた家事、子供の宿題を見て、男たちが自家製の酒で地球規模の問題解決を試みないように監視し、性的に叩かれ役に使われ、ようやく疲れ果てて眠りにつく、ということ、全く贅沢とは言えないでしょう。バイオガスが彼女たちを過酷な苦役（遠くへの薪集め）から救ったのです。有機的に果実や穀物、野菜を栽培するために堆肥を使うことは、市場にある化学肥料で育った野菜を買うお金の節約になるだけでなく、それらを日常的に消費することで健康促進にもなります。余った肥料を茶園に販売し、牛乳を街に売って収入を産み出します。牛を飼い、バイオガスを作り出す仕事は、自尊心ある草の根起業家を育てます。女性たちがこのチャンスを掴んだとき、両方を得て成功が保証されます。故に質素なバイオガスが女性たちの権限を強めます。そして女性たちが強くならない限り、どんな共同体も建設的に前進していくという望みを持つことができません。一旦これらが実現すれば、大きな活動へと発展し、共同体だけでなく国家自体も向上します。ということで、フェアトレードの奨励金は、堆肥の肥料とともに茶園の維持に大きな役割を果たし、女性たちを草の根起業家にすることで女性の権限を強めることに役立っています

牛にも驚くべき新事実を発見し、マカイバリの経営体制を未来の地方の生活様式の世界モデルとしてだけではなく、経営において世界的な先駆者になったことに大きな影響を与えました。18年前に、私は自分の6頭の乳牛の世話を任せていたテージ・バハドゥールと会話していたときに、彼にどれくらい牛乳が取れるのかを聞きました。すると彼は猛烈に頭を掻きました。私が答えを強要すると、彼は、目をそらして4リットルと答えました。それが良いのか悪いのか、わからない状態で、私は彼の牛から取れる量について聞きました。また彼は猛烈に頭を掻きました。なんども説得してようやく彼の牛からは10リットル取れるという回答を得ました。私の牛小屋はあれでよいのだろうか。餌は妥当だろうか。世話の状態はよいのだろうか。運動は充分だろうか。最善の医療を受けているだろうか。これらの質問に、私の牛は限りなく充分な世話を受けていると彼は答えました。ではなぜ彼の牛の半分以下しか搾乳できないのか、という問いには、彼は答えませんでした。これが理由で彼は過去5年間、私のこの質問を非常に恐れていました。私は非常に怒って帰宅して不平を漏らしました。きっとテージ・バハドゥールは牛乳を盗んで売り、生計の不足分を補っているのではないだろうか。自宅で妻のスリルーパーは、なぜ怒っているのかと聞いたので、怒ってテージ・バハドゥールは泥棒だと答えました。妻は、私が今までのすべての人生において私が知っている人たちが黙って盗むなど想像すらできない、おそら

く過ちは私側にあるはずで、その過ちの原因を確認すべきだと言ったのです。

翌朝、私は自分で乳搾りをするにせよ、惨憺たる苦しみを味わいました。舐められ、尻尾で打たれ、角で突かれました。私はすっかりめっちゃめっちゃにされました。そこでテージ・バハドゥールが2頭目を搾るのを私が監督しました。すると搾乳量は4リットルだったのです。明らかに彼は盗んではいなかったのです。少ない搾乳量の原因を見つけることができず、翌週から私はもっと落ち込んでしまいました。1ヵ月後、無作為に村人に聞いてデータを集めることを思いつきました。マカイバリの7つの村には、乳牛は全部で1000頭以上いるのです。その結果にさらに私は落ち込みました。最高のもので14リットル、最低でも8リットルでした。

最初の問いから2ヵ月してようやく私は、この問題を他の視点からみることにしました。私がやっていなくて村人がやっていることはいったい何なのかを調べました。そして私はひとつのことを理解したのです。私の牛はあらゆる面で最高の世話を受けているが、ひとつの点が欠けていたのです。村人たちは自分の牛を世話しているけれど、私は人を雇って自分の牛の世話を任せていたのです。これは驚くべき発見でした。それから私は調査したのです。そしてわかったことは、オーナー自身が茶園を営んでいるのは私だけだったのです。他のすべての茶園は、プロの経営者が運営していました。さらなる発見は、過去20年間のダージリン茶の生産量はかなり減少したのに反して、マカイバリは有機栽培に切替えた後でさえ、持ち堪えているのです。自分の牛であれば、牛の飼育について他人からのアドバイスなど不要だということは明白です。このことに気付いてから私たちは能力強化に力を入れるようになり、特にマカイバリの共同体については将来のパートナーとして女性の権利拡大を強化するようにしました。

10年前まで、世界のどこでも、情報公開については経営者が管理していました。それが権利であり、ほとんどの企業がバランスシートに適するように情報を調整していました。

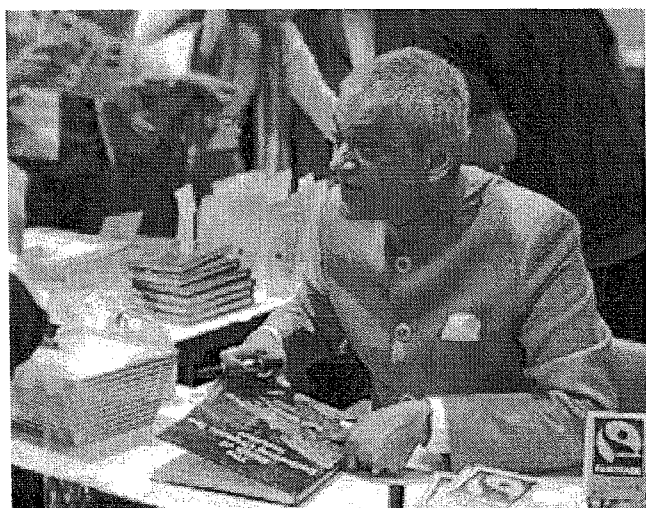
インターネットのアーカイブにより、もはや情報公開は経営の重要な手段ではなくなりました。今では世界のどこからでもインターネットからどのような情報もダウンロードできるのです。

それでは未来にむけて経営者の役割とはいったい何なののでしょうか。経営とは、動機を与えて意欲を起こさせるように鼓舞することです。では、実際に農場なんかで手足を汚したくないと思っているような若者たちにどうやって動機付けをすればよいのでしょうか。むしろロック・スターになりたい彼らに対してです。最初にお話したように、すべての経営者の重要な役割は若者たちが自尊心ある人間になれるように、それぞれに共同体において彼らが価値ある存在となれるような動機付けをすることです。これは彼らをパートナーにしてゆくということです。新しいマントラ（信条、スローガン）は、オーナーシップではなくパートナーシップです。

この最初のステップとして、マカイバリはダージリン地域で運動をスタートしました。有機栽培組合です。100名以上の小規模農民たちが自尊心ある草の根起業家になりました。



これが目に見える証拠です。『ハムロー・マカイバリ』（地元で作られた 10 分間の DVD を送ります。）これが未来です。土壌と、人と、環境と持続可能なパートナーシップを築いた公平な世界が、ホリスティックに関わりあうすべての存在にとって利益のある状態、つまり Win-Win な関係を創り出します。



©マカイバリジャパン

## BOX3. マカイバリ・ティーの入れ方

### マカイバリ茶園の紅茶をおいしく入れるコツ

1. あらかじめ、ティーポットとティーカップは温めておきます。（※1）
2. 温めたティーポットに茶葉を入れます。  
（茶葉 5 g で 2～3 人分。湯の量は 5g に対して約 550cc）
3. 新鮮な水（地域によっては浄水器の水）を沸騰させます。（※2）  
（電気ポットでは 100 度になりませんので、必ず火で沸かしてください）
4. 沸騰したての 100 度の湯をすぐにティーポットに注ぎます。  
湯の量は茶葉 5g に対して約 550cc（2～3 人分）。  
（上記は目安です。茶葉、湯の量はお好みに応じて調節してください）
5. ポットにティーコージー（茶帽子）またはタオルをかぶせて蒸らします。  
（蒸らす時間は約 4～4.5 分）
6. カップに紅茶を注ぎます。ティーカップが 2 客以上ある時は、順番に少しずつ注ぎ、色と味を均一にします。最後の一滴まで注いでください。

ティーカップに注いだ後、2 分ほど冷ましてからお召し上がりください。冷ますことで、味、香りの深みが増します。（※3）

ダージリンの雄大な大地で自然との調和によって育まれたマカイバリ紅茶をごゆっくりお楽しみください。

出典)

<http://www.makaibari.co.jp/chaba/irekata.html>

以下は石井さんに伺った「おいしくいれるコツ」の追加です。

※1.

ティーポットは陶器の方が適しているようです。

※2.

流れている水が良いようです。水道水でも浄水器でカルキを抜けば問題ないようです。石井さんがお勧めされていたヴォルビックを使う時、石井さんは水中に酸素を入れるためにシェイクしてから利用される、とのことでした。

※3

飲んだらまず口の中で回して味、香りを楽しんでください。酸素と結合して味が変化するようです。5, 10, 15分、一日と時間がたっても美味しいそうです。

また一度使った茶葉で3回まで紅茶を入れることが出来るようです。2回目は4～5分ではなく1日置いてから頂く、3回目は沸騰したお湯でなく水の段階から茶葉をいれ、一緒に沸騰させるとしっかり味と香りが楽しめるようです。

**ESD Study Programme**  
**-Learning to Live a Sustainable Life**  
**from Life-styles and Practices in India-**



**6-14 February 2010**  
**India**  
**(Kolkata • Makaibari • Darjeeling)**

**University of the Sacred Heart, Tokyo**

## Preface

“What is love? There are people who are so full of affection while there are those who are starved of love; and I have found myself at a loss what to do in front of these people in need of affection. This is a feeling I’ve got through the trip in India.” These are words expressed by one of the students who joined the study programme and went to India for the first time in her life.

I have organized overseas study programmes under the title of ‘sustainability’ and/or ‘ESD (Education for Sustainable Development)’ for three times in such countries as Lao PDR, Thailand and Australia. This time the destination I have decided to take students was India. One of the features of the trip to the country was that it was the very first time for most of the students in their lives to experience what we call the developing world. Therefore, it was a bit of a violent shock when they found themselves wandering into ‘another world’ where they often meet disabled children begging around them, young men on rickshaws at full load, old emaciated men lying down on the street, cows slowly crossing the roads between cars, skinny and weak dogs .....

Especially the children and youths whom the students saw in the poor district in Kolkata must have looked like “love-starved people”. However, for most of them, India has gradually changed its image as the tour went on, from a country which seemed to be suffering from poverty to a world of diversity.

Through the nine days’ travel, the students have encountered such diversified features of India as liveliness in Kolkata, children’s smiles at Mother’s House and an attached orphan’s home, magnificent ranges of mountains over 8500 meters high on the border area of Sikkim, vivid-colored miniature of esoteric Buddhist art, warm-hearted host families with whom they did homestay, ‘Toy Train’ of the World Heritage, and the everlasting flow of the Ganges River.

A highlight of the tour was a homestay programme and field study in Makaibari, a famous Darjeeling tea field. The students divided themselves into four topic-based groups of ‘Eco-Tourism’, ‘Bio-dynamic Farming’, ‘Fair-trade’ and ‘Bio-diversity’. They made presentations in front of the owner of the tea garden on what they discovered in their field. During their stay in the village of Makaibari, at breakfast they enjoyed freshly-made chapatti and the top-level quality organic tea served by their host families. Unfortunately, some of them suffered from touches of diarrhea and other ailments, however, they would never forget such heartwarming care and hospitality they had received for their recovery.



In a nutshell, this study tour started with the encounter with people craving for affection, and ended with people giving affectionate hospitality to the guests. They have gone through such diversified society of rich cultures and majestic nature. Deep feelings and emotions the students had got in India are condensed into some of the expressions in this report. I hope their impressions and expressions will be shared with the readers.

Last but not least, I would like to use this space to offer special thanks to all the people who provided the students with moral support. In particular we are all thankful for help from all the staff and family members of Makaibari Japan Limited, especially Ms. Hiroko Ishii who cared the students and helped their studies in Makaibari. My sincere gratitude also goes to Mr. T. Otsuka of Tairiku Ryoyu Ltd who made perfect arrangement of the tour. Lastly, to Ms. and Mrs. Banerjee who kindly shared real essence of 'Makaibari spirit' with the students not only through tea tasting but also through their personalities, I would once again like to say thank you from the bottom of my heart.

May 10, 2010

Yoshiyuki Nagata  
Programme Director  
Associate Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo

## 1. Programme Schedule

DATE	TIME	ACTIVITIES
Day1 6 February, 2010	11:30 18:00 19:00 20:35 21:00	Departure from Narita Arrival at Singapore Departure from Singapore Arrival at Kolkata Go to Hotel Lytton
Day2 7 February, 2010 (Kolkata, Gangtok, India)	7:30 8:00-9:20 9:25-10:45 10:45 12:20 13:20 13:30-18:30 15:10 18:30 19:30-20:50 21:20-22:00	Breakfast at Hotel Lytton Visit the Mother House Offering of flowers to Mother Visit the Shishu Bhavan Leave for Kolkata Airport Departure from Kolkata Arrival at Bagdogra Leave for Gangtok Arrival at Rangpo Tourist Centre Arrival at Hotel Tashi Delek Dinner at Hotel Tashi Delek Wrap-up Meeting
Day3 8 February, 2010 (Sikkim, India)	5:15 5:30-6:45 6:45-7:10 6:55 8:40-11:30 12:00-12:10 12:30	Leave for the Tashi View Point Enjoy a splendid view of Kangchenjunga (8,586m) Back to Hotel Tashi Delek Sightseeing at " <i>ma Ni 'khor lo</i> " Breakfast at Hotel Tashi Delek Visit to <i>Rumtek Monastery</i> Visit to Stupa and Tibetan Buddhism School Visit to Sikkim Research Institute of Tibetology Lunch at Hotel Tashi Delek

	15:55 17:00-20:00 20:00	Visit to Directorate of Handicrafts & Handloom Visit to Enchey Gonpa(Temple) Free Time (shopping) Diner at Hotel Wrap-up Meeting
<b>Day4</b> 9 February, 2010 (Sikkim, Darjiling, India)	6:00 7:00 7:30-13:30 9:10 10:35-11:00  13:25 13:30 13:50 14:00  14:50 15:45-17:45 18:15-20:30 20:50	Wake up Breakfast Leave for Makaibari Arrival at Rangpo Tourist Centre Look at Traveni View Point <i>"Lopchu-Peshok Samasti Gorkha Land"</i> Arrive at Darjiling Arrive at Makaibari Say "Good-bye" to drivers Greeting with Mr. Swaraj Kumar Banerjee and Host family Lunch at Host Family <u>Speech by Mr. Swaraj Kumar Banerjee *</u> Wrap-up Meeting Dinner at Host Family
<b>Day5</b> 10 February, 2010 (Darjiling, India)	8:30 9:00-13:30  14:00-14:30 14:30-15:00 15:00-16:30  17:00-18:00	Meeting at Factory Office Fieldwork (Eco-tourism take a rest) Lunch at Canteen Shopping at Canteen Fieldwork (Fair-Trade and Biodiversity at Kodobari village and Phool Bri village) (Biodynamic Farming ready to Presentation) Wrap-up Meeting
<b>Day6</b> 11 February, 2010 (Darjiling, India)	10:00	Biodynamic Farming at Tea Factory by Mr. Debabrata Majumder

	10:45 12:05-14:00 14:05-14:30 14:30-15:00 15:00-17:00 17:00-17:05 17:05-17:10 17:10-17:21 17:21-17:45 17:45-18:30 19:00-23:00	Tea tasting instruction by Mr. Banerjee Meeting and Fieldwork Lunch at Canteen Walk to Factory Office Preparation for Presentations Presentation on Fair-trade Presentation on Biodiversity Presentation on Biodynamic Farming Presentation on Eco-tourism Question time to Mr. Banerjee Cocktail party at Mr. Banerjee's House
<b>Day7</b> 12 February, 2010 (Darjiling, Bagdogra, India)	8:30-10:40  11:15 11:20-12:05 12:10 13:40 15:00 16:00 18:00-18:15 18:15-19:45  21:15	Meeting at Factory Office Shopping souvenir of tea Guided Tour at Tea Factory Leave for Kurseong Lunch at Kurseong Tourist Lodge Leave Kurseong Station of Toy Train Jump out of Toy Train Tea Bar at Cochrane Place Hotel Back to Makaibari Say "Good-bye" to host families Leave Makaibari and leave for Bagdogra Arrive at Hotel Royal Sarovar Premiere in Bagdogra Wrap-up Meeting
<b>Day8</b> 13 February, 2010 (Bagdogra, Kolkata, India)	7:00-10:00 11:00 11:30-12:00 13:55 14:55 15:10-17:00  17:30 21:50	Breakfast at Hotel Meeting at hotel lobby Leave for Bagdogra Airport Departure from Bagdogra Arrive at Kolkata Visit to Jainism Monastery Visit to the Ganges River Arrive at Kolkata Departure from Kolkata



Day9		
14 February, 2010	4:30	Arrive at Singapore
(Singapore, Japan)	5:00-7:00	Final Wrap-up Meeting at Singapore
	7:00-8:00	Airport
	9:45	Free time for shopping
	17:20	Departure from Singapore
		Arrive at Narita

#### Speech by Mr. Swaraj Kumar Banerjee \*

In Mr. Banerjee's lecture, various topics were taken up such as rhythm of nature, practicing sustainability, negative effect of atomic bomb, mulching (a wrapping of any vegetation to put on the ground of biodynamic farming), mono-culture and perma-culture. He introduced some specialized methodologies that have been developed in Makaibari for many years, and stressed the importance of holistic ways of farming. One of the concluding remarks Mr. Banerjee made was "So when you drink a cup of Makaibari tea, you are not drinking only high quality Darjeeling tea, but drinking spirit of the Makaibari".

## **2. List of Participants**

**Mr. Yoshiyuki Nagata**

Associate Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:yoshy@pobox.com

**Ms. Moe Mihara**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:mippa\_25315@yahoo.co.jp

**Ms. Nami Ohori**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:namiskysun@yahoo.co.jp

**Ms. Minami Kishi**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:snowdome\_world@yahoo.co.jp

**Ms. Asaki Tabira**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:tiarara\_20@yahoo.co.jp

**Ms. Aya Okanouchi**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:aya\_okanouchi816@yahoo.co.jp

**Ms. Sachi Kitamura**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:skitamura18@yahoo.co.jp

**Ms. Shoko Tanaka**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:kosho-405@mbn.nifty.com

**Ms. Aiko Hasui**

Undergraduate Student, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:luytvxq2119@yahoo.co.jp

**Ms. Kana Matsui**

Specialist/International Coordinator

Email:u1125kana@gmail.com

**Ms. Motoko Takeda**

Staff, University of the Sacred Heart, Tokyo

Email:611tmt@gmail.com

### 3. Our Feelings: Impressions of the Study Programme

#### India Called Me

Aya Okanouchi

What do you think when you hear of India? I'm afraid to say this, but I have only the images of "curry and an elephant." However, I can answer many things now. For example, how Indian people live and what kind of culture they have, I cannot describe this country with one word. I had been to three cities, where Sikkim, Makaibari and Kolkata. Each though, these cities are in the same country, I felt each different. I would like to introduce that I felt in each city.

In Sikkim, I visit an institution where handicapped students could learn skills such as sewing and industrial arts. The eyes of the students who were learning in silence have shining. It touched my heart. Then, suddenly, I saw an object thing that looked familiar. It was a sewing machine which was the same thing as my grandmother's. My grandmother's sewing machine is so old that we can't see it in Japan three days. I was filled with nostalgia when I saw it so far away from home, in spite of staying India.

In Makaibari, I expected a home stay program for three days. I was weak in English, but my host family always listened to me. Especially, my host mother was smiling all the time and she was very cheerful. When I came home late, even though my host mother was sleeping, she woke up and she prepared hot soup for me. I will never forget this hot soup which warmed up my body and my heart.

In Kolkata, there still remained the society and culture of India. It was the city which reminded me of small happiness as around me. When I saw the Ganges, I realized there was a pile of garbage along the river. I could not think it as the "sacred river." I thought: "this river is not a sacred river, so we should clean the Ganges." Then, I told gave my opinion to an Indian guide. However, he answered, "Indian people think that the Ganges is the sacred river, so they can dump the garbage." It doesn't matter if the Ganges is clean or not. The Ganges is the sacred river itself and it is as big an existent as our father. I become convinced that this garbage proved that the Ganges was Indian's source of energy and I believed that this garbage will rest forever.

I learned many things that I usually do not realize such as environment and education. It is said that "there are people who were called by India." Now, I am convince that "India Called Me".

## “Touchable”

Sachi Kitamura

To tell the truth, I was scared of going to India because it was my first time to visit there. I was interested in India though, I had no good image of it. When I arrived in India, the very first thing I saw that made me shocked was the children who were begging for money. I have never experienced such a situation, so I was confused. I wanted to give them some money and let them buy nutritious food, but I couldn't do that because it might destroy their future. I wondered: “Are they able to do what they want to do in the future? What if they want to become a doctor? Is it possible?” I didn't think there was freedom or sustainability in Kolkata.

The next morning, I saw many crows flying in the gray sky, croaking violently. The atmosphere there was similar to what I felt in the Philippines because people were struggling to survive and face “life” desperately. When I got on a big bus, I realized many people were staring at us. Some people were waving with smiles on their face, but the others were gazing at us with a puzzled face. I saw very few women walking on the street and the surprising thing was that I did not see much couples hanging out in Kolkata. The old custom still took root and could not be gotten rid of. On the other hand, there were a lot of advertisements for internet or cell phone and that showed us the growth of economy. India is sandwiched between advance and progress or newness and oldness.

This time, I went to three areas of India, which were Kolkata, Sikkim, and Darjeeling. Sikkim was one of the most advanced regions and it is called “the pampered city” under the government. I found that Gorkahland attempted to be independent as a new region. In the meanwhile, everyone was having earth, animal, human-friendly life in Makaibari. For example, they used methane gas emitted from cow's manure for their gas ring. Other than that, they have carried out many eco-friendly projects such as ecotourism and the camp of cataract. Those were wonderful attempts which we must call “sustainability”.

In addition, Mr. Banerjee, who is the owner of the Makaibari tea estate, established equal relationships with the workers. The workers in Makaibari call each other “partner” to get rid of the concept of “employer” or “employee”.

It surpassed our sense, but also it was a new and ideal notion. I felt that Makaibari would be the most advanced city in the world. Of course, there still remained the oldness, but everything was just suitable for the Earth and our lifestyle. For instance, people do not have washing machines or vacuum cleaners. Those mechanics need much electricity and do not make people think of garbage problems seriously.



In India, I met many great people. I learned the beauty of patriotism from Mr. Paul. Mr. Paul was the guide for Kolkata and he taught us about the customs, the culture, the history, and the people. When he mentioned about water, he said, "Each country has different kinds of germs in the water. Therefore, you might get upset." I was very surprised by what he said because I was used to saying that water in Japan is too clean, so bacterial water in India might upset my stomach. How he explained or the words coming out from him were respectful. Another amazing person was Mr. Udai. He was the guide for Sikkim region and he showed us the breadth of his mind. I asked him one question: if he believes in any religion or not. The response was that he did not possess any religion in particular. He said he believes in himself more than anything else, yet he accepted everything. He just took good thoughts from each religion. I was so surprised because I thought all people in India believe in some kind of religion. I thought Indian people's energetic strength and passion came from the belief.

As well as those two people, Mr. Banerjee's words are still drifting in my mind. "Sustainability is a way to freedom" was his saying. I do not know what freedom means, since freedom includes many factors. My definition of freedom is having a lot of choices and doing what I want to do at any time. In order to make it possible, we should stop global warming or natural disasters and keep resources. Also, money should be divided equally and all people should have rights to receive education. Another I was impressed was: "The profit should be returned to the society." I think every one of us living on earth should afford to work for smiles. Especially, all corporations should take actions and be responsible for CSR. Don't you think that "returning what we got" is a terrific way of thinking?

Finally, I want to say sorry to people living in India because my image of India was a stereotype created by the media. I did not know that India was such a diverse country. I am convinced that the Indian economy will grow rapidly. I really appreciate everyone who helped to make this tour meaningful. I promise people and India itself to tell the Japanese people how fascinating India is and give them a cup of tea with Makaibari spirit.

## **India as "Home" of our world** **—Variety of Smiles— ☺ ☹**

Shoko Tanaka

It was my very first visit to India. During this trip, I made a lot of discoveries about India and myself. The most impressing discovery of all was that there was a huge gap

between what I had imagined about India and the real India. When I saw the real India, I was amazed at the rich diversity of the country. It was like the whole universe all by itself. Though we saw just a part of India, that is, Kolkata, Sikkim and Makaibari, each area had a totally different history, culture, religion, people, lifestyles and situation. Being such a diversified country, it was also tolerant to foreign people. We were accepted and welcomed soon with a lot of smiles. As we moved on gradually, I found that all the smiles were not equal. I would like to explain the various smiles which I met during this trip.

☉ The first smile which I met at Kolkata had very strong power. No sooner did we arrive at Kolkata than I was shocked. Even a little girl living hand-to-mouth approached us friendly and gave us a big smile with sparkling eyes. Her eyes were as if they were trying to say something, but I was a little confused and all I could do was just smile as she did for me. At that time, I felt something of strong energy from her smile. People in Kolkata seemed to know how to live like a human being. I think they are living a fulfilling life.

☉ The second smile was a proud one which I met at Sikkim. All the people had their own philosophy and they were proud of their land and life with nature. When we saw the great mountain Himalaya, it seemed like it was protecting the people living there, and that people appreciated the daily life water they received from the mountain. Though the people around the mountain are of different religions, all of them feel the greatness of the mountain and they respect nature. Then I realized nature enabled the different religions to coexist.

☉ The warmest smile I have ever experienced is the one I met at Makaibari. To my surprise, although I was a stranger, they never failed to pass by without greeting me with a smile. It always warmed my heart and I have never experienced such a nice feeling in Japan. People in Makaibari seemed to be satisfied with the quality of their life in social, ecological, cultural and spiritual sense. This is because Makaibari ecovillage has many systematic and holistic approaches to sustainable living that encourage community and people to develop. I think a business link to sustainability is very important, such as the organic tea garden in Makaibari.

Thus India had rich diversity, even their smiles. However, all of them were surely unique to India. And then I wondered what makes them smile and why they always look so happy. The answer was simple. They just have a sustainable mind. What I mean by a sustainable mind is loving each other, thanking god, living in peaceful co-existence with nature and human beings, accepting diversity of cultures, religions, languages and races. When all of these come to realization, the society can become sustainable.

At Kolkata, I learned what "love" is from our great teacher, Mother Teresa. Nobody can live without being loved, because all human beings naturally depend on each

other. Love gives us peace of mind, so we should share our love with others and it will make the world peaceful. I think this is one of the important aspects of sustainable minds. At Sikkim, I found the coexistence of nature and people. Especially at Makaibari there was a sustainable movement. The people integrated holistic and sustainable practices. I learned that we have to use natural resources keeping the future generations in mind. Also, in order for humans to live sustainably, natural resources must be spent at replenishable level.

When I returned to Japan, my hometown, I felt everything is too convenient for me. I noticed we have developed too much just for our own benefit. How boring it is to live in a world which has little human warmth! Once I had prejudice that India was a developing country. However, when I actually went there, I realized they lived a life that was richer than ours. It is sure that we are more developed in terms of material things, but India has more than that. That is a rich mind. I do not know which life is truly rich, but at least, I prefer the Indian lifestyle to ours. This is because they have great nature, human warmth and a sustainable mind. Then I wish more Japanese to know about the rich mind of the Indian people which we do not have. They know how they can learn from the past when they want to know about the future and they always think of the Earth and future generations. I believe that a sustainable society can be born only when we have these rich minds. The way to sustainability will continue.

## **The Impression of Makaibari**

Aiko Hasui

'The most lovely place I've ever been in my life!' This is my impression of Makaibari. To me everything in Makaibari is very warm to people who visit and stay there. I'm sure everyone who stays Makaibari, would be love to come back to Makaibari.

Actually, on the first day I arrived in Makaibari from Shikkim, I was so nervous of the homestay program in the village. I have an experience of homestay for a year about 3 years ago in England. Maybe the reason why I was so nervous of the homestay were I couldn't imagine the life-style of Makaibari. Also before I reached Makaibari, I caught sight of many people sleeping on the street. Thus I was frightened. I knew India is making exciting progress of late and same time they still have poor side. Before I went to India, I made sure of there are many sad things. In Japan, there are many reports of poor countries and poor people all over the world. I used to watched them and always sorry for them. It

would be very rude to the people made love in bad situation(e.g. Street children, homeless, refugees and so on). Because of it was 'indirectly', I did just feel sorry but in 'directly' the things were changed. I had no idea what I should express my impression when I saw people sleep on the street with nearly naked. That is why I was nervous on the first day of homestay.

Surprisingly and fortunately, the homestay in Makaibari was interesting and it was one of the best experience in my life. In my case, I stayed with three other student in three people family. The family welcomed us and warmly. The food cooked by host mother was absolutely delicious and the host father and host sister always made we' were happy with everything in the house. When I had fever, they were really worried and cared for me. While I had fever I really thanked my hostfamily and also my family in Japan. I did not recognize that I was always cared of someone around me. Even like hostfamily they are not my real family but they cared me like they do for them family member.

From these experiences from ESD study tour, I learned and feel many things. Now I have vision for own future. For achieve my vision, it must be important to study but also proud-of own-self as well. Why I think so is because if each one of the people live in the world don't proud of ownself and also they can't love someone even ownself and can't find why we live now.

In conclusion, I should thank all people who support us in ESD tour. I appreciate that very much.

If it is possible I would like to see my host family in Makaibari again.

## **Nine Days**

Nami Ohori

When I stayed in India, I had valuable experiences and great human experiences. This tour was very full and 9 days were too short for me. I felt time passing so fast. I want to explain three memories which remain sa the deepest part of my encounters in India.

First, the eyes of the people were different. I spent a lot of time on a vehicle. For example, I used the bus in Kolkata and I got on the car and toy train in Darjeeling and Sikkim. I was aware of the eyes of the people who looked at me in each place. In Kolkata and Gorkhaland, people seemed to be cautious to me. I felt as if I were a suspicious person invading their territory. Perhaps that feeling might come from my prejudice because I was visiting a foreign country which I had never been before. However, the eyes of the

people in Makaibari were obviously different. For example, at first they seemed to be nervous, but once I said "hello." They have become friendly. Therefore, I could ask questions without reserve. The difference between the people in Kolkata and the ones in Makaibari was very impressive.

The second point was when we went to the Mother House. There were so many orphans and handicapped children. I saw them following after me and specify which made me sure that the children needed love. Also, when I looked at the baby's face which was just about the size of my fist and had tubes through his nose, I thought the little life have the will to live instinctively.

Finally, by leaning biodynamic farming with my own eyes and body was impressive. I could change my stereotype and I learned that the biodynamic farming is one of the organic farming and the use of a power of the space and cow horn for farming is fact. I could accept those things because I had a full realization; I saw the farmer's expression, I bind walked around the field and tea garden.

Those three things still remain in my mind clearly. I used to have several questions before I participated in this study tour. Those were; What is sustainable society like? ; What should I do to better the live of various habits, races and religions? Why is the people atmosphere different by region even though, they live in the same country.

I think these questions are closely related with my three impressions. The common important characteristics are "the importance of foundational life" which Professor Nagata said and "having a common purpose" which are the words from Mr. Banerjee. "Foundational life" means to be spiritually, financially and materially comfortable. I think "having a common purpose" is a means to connect people with different habits, race, religion.

However, I haven't arrived at the answers to my questions. I think I am still in the beginning of the stage. Therefore, I want to keep in mind what I felt, saw and experienced forever. Then I will go on to the next stage.

## HOPE LAND

Minami Kishi

Gandhi said, "Whatever you do will be insignificant, but it is very important that you do it."

In Makaibari, I met people, animals; and nature which were coexisting. These were our original appearances. Makaibari was not changed by world. We should go back to



the basic, and, we should look back. Makaibari was sustainable.

However, I'm one of those people who has been changed by the modern world. As time goes by, I always absorb "new" foreign cultures. Also, people can live so conveniently and easily that the amount of my desire has increased more and more. The others would be similar to me.

I realized that we shouldn't be like that. We should plow the land and produce our food for ourselves, and cooperate with each other to lead a daily life. This lifestyle used to be natural. I wondered if we were able to do that. I found full of kindnesses in the life and the people of Makaibari. I was able to learn that we could understand each other regardless of the difference of our races.

We always wish us and people around us great happiness. From now on, however, we must take into account not only ourselves but also others such as our nations, people around the world, animals, and nature. It might be taken as a matter of course, but it is a fact that I found most important in this study-tour. Nowadays, this world gets more and more globalized. I felt how ironic it is to know this fact in the area which was far away from globalization.

When I stayed in India, in spite of the short period, I felt and learned a lot of things. Meanwhile, I couldn't help thinking how ignorant I was. I could leave fair trade and the situation of Kolkata unknown. Ignorance might bring happiness, but it is a terrible thing.

Mr. Banajee said, "In the past, I used to visit scientists and farmers who run tea garden to hear them talking. At that time I was made fun of each time I visited them, but now, the situation reversed. Many scientists visit me and hear my talk. Sometimes, I was arrogant, so a lot of disservice returned to me. Ignorance is one of the most frightening things, I think. I know that I'm ignorant. Therefore, I say, "Welcome to my ignorance tea garden!" We must keep on learning. It is foolish to stop learning. " I want to keep his thoughts in mind to live in the future.

Thank you, My great host family! Thank you, Makaibari! Thank you, my friends! Thank you Professor Nagata! Thank you Mr. and Mrs. Banajee! This study-tour is my treasure.

"Since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defenses of peace must be constructed." This is written in the UNESCO constitution.

I wondered What the "defenses of peace" is. I have been looking for the definition for a long time. It is difficult to tell this answer, but I could understand just a little by this study tour.

## MISSION

Asaki Tabira

"As a Buddhist monk, my concern extends to all members of the human family and, indeed, to all the sentient beings who are suffering. I believe all suffering is caused by ignorance. People inflict pain on others in the selfish pursuit of their happiness or satisfaction. Yet true happiness comes from a sense of peace and contentment, which in turn must be achieved through the cultivation of altruism, of love and compassion, and elimination of ignorance, selfishness, and greed. The problems we are facing today, for example, violent, destruction of nature, poverty and hunger are all created by human beings and that can be resolved through human effort, understanding, and a development of a sense of brotherhood and sisterhood. We need to cultivate a universal responsibility for one another and the planet we share. "

This is from a speech of Dalai Lama when he received the Nobel Prize for Peace. Through this study tour, I strongly understood the thought of Dalai Lama: a community which connects mutually and depends on each other thick and fast, and my brother, who have each different language, culture, history and hair or skin's color, live on the same earth. Now, people are interested in global problems, global warming, world depression, for example. Therefore, I think I also understand the connection with the world and that importance in my head. But through this study tour, I noticed that I had led an egoistic life and I had been indifferent to my brothers who live in the same world. So, needless to say, India is an intense place for me.

Nine hours have passed since I left Japan, saying farewell to the accustomed beaming neon flights, people's smiles and the airport like bare shed and people's stern faces. The uncomfortable warm air, the bustle of the big city of Kolkata, and all the sights were real people's life of poverty and hunger. The scene was beyond my imagination. There were houses like ruins, dogs all skin and bones, and lonely street children. I could not think of people's life in Kolkata and my life is the same age, same world, and same people's life. I was deeply distressed to see the people's life, and I wanted to close my eyes. The city of Kolkata is covered with bloody air, and people's loneliness and sadness. The fact which I keep myself away from was a terrible shock to me. I was speechless from shock.

But there is a comfortable house in Kolkata. The house is no different from the other houses. However the place around the house had the warmth of the people. So, the house is Mother House where Mother Teresa sleeps in her grave. She received a Nobel Prize for Peace and she was loved by the people all over the world, so I thought of Mother a sleep in the peaceful grave. However, Mother rests in the center of Kolkata which is dogged by

poverty. There, Mother still gives effusive love to people. Mother said, "Love is not sweet word, act, feeling but will and effort involved with pain." The place will not be a good grave, but Mother gives love involved with pain instead of sister, volunteer gathered from all over the world. I think the sight is just what people who depend on each other should be. Then, what is the mission in my life? Mother said, "We cannot do great things. But we can do small things with great love. Love begins by taking care of the closest ones - the ones at home."

## Encounters

Moe Mihara

I was able to have wonderful encounters.

This is my first impression just after I returned my home.

The encounters are not just with people.

Religions, cultures and nature .The one only there. You can find only in India

These encounters not only moved me but also inspired me to think.

An encounter with a Christian sister who carries on the gratuitous love of Mother Teresa.

An encounter with Tibetan Buddhism overwhelmed me with the unique building and a sutra advocated all at once

An encounter with the Jainism who overturned the image of the religion that I had so far

The encounters with these religions made me realize that I was just a skin-deep Buddhist.

Though I cannot value one's religion, I wondered whether I could be able to be involved in the religion of the person. Religion causes war to protect the tradition to follow culture, but brings peace. Religion is the source of all things. I wanted to approach it with respect.

An encounter with a guide who was so knowledgeable that he made the tour unforgettable

An encounter with the tender driver who was kind enough to avoid the rough way carefully

An encounter with the boy who was learning a skill in order to be self-independent although he had a disability.

An encounter with the people in Makaibari Tea Estates welcoming us with warm smiles and greetings

An encounter with the Indian family who said, "We are always here for you to welcome you".

Through these encounters, my love for India has deepened more. I thank those people who taught me Indian cultures and history.

An encounter with Kangchenjunga that is preserved as it is

An encounter with the Ganges which has been stained through development

In both places nature should have been equally respected but in reality they followed totally different paths. However, I felt we outsiders must not change these facts it is because these are also parts of India.

An encounter with the bustling city called Kolkata which is on the way to development

An encounter with the area called Makaibari, where people take good care of nature and themselves

Through these encounters, I was able to see the two sides of India.

When I said hello, the people in Makaibari always stop what they are doing and greet me with warm smiles. On the other hand, the people whom I met in Kolkata did not. Thus the difference between villages and cities are clear, and instead of great development, it seems that people in the city leave the warmth of their hearts. I wonder how that happened. I want to think of a good way for these cities to develop without losing their hearts. I believe the cue is in what we learned in Makaibari. I thought Makaibari Tea Estates could establish a sustainable society and foreseeable development as much as they can. This is because the people and nature live together in harmony.

I really cherish and thank these encounters, and I want to deepen what I have learnt from these.

## Wreck and Ash - India

Kana Matsui

Wreck: Why are they praying?

Ash: .....

Wreck: Why are they praying?

Ash: Like a warm in a hand

Wreck: Is it wriggling?

Ash: Wriggling with soil.

Wreck: It lives.

Ash: It is lived.

Wreck: by what?

Ash: It is nothing but life.

Wreck: Here is a prayer.

Ash: Silence.

Wreck: Where is it?

Ash: Inbeing from the beginning.

Wreck: in a warm?

Ash: Too simple to see.

Wreck: on a cow horn?

Ash: Maybe.

Wreck: There is a ring on a cow horn.

Ash: Pregnant.

Wreck: Pregnant?

Ash: Blessed with the moon energy.

Wreck: Give it to the earth?

Ash: From the east to the west.

Wreck: Like a bridge?

Ash: Like a wheel.

Wreck: Wheel of life?

Ash: Life of life.

Wreck: Where is the compassion?

Ash: In a plate of food and a cup of tea.

Wreck: Then, where do we come from?

Ash: Suddenly, the sea in front of my eyes.



Wreck: Where are we?

Ash: On the river.

Wreck: Flowing?

Ash: Flowing with what we cannot see.

Wreck: I can see homely lights of orange and blue.

Ash: Like a star of the Northern Cross.

Wreck: I can hear mantras from a jeep.

Ash: Like a song of a famous star.

Wreck: Where are we going?

Ash:.....

Wreck: Where are we going?

Ash:.....

Wreck: Anyway, I accept it.

Ash: Anyway, not yet.

It was the first time I have been to India and it made me feel the place full of prayers. There are a lot of conflict of religious, races, languages and politics, however, beyond them, people have a spirit of prayer. I expressed my impressions of India using the wreck and ash I saw at Ganga, by their dialogue in prayer.

## About India

Motoko Takeda

People who go to India, they have two different appreciations. One group people says, "I don't want to go to India again". The other says, "I'd like to go to India again". After I went to India, I'd like to go to India again. This is because India has a rich culture, religion. I don't know India to visit one time.

I went to three different areas (Kolkata, Shikkim, Makaibari) and was able to compare the differences. That's why I was able to feel the variety of India.

In Kolkata, the air is dusty. Many cars, bikes, bicycles are jumbled on the road. There are homeless people along the roadsides. Mother Teresa help them. There is India that I had imagined before I visit there.

Sikkim differs from the other tourist areas in the developing countries I have visited before. At first I felt the area was well organized and peaceful. Our tour guide, Mr.

Udai, explained about Sikkim. Sikkim consists of many religious, and political problems. People who lived there don't buy and sell their land. There is a law that forbids the increase of its population. The high priest of Tibet is not allowed to step the Sikkim land. So the priests pray to for his picture. That was strange for me. After I heard these explanations, I realized Sikkim doesn't have much choices of its future.

In Makaibari, people always greet us by saying "namasute" and smile when we pass each other. This is my first experience to visit a peaceful place like Makaibari. To my great regret, my condition was bad. I'd been in bed at that time. My host family took care of me and they worried about me. When I recovered, I heard of the host families were concerned about me, too. I was touched by the Makaibari people's warm hearts at that time. Makaibari is a country rich in natural resources, different from Kolkata. Makaibari has a lot of future, which Sikkim doesn't have. These are the factor of peaceful Makaibari. Finally, there is no one nicer than Mr. Banerjee who lives there. He isn't only the owner of a tea garden but also a pioneer in tea garden. He attracts good ideas and young people from all over the world to make Makaibari a better place.

Finally I met a lot of wonderful people through this study tour. They taught us about their India. That is the most motive power for me to know India more. Especially Miss Ishii joined us. Because I don't speak and understand English well, Miss Ishii explained about India in Japanese. That is more affinity to Makaibari and India.

Special thanks to Mr. Banerjee and Miss Ishii to accept us. Special thanks to Professor Nagata to design this study tour. Thank you. Students, and Miss Matsui for a wonderful time spend.

## **4. Summaries of Field Study Presentations at Makaibari (11 February, 2010)**

### **Fair-trade**

Minami Kishi

Aiko Hasui

Moe Mihara

What attracted us here in Makaibari is how village people use their profit from fair-trade project. Through fair-trade project people become self-reliant. There are three reasons behind this:

1. Women working for ICDS' and paper-working project.
2. Recruitment of ICDS staff by public announcement.
3. Women saying that they are not feeling inferiority because they have their own regular jobs.

Because of these three reasons. We have come to know people in Makaibari have equal right, which is actual self-reliance.

Now I would like to introduce the present situation of fair-trade in Japan. Typical characteristics of Japanese fair-trade is visibility of people who make products. By introducing local people with small pictures and so on, Japanese people get a sense of security and friendliness close relationships between them and people in developing countries. By seeing actually tea farms and talking with local people here, we have now strong sense of connection with them.

Last but not the least, what is important for the Japanese people from now on is to understand real message behind the fair trade logo. Thank you for listening.

### **Biodiversity**

Asaki Tabira

Shoko Tanaka

We researched about biodiversity. We had many valuable exciting experiences in Makaibari. Biodiversity in Makaibari is composed of two elements. What

we have found here is that Makaibari is living in harmony with nature, and with each other. First, we went to tea garden, forest and village, we found connection between nature and people. So, we felt all things in Makaibari live together in harmony. Second, people living in the village said people in Makaibari are like family regardless of their religions. And, we thought different religions coexist. Another point is that through home stay project people in different culture live together. However, we were disappointed at trash thrown away on the street. To reduce such trash, we thought it would be better if they could make rules which give a reward for picking up trash on street.

Next, we would like to introduce good practice of biodiversity in Japan, which is SATOYAMA. SATOYAMA is Japanese tradition of keeping our hills or small mountains in biodynamic way. SATOYAMA is common treasure for Japanese people. However, SATOYAMA has serious problem. Young people immigrate from SATOYAMA to big city, Tokyo. SATOYAMA becomes aging, so the number of people in SATOYAMA are decreasing and schools there are getting closed. But, Japan has rather new trend. That is U-turn and I-turn. U-turn is people who were born around SATOYAMA area, after having worked in such big city as Tokyo, return home and take care of SATOYAMA. Next, I-turn, people who were born in big city want to change their lifestyle, towards more sustainable way, and they start to live a new life in the country. Thank you for listening.

## **Biodynamic farming**

Nami Ohori  
Aya Okanouchi

The most of significant experiences we had in Makaibari is very good cycle among Animals, Nature and Human-being. I could feel this cycle by comparison and with actual feelings. For example, first I did look at a lot of stars in the sky at night. I cannot see as many stars as here as many in Tokyo. Last night when I saw the Orion moved from here to there, in one hour, I felt the earth moving and rotating. Two, when I was walking through the tea garden, I hold worm, soil and many kinds of tree leaves and grasses. Then I have actual feelings about "mulching" and permaculture. Three, today I went to see cows in Makaibari. I found one cow has different cow horn from the other cow. Then, Mr Deb said "This stayed not good environment. So its horn grows

wrong way. But now It is becoming right way grow up and then I feel bio-dynamic has something. Through these experiences in Makaibari we could feel this cycle vividly.

Now, we would like to explain the situation about biodynamic farming in Japan . There are three difficult points. First, in Japan, it's hard to get biodynamic materials such as cow horn and internal organs. Second, manual of Steiner is difficult. There are translated manual but its translation is too complicated to understand. Third, one of the most difficult problems is Japanese people feeling that biodynamic farming is something to do with occult, too mysterious. But, we have come here and seen Makaibari gardens, for example, caws' horn, a lot of stars, tasting tea and then I realized when I felt nature very close, I could accept the concept of biodynamic farming naturally. In Japan, we can't feel nature in daily life. We can't see stars in cities especially in Tokyo. But, I have realized there is the same sky and same stars in Japan too, even if we can't see them. So, when I go back to Japan, I would like to share with my friend, my family and my experiences in Makaibari. Then, they would feel nature more and they may convey their feelings to others. And this process will make it realized that Japanese people can feel biodynamic farming more close to themselves. Thank you for listening.

## **Ecotourism**

Motoko Takeda

Sachi Kitamura

When we studied about ecotourism in Makaibari, I felt five elements of "connectedness", which were mercy of the nature, people, community, history or the past, and the future. I thought the goal of ecotourism here was to cherish that connectedness and mercy by using five senses. Also, the students and local people shared the feelings of togetherness because of the home stay project. Mr. Banerjee is the person who started this ecotourism project. According to Mr. Blon, most people come to Makaibari in spring and autumn because they try to avoid the monsoon season which is from June to the middle of September. The profit getting from the ecotourism goes to the local family, community and office. He said that the home stay project is one of the most important factors since, when we think about the other country, we must know about that country well. Having the experiences of the same lifestyle as local people shorten the distance between them and that make it easier for the participants to think about that country's



issue from the subjective, cultural and historical perspective. He also wants us to enjoy the nature, food, culture, and local heritages. The most different point we have found in Makaibari was that all people are always ready to accept everything. Usually, if foreigners come to my country, everyone would hesitate even to greet. However, people in Makaibari understand what they should do when participants come for ecotourism.

What people in Makaibari do not want to do is teasing nature such as breaking the branches. Mr. Blon said that the nature is always above human being. We must obey and respect the nature all the time.

I felt the beauty of the nature and thought "how wonderful the ecotourism is!" Ecotourism is the best way for people to have interests in the environment and culture. At the same time, I felt the importance of the community. In Japan, the government has power to govern the country and usually community does not have much power. However, as I visited Makaibari, the community would be one of the keys to make the world a better place. If each community is steady and organize each small area, it would be easier for the government to get the country together. Then if each country is stable, then the world would obtain the gift called "peace."

We would like to talk why people in Makaibari are so nice and ready to accept us.

There is a woman whose name is Hatsume. She lives in Aomori which is northern part of Japan. That nature is very similar to Makaibari. She established a house named "Isukia". Many humble people visit her. She always welcomes anyone and shares dinner together. She doesn't do anything, but she saved a lot of people by letting them eat organic rice balls. She thinks all food have "lives". Those who have troubles came to talk to Hatsume about their dilemmas. Just listening to, touching the beautiful nature, and eating human-friendly organic food lead no one to suicide. And she told us that the personality depends on what we eat. Here in Makaibari, people eat organic food and that is why they are so nice and friendly. They always greet us like saying "Namasute" when we pass by.

## 5. What is Our Study Tour in a Nutshell ?



I felt many things through this ESD study tour such as gratitude, sadness, and gladness. Also, I felt that I was supported by many people and many things.

For Kanji, we use "feel" as "感", which includes the meaning of gratitude, "感謝". In addition,

"感" includes "実感" meaning actual feeling.

### Womb

—Naoki Onori

Where do we come from? Where are we going?

From womb to womb, maybe, the place full of prayer.

—Kana Matsui

### ENDLESS

This trip has just begun. Study tour will continue forever in my life.

—Shoko Tanaka



I learned that all human beings need "Roots" and "Wings" as we live on the earth. "Root" emphasizes friends, family, and value, which support us when we get out into the world. "Wings" represent the meaning of achieving the mission in the society. I could extend the "roots" through the study tour, so now it is time for me to get "wings" ready as my next step.

—Minami Kishi

### smile

India became special for me through each wonderful smile.

—Moe Mihara

### Fate

Everything in my life is fate.

—Aiko Hasui

### Continue...

This tour has not finished yet! We have many things to do in Japan to achieve the mission. —Aya Okanouchi

Mother said,

"Love is not a sweet word, act, feeling but will and efforts with pain."

—Asaki Tabira

### Love

### Believe

I felt Indian people's real strength. They believe things that are invisible, even though their religions are different. Belief has very mysterious power which promotes us.

—Sachi Kitamura

### Biodiversity

I felt there are a lot of races, religions, and lives together in one country, India. —Motoko Takeda

## **BOX4. Swaraj Kumar Banerjee Lecture(2009/5/15,17)**

### **At JICA CHIKYU-HIROBA**

**Sponsoring: Fairtrade Labelling Organizations International**

**Co-sponsoring: Makaibari Japan**

**Back up: Japan Self-Service Action**

**Promotion: Tokyo Gus**

**Source: <http://www.makaibari.co.jp/> (Accessed on June 18, 2010)**

The world is at a crossroads today. We are caught between the devil and the deep sea. We are confronted by the twin threats of global warming and global financial meltdown.

The recent global financial meltdown, has brutally exposed the shortcomings of pursuing a course of mindless industrialisation and consumerism. The path of following a course of unabated material desire has virtually brought the global financial scenario to its knees. We need to assess how, where and why we erred. We need to address and redress this horrendous situation squarely and implement sustainable solutions that will ensure a future that is healthy and vibrant for our children in this planet. A planet that oozes positive synergy, to sustain mankind for millennia.

We must realise, clearly define, and firmly grout, the twin pillars that will support the bridge of sustainability. What are these pillars. One is technology that drives industrialisation. We cannot live without technology today, it is an essential part of our lifestyle. We cannot do without mobile phones, computers, T.V, mechanical appliances, automobiles and a host of gadgets that ensure comfort to our daily lives. Technology is there to stay, so this is one pillar which is firmly entrenched. However, though technology is an essential part of our lives, it should be USED. We MUST NOT ever be enslaved by it.

Ten years ago we had no mobile phones, yet we went about our daily business . Today it is an essential part of our lives. We must ensure that we are not dependent on it or else it will be an electronic shackle, that would enslave one. One has to be discerning in its use for ensuring one's harmonious state. We must learn to be disciplined on how to use it effaciously without imbalancing ourselves. This is applicable for all hi-tech machines

that we have surrounded ourselves with. THE KEY therefore is to be discerning on our use of our technological inventions. Proper use as opposed to mindless use, ensures that there's no waste. When there's no waste, it immediately enhances our self-respect. Self-respect in turn enables one to respect all life forms. This on further reflection leads one to quest for liberation, to be free. To be liberated is the ultimate desire for all humans. Unless one is independent- unless one is sustainable ONE CAN NEVER BE FREE, Hence it's one of the greatest tool to unleash to be holistically sustainable. The global financial meltdown, was the resultant of mindless, unfettered investment banking, which flouted the fundamental banking caps. The checks or caps ignored by chief executives for their unbridled desire for huge commissions on utopian bubbles, ultimately caused the bubble to burst. There was just no discipline to respect the fundamental norms, which has resulted in pain, agony and misery for millions overnight. The main door that millions were lulled into walking through for the past two decades, slammed shut overnight. One could no more move freely through the door that one was used to. This has resulted in depression, a huge sense of hopelessness has manifested itself in every walk of life, which was directly or even indirectly linked to this banking sector. There's also a huge opportunity now. The opportunity to show people that the pall of gloom can be lifted. When a door shuts, a lot of windows open. The alternative windows are primed and ready to overcome the twin challenge of global warming and the financial meltdown.

I will then enumerate the sustainable solutions practiced at Makaibari as an answer to this threat, as follows.

The demand for organic, fair traded goods are increasing phenomenally in all North countries, who have been hardest hit by the twin threats. This is the resultant of finally accepting the truth that organically, and ethically grown foods addresses and redresses the challenges that confront us today, holistically. These synergies comprehensively answer the economics, politics and environmental needs, that create healthy soil. Healthy soil of course translates to healthy mankind.

What is Fairtrade? How Does it work? Let me apprise you the origin of Fairtrade. 20 years ago, a Dutchman whilst holidaying in Mexico, was appalled by the conditions of Mexican coffee growers. These small growers eked out a living, under horrendous conditions. Unlike most of us who go on holiday, and perhaps are momentarily influenced by a moving event that tugs at our heart strings, but forget it once we return

to our daily grind of security, the Dutchman embarked on a mission. He cleaned out his own bank account, his wife's and a few of his friends, bought a couple of container sofs the coffee directly from the small growers at a fair price, packed them simply with the legend Max Havelaar(a colonial activist who desired fairplay in erstwhile colonies), and placed them in Netherland supermarket shelves. Sales boomed and the rest is history.Fairtrade under Max-Havelaar grew and grew , and within the next three decades, all the Fairtrade initiatives in various countries where brought under one umbrella Fairtrade Labelling Organisation(FLO). Thus Max- Havellar in europe//Fairtrade (U.K), Transfair(U.S/Germany/Japan), were united under the ying and yang logo under FAIRTRADE. Cocoa, followed coffee uner Fairtrade with great success. These were all disorganised small growers, hence it was relatively simple to appeal to the caring consumer on the plight of the impoverished peasant growers for support. However, when it came to tea, which was a British consumer item, fostered by organised farmlands, under large tea estates, the story became rather complex. There were simply no small growers in global tea who fit the ethical criteria. Finally in 1994, 15 years ago Makaibari was discovered. and was the first tea garden to be licensed under Fairtrade. Why was Makaibari chosen? Out of all the existing tea gardens, Makaibari was the only organised farmlands, that managed her lands and community alternatively. All the large tea estates, even today by and large are run along colonial hierarchial management styles. What was even that was the original code of conduct.

How does it work? The importter in the consuming country, pays a premium over and above the contarct price, which is a dollar and 10 cents for leaf and 50 cents for Fannings Darjeeling tea.The premiums, are sent to a NGO, approved by FLO/Bonn as well as the Reserve Bank of India(the conditions for foreign currency remittances are stringent, and any digression invites severe penalties). The NGO remits the funds directly to the Makaibari Joint Body (MBJB)account. The MBJB consists of 17 members, 10 of whom are ladies and 7 men. 14 are elected members whilst 2 are Management appointed representatives. I am the only permanent member(decreed by consensus) to cast my vote in the event of a time. Needless to add, in its 15 year sof operations I have not once been called in to resolve a deadlock over any contentious project. This confirms the fact, that all sanctioned projects are thoroughly and democratically discussed prior to a sanction.The projects cover a wide spectrum, livestock aquisiton and rearing, bio-gas digester construction, private medical care, educational stipends, creating a state of the art library foor children,innovative afforestation schemes, ladies self help group(SHG) for making paper from a grass, the paper for making Makaibari cartons by



another ladies SHG for Making the Makaibari Exoticas, vocational training and constructing homestays for visitors are a few of the successful schemes implemented by the MBB.

The bio-gas deserves special mention, as it is one of the greatest assets in any rural community. The smell in any dung is the smell of the gas methane. Slurrying the dung, releases the gas, which is trapped in the hod. A rubber pipe from the hod, connects to the cooking stove, and magically one has a source of non-polluting renewable energy on tap. The forests are not threatened. The slurry runs off to the compost pit to be converted to the finest healer of the earth-biodynamic manure. Ladies, anywhere in the world bend their backs the hardest, but are always relegated to second class citizenship. Makaibari was no different. The ladies normally set off at 4 am in the morning, to collect ahead of fuel for the day's cooking, preparing the morning and midday meal, sending their children to school, menfolk to work and themselves as well for 8 hours in the tea fields. On return in the evening, further housekeeping, attending to the children's homework, preventing the men from solving the global problems over a strong glass of homemade liquor, being used as a sexual punch bag and finally to tired slumber, is not exactly a luxury. The bio-gas saves them, 4 hours of intense drudgery (collecting wood from long distances). The use of compost for growing organic fruit, cereal and vegetables, not only saves money spent on chemically grown vegetables from the marketplace, its daily consumption improves health. The sale of excess manure to the tea estate, and milk to the town, generates income. Finally the care and maintenance of the cow and bio-gas unit creates a self-respecting grass-root entrepreneur. When ladies get this opportunity they grab it with both ends and success is ensured. Thus the humble bio-gas empowers ladies, and unless ladies are empowered no community cannot hope to march forward positively. Once this happens, it snowballs into a movement that uplifts not only communities but a nation as well. Hence the Fairtrade premiums have played a huge role in sustaining the tea with composted manure and empowered the ladies by turning them into grassroots entrepreneurs (One of the moving stories in my book "The Rajah of Darjeeling Organic Tea Makaibari" is about Jamuni who has inspired her community in the story. The cow that saved a community, I could read it out to the audience).

The cow too has featured in a great revelation that catalysed Makaibari's management as a model for not only futuristic global rural living lifestyle but also as a forerunner for global managers. 18 years ago, I was chatting with my head dairyman, Tej Bahadur

who runs my private dairy of 6 cows. When I asked him the yield of the cows, he responded by scratching his head furiously. When I forced him to reply, quietly he answered with averted eyes, that it was 4 litres. Having no idea, whether it was good or bad, I asked him, the yield of his own cows. Once Again he resorted to furious head scratching. After a lot of coaxing I managed to learn that his cows gave him 10 litres. Were my cows better housed? Were my cows better fed? Were my cows better cared? Were my cows better exercised? Were my cows received the best medical attention? To all he replied that my cows were infinitely better looked after. Then why should they yield less than half his yield? He had no answer and that was the reason why, he had been dreading me asking this very question for the last 5 years. I was very angry and went home muttering, as I felt Tej Bahdur was stealing the milk, and was offering excuses to cover his back. At home, when my wife Srirupa, asked me the reason for my anger, I told her angrily that Tej Bahadur was a thief. To which she replied, that she found it inconceivable that anyone who I had known all my life would steal me blind, and perhaps the fault lay with me, and I should ascertain the cause of failure. Next morning I tried to milk the cow, and suffered enormously. I was licked, tail-whipped, gored. I made a complete mess. The second cow, I supervised whilst Tej Bahadur milked. Lo and behold it was 4 litres. Obviously he was not stealing, and in the following weeks I became more depressed as I couldn't find the cause of the poor yields. A month later I had the bright idea of randomly collecting data from villagers, as we have over 1000 cows in the seven Makaibari villages. The result was even more depressing, the highest was 14 litres and the lowest 8 litres. Finally two months after my initial discussion, I decided to approach the problem from a different perspective. I decided to discover what our villagers were doing that I was not. In due course I realised, though my care of the cows was superior in every way, I was lacking in one aspect. ALL WERE LOOKING AFTER THEIR COWS THEMSELVES, whereas I was EMPLOYING OTHERS TO LOOK AFTER MY DAIRY. This was a revelation. I then made a study and found that I was the only owner of a tea estate who managed a tea garden, all other estates were managed by professional Managers. I also discovered that the production of Darjeeling teas had declined considerably in the past two decades, whereas Makaibari's had been holding its own even after going organic. IT WAS OBVIOUS THAT IF IT WAS ONE'S COW ONE DID NOT NEED ANY ADVICE ON HOW TO LOOK AFTER IT. It was then that we laid stress on capacity building, for the Makibari community with particular attention to ladies empowerment, as future partners.

Till a decade ago, all management anywhere in the world had control over

dissemination of information. That was power, and most companies tweaked information to suit the flavour of their balance sheet. Thanks to the virtual archive the internet, dissemination of information is no more an exclusive tool of management. Anyone can download, any information from the virtual archive- the internet from any corner of the world today. Whats the role of management for the future? Management has to be motivationally inspirational. How can one actually motivate youngsters who do not desire to have their hands and feet mucky in a farm. They would rather be a rock star. As opined earlier, all management's principal role would be motivate youngsters to be self-respecting human beings, as assets tot heir respective communites. This translates to having them as partners. The new Mantra would be partnership not Ownership. As a first step towards this- Makaibari has initiated a movement in the Darjeeling region- Organic Ekta or Organic Union- whereby over 100 small farmers have become self-respecting grass-roots entrepreneurs, and heres the visual proof of it. Humro Makaibari. This is the future, The future of an equitable world where sustainable partnerships with the soil, with people and the environment, creates a win-win for all concerned holistically.

## <BOX5. Theme Song of the 2010 Study Tour>

### ACROSS THE UNIVERSE

Words and music by J.LENNON/P. McCARTNEY

Words are flowing out  
Like endless rain into a paper cup  
They slither while they pass they slip away  
Across the universe  
Pools of sorrow, waves of joy  
Are drifting through my opened mind  
Possessing and caressing me

Jai Guru De Va Om  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world

Images of broken light  
Which dance before me like a million eyes  
They call me on and on  
Across the universe  
Thoughts meander  
Like a restless wind inside a letter box  
They tumble blindly as they make their way  
Across the universe

Jai Guru De Va Om  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world

Sounds of laughter, shades of earth  
Are ringing through my opened views

Inciting and inviting me  
Limitless, undying love  
Which shines around me like a million suns  
And calls me on and on  
Across the universe

Jai Guru De Va Om  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world  
Nothing's gonna change my world

Jai Guru De Va . . .